

其の手を引つ込めた。

『ちや、あなたは怒つていらつしやるのですね!』と、オブローモフは溜息を吐きながら言つた。『何うすれば私は、あれが一生忘れることの出来ない衝動であつたと云ふことをあなたに確信して戴けるでせうねえ?……無論、今後は決してあなたの歌を聞きませんがね……』

『そんなことを私、信じやしません。私にはあなたの證明は要らないんですもの……』と、オリガは元氣よく言つた。『私も最う歌ひませんわ!』

『ちや、私は最う言ひません。』と、オブローモフは言つた。『が、何うか斯んな別れ方をしないで下さい。でないに私の心に何だか石のやうなものが残りますから……』

オリガは靜かに歩きながら注意深くオブローモフの言葉を聞き始めた。

『若し私があるの歌を聞いて、あゝ、と溜息を吐かなければあなたは泣くに違ひないとおつしやつたことが本當なら、若しあなたが今、斯うして莞爾ともせず、親しく手も出さずに歸つてお了ひになれば、私は……オリガ・セルゲ・ウナさん、何うか同情して下さい!私は病氣になります。私の膝は慄へてみます、私は辛つと立つてゐるのです……』

『何故なの?』と、オリガはオブローモフをチラリと見て突然に訊いた。

『自分でも分らないんです。』と、オブローモフは言つた。『もう私の羞恥心は失くなつて了りましたから、私は自分の言葉を恥かしいと思ひません……が、多分自分の言葉の中には……』

また彼の心臓の中を蟻のやうな物が逼ひ出した。まだ何か餘分なものが心臓の中に現れた。またオリガの愛嬌のある好奇心を帯びた眼附が彼を焼き始めた。オリガも矢張り婀娜やかに彼の方へ向いて、不安らしく彼の答を待つてゐた。

『あなたの言葉の中に何があるのですか?』と、オリガは堪り兼ねて訊いた。

『いや、言ふのが怖いのです。あなたが再び御立腹なさるから。』

『おつしやつして下さい!』と、オリガは命令するやうに言つた。

オブローモフは黙つてゐた。

『さア、何ですの?』

『私はあなたを見てゐると再び泣きたくなります……この通り、私には自尊心がないのです。私は自分の感情を恥ぢないのでから……』

『何故泣きたいのですか?』と、オリガは訊くと、その兩頬には二つの蔷薇色の斑點が現れた。

『私には何時もあなたの聲が聞えてゐます……私は再び感じてゐるのです……』

『何を?』と、オリガは言つたが、涙が胸先から込み上げて來た。彼女ははらくしながらオブローモフの答を待つてゐた。

二人は玄關へ近づいた。

『私を感じてるのは……』と、オブローモフは急いで言ひ了らうとしたが、再び止めた。

オリガは徐々と骨が折れるらしく上り段を上った。

『あの歌です……あの……衝動です……あの……感……赦して下さい、どうか赦して下さい——あなたを見て平気でゐることは出来ないのです……』

『オブローモフさん……』と、オリガは最初殿として言つたが、直ぐに彼女の顔は微笑の光に輝いた。

『私、怒りませんわ、赦して上げてよ。』と、彼女は優しく附け足した。『たゞ此の先……』

オリガは振り返つてオブローモフに手を差し伸べた。オブローモフは其の手を握つて、その掌に接吻した。オリガは軽く彼の肩を握つて、飛ぶやうに硝子扉の中へ駆け込んだ。が、オブローモフは植ゑられたやうに凝と其處に衝立つてゐた。

七

オブローモフは長い間、眼を見開き、口を開けてオリガの後を眺め、長い間、灌木のあたりを見廻してゐた……

他の人達が通り過ぎた。小鳥も飛んで行つた。一人の婆さんは其處を通りすがりに、オブローモフに樹の果は要らないかと訊いた——が、彼は矢張り凝としてゐた。

オブローモフは再び以前の並木路を徐々と歩き出し、其の半ばあたりまで静かに來ると、オリガが落した鈴蘭と、彼女が折つて、悲しさうに投げ捨てた連翹の枝とを見附けた。

(彼の女は何故これを?……)と、オブローモフは想像し出した……

『俺は馬鹿だ、馬鹿だ!』と、オブローモフは鈴蘭と連翹の枝とを拾ひながら突然に聲を發て、殆んど走るやうに並木路を歩き出した。『俺は赦罪を願つた。けれども彼の女は……あゝ、そんなことはあるまい……そんなことを考へちゃ不可い!』

オブローモフは幸福を感じ、乳母の言葉で言ふと、宛然(額に月でも出た)やうな輝かしい顔附をして家へ歸り、長椅子の隅に腰を下すと、卓子の上の埃に大きな文字で手速く(オリガ)と書いた。

『あゝ、大した埃だ!』と、オブローモフは偶と我に歸つて言つた。『ザハール!ザハール!』と、彼は長い間叫んだ。と云ふのは、ザハールは小路の方へ向いてゐる門の傍に駈者と一緒に腰掛けてゐたからである。

『行かねえだか、お前さん!』と、アニシヤはザハールの袖を引つ張りながら嚇すやうに囁いた。『旦那様が先刻からお前を呼ばつて御座るんだよ』

『ザハール、これを見る、何うしたんだ?』と、イリヤ・イリイチは優しく親しさうに言つた。彼は今の場合腹を立てるやうな気分になれなかつたのである。『お前は此處を、埃や蜘蛛の巣などで斯んなに亂雑にして置きたいのだらう。だが、それは御免だ、俺は許さないぞ!斯んなにして置くからオリガ・セルゲーウナは俺のところへ來て呉れないんだ、そして(あなたは埃がお好きなんですわねえ)だなどゝ言ふのだ。』

『そりやア、言ふなア勝手にがす。あの人達の所には五人も召使が居りやすからねえ。』と、ザハールは百つて、扉口の方へ向いた。

『何處へ行くんだ？片付けて掃き出して呉れ。腰掛けることも、眩を突くことも出来やしない。…あまり不潔ぢやないか。これぢや……オプローモフ主義だ！』

ザハールはフツと埃を吹き飛ばして、デロリと横目で主人を見た。

（あれだ！）と、ザハールは考へた。（また何だか厭な言葉を考へ出した！が、聞いたこともあるやうだ！）

『さア、掃き出して呉れ、何うして衝ツ立つてゐるんだ？』と、オプローモフは言つた。

『何を掃くんです？今日、掃きやしたぢよ！』と、ザハールは頑固に答へた。

『掃いたのなら何處から埃が入つたんだ？見ろ、こら、こら！すつかり綺麗になる様に今直ぐに掃け！』

『掃きやしたぢよ。』と、ザハールは言つた。『そんなに幾度も掃いてはゐられぬえだ！埃は街路から飛び込むだから……此處は野原の別荘ですから街道は埃だらけでがすよ。』

『でもね、お前さん、ザハール・トロフイムイチさん。』と、アニシャが別な室から覗いて俄かに言ひ始めた。『初めに床を掃いて、それから卓子を掃くから不可えだよ。埃は再た卓子に上つて了ふだ……お前さん、前に……』

『何だつてお前は、そんな處まで出娑婆つて指圖するだ？』と、ザハールは憎々しさうに唖れ聲を出し

た。『自分の處へ行け！』

『床を前に掃いて、それから卓子を片附ける者が何處にありやすだ？……だから且那樣が怒りなさるだよ……』

『いゝよ、いゝよ、いゝよ！』と、ザハールはアニシャの胸を衝くやうに眩を振りながら叫んだ。

アニシャはにや／＼と笑つて姿を隠した。オプローモフは、ザハールに彼方へ行けと言ふやうに手を振つた。彼は刺繍をした枕に身體を横たへ、心臓の上に片手を載せて、心臓の鼓動を聞き始めた。

（これは良くないやうだ）と、彼は獨語つた。（何う爲たら良いだらう？醫者に相談しようものなら、先生、直ぐにアピシニヤへ行けと言ふだらう！）

ザハールとアニシャとがまだ結婚しない時分には、二人共各自に自分の受持を有つてゐて、一方の受持に手を出すやうなことをしなかつた。で、アニシャは市場通ひと、料理の方ばかりをしてゐて、たゞ年に一度、床を洗ふ時だけ室の取り片附けを手傳ふのであつた。

が、結婚した後アニシャは主人の室に以前より自由に出入りすることが出来るやうになつたので、ザハールに手傳つて、室の中も次第に綺麗にし、殊に亭主の仕事を自分に幾らか引き受けるやうにさへした。それは一つには自由に引受けたのだらうが、一つは確かにザハールから強制的に押し着けられたものに相違ない。

『さア、おい、絨毯を剥ぐんだ。』と、ザハールは命令的に唖れ聲を出した。或は、『お前、あの隅に積ん

である物を彼方へ持つて行き、餘つたのを料理部屋へ持ち込んで呉れ。」と、ザハールは言つた。
斯う云ふ譯で、ザハールは暫く非常に氣樂になつてゐた。室の中は綺麗になるし、主人は怒鳴らないし、(厭な言葉)も口にしないので、ザハールは何も爲る事がなかつた。が、その氣樂も過ぎ去つて了つた——其の理由と云ふのは斯うである。

ザハールとアニシヤとが一緒に主人の室で用事をするやうになると、ザハールは何を爲てもとんちんかんな事ばかり爲出かすのであつた。ザハールの爲る事、爲す事皆な碌なことはなかつた。彼は五十五年の間、此の明るい世間を、何を爲ても、それ以外に、またそれ以上に爲ることが出来ないと言ふ確信を有つて歩いて來たのである。

ところが、こんど二週間のうちにアニシヤはザハールの爲ることが皆とんちんかんであると云ふ事を彼に證明した。のみならず、アニシヤはそれを證明するのは、子供か、或は本當の馬鹿でも相手にするやうに、靜かに、親切に、辱かしめるやうな遣り方をし、その上、ザハールを眺めながら嘲笑つた。

『お前さん、ザハール・トロフイムイチさん。』と、アニシヤは愛嬌よく言つた。『前に煙突を閉め、それから通風口を開けるから再た室の中が冷えて了ふのですよ。』

『ぢや、お前なら何うするだ?』と、亭主は愚かしさうに訊いた。『何時開けるだ?』

『煖爐を焚きつけてからですよ。空氣が入つて來ても、再た直ぐに温まるぢやありませんか。』と、アニシヤは靜かに答へた。

『何と云ふ馬鹿だ!』と、ザハールは言つた。『俺は二十年の間、斯うして來たんだ。が、お前の爲めに此の遣り方を變へてやらア……』

ザハールの戸棚の棚にはお茶や、砂糖や、レモンや、銀皿や、靴墨や、刷毛や、石鹼などが一緒に載つてゐた。

或る時、ザハールは其處へ來て見ると、石鹼は洗濯臺の上に、刷毛と靴墨とは料理部屋の窓の上に、お茶と砂糖とは箆筒の特別の抽斗にあつた。

『お前、俺の物を勝手に撒き散らしたな、え?』と、ザハールは恐ろしい權幕で訊いた。『俺は、直ぐに取れるやうに、故意と一處に置いたんだ。何うしてお前は彼方此處に散らかして了つただ?』

『お茶が石鹼臭くならないようにしたんですよ。』とアニシヤは溫柔しく言つた。

一度など、アニシヤは主人の衣服に蠹魚の穴が二つ三つ出來てゐるのをザハールに見せて、一週間に一度は屹度衣服を拂つたり、乾したりしなけりやいけないと言つた。

『どれ、私が箆で叩いて見ませう。』と、アニシヤは愛嬌よく言葉を結んだ。

所が、ザハールはアニシヤから箆と、彼女が持つてゐた上衣とを引つたくつて以前の場所へ置いた。或時など、ザハールは例によつて、主人が詰らない蜚難くらゐで自分を怒鳴りつけたとか、(俺が蜚難を考へ出したんぢやねえ。)など、ぶつ／＼言ひながら主人の悪口を吐き始めた時、アニシヤは何時から轉がつてゐるのか分らないやうな黒パンの碎片を駄つて棚の上から拾ひ集め、戸棚や器物などを掃い

たり、拭いたりすると、其の時以來蜚鱗もすつかりなくなつた。

ザハールはそれでもまだアニシヤの成功を理解することが出来ずに、たゞ彼女の熱心の爲めであると思つてゐた。けれども。或時、ザハールが茶碗や洋盃などを載せた盆を運んでゐる時に、二つの洋盃を壊し、何時もの通り、悪口を吐きながら盆も一緒に床の上へ投げ出さうとしたことがあつた。その時、アニシヤはザハールの手から盆を取り、他の洋盃を載せ、尙ほ砂糖壺やパンまでも載せて、茶碗一つさへ動かない程澤山に載せ、それから片手で盆を持ち、其の盆を左右に揺りながら二度までも室の中を歩き廻つたが、盆の上の物は是一つさへ動かなかつた。ザハールは之を見ると突然にアニシヤが自分より伶俐なことを明瞭と知つた。

ザハールはアニシヤから盆を引つたくり、洋盃を振り落して、其時から酷くアニシヤを憎んでゐた。『それ御覽なさい、斯うするんですよ！』と、アニシヤは更に靜かに附け足した。

ザハールは鈍よりした眼附で、傲然とアニシヤを見た。が、アニシヤは笑つてゐた。

『おい、婆さん、お前は馬鹿な女だ。お前は自分の伶俐を見せようとするのだ！だが、俺達のオプローモフカの家は斯ねえな家だと思つてゐるのか？でも、皆な俺一人で切り廻して来た。大勢の従僕や子供たちを合せて十五人の家族を養つて来た。だが兄弟、いや、婆さん、お前はそれを知らねえんだ……お前はこんな處で……おい、お前はね！……』

『私だつて良い人へ嫁きたいんですけどね。』と、アニシヤは言ひ始めた。

『いゝよ、いゝよ、いゝよ！』と、ザハールは嚇すやうに眩て胸を衝きながら嘔れ聲で言つた。『お前は此處から、且那の室から料理部屋へでも行つてな……婆アらしい仕事でも爲てゐるがいゝよ！』

アニシヤは笑ひながら出て行つたが、サハールは鬱いだ顔附をして横目でデロリとアニシヤの後を見送つた。

ザハールは大いに自尊心を傷つけられたので妻に對しては陰險な態度をとるやうになつた。が、イリヤ・イリイチが何かを捜させたり、其の捜し物が見附からなかつたり、見附かつても壊れてゐたりした時には、殊に、家の中が混雑になつてゐて、(厭な言葉)を伴ふ雷鳴がザハールの頭の上に鳴り響きさうになつた時には、ザハールはアニシヤに眼くばせをしたり、頭で合圖をしたりして彼女を主人の書齋へ呼びつけ、其處を親指で指差しながら命令的に囁くのであつた。

『且那の許へ行つて見ろよ。何の事だか。』

アニシヤが入つて行くと、雷雨は何時普通も普通の注意くらゐで解決された。ザハール自身も、オプローモフの話の中に(厭な言葉)が出始めると、直ぐにアニシヤを呼んで貰ひたいと彼に言つた。

斯う云ふ具合だから、若しアニシヤが居なければ、オプローモフの室の中には始終怒鳴り聲が響いてゐたことだらう。アニシヤは最う自分をオプローモフ家の者と思つてゐて、自分の亭主と、イリヤ・イリイチの生活や、家や、人格などにある斷つことの出来ない關係を無意識に自分に引き受けて、その女らしい眼と、世話好きな手とを空虚な靜寂の中に元氣よく働かせてゐた。

ザハールが何處かへ出かけて行くと、アニシヤは直ぐに卓子や長椅子などの埃を拂ひ、通風口を開け、窓掛を直し、室の眞中に投げ出されてゐる靴や、安樂椅子に掛けてあるズボンなどを其れれゝの場所に持つて行き、衣服や、机の上の紙や、鉛筆や、小刀や、ペンなどを片付けて、凡ての物を順序よくしたり、皺くちやになつた寢床を引き延したり、枕を直したりして凡てを三つの範圍に片付けて了ふ。それから室中に眼を走らせて、或る椅子の位置を直したり、半ば開いてゐる箆筒の抽斗を閉めたり、卓子の卓布を退けたりして、急いで料理部屋に迂り込み、ザハールの軋るやうな靴音を聞いてゐる。アニシヤは生々した身輕い婆さんで、年齢は四十七であつた。彼女の微笑は忙しさうで、眼は活々と四方に走せてゐた。彼女の頸や腕なども頑丈であつた。彼女の手は赤く粘々してゐて、決して疲れることを知らなかつた。

彼女の顔は殆んど無いと言つても良いくらいであつた。たゞ鼻だけが目立つてゐた。無論、此の鼻も大きくはなかつたが、なんだか顔と別々になつてゐるやうで、如何にも顔との釣合が悪かつた。のみならず鼻の下部が上の方へそれ反つてゐたので、顔はそれに隠れて目立たなかつた。第一、顔の大きさや、色合などが目立たなかつたので、彼女の鼻に就いては誰でも最う直ぐに明らかな觀念を有つことが出来るが、顔の方には何時まで経つても氣が附かないのであつた。

世間にザハールのやうな男は少くない。何うかすると、政治家でさへ良い氣になつて細君の御説を拜聴しながら肩を拵め、竊そりと其の御説に従がつて自分の意見を書く者がある。

何うかすると、或る行政官などは、口笛を吹き苦笑ひをしながら重要事件に關する細君の長口舌を聞き――翌日になると、この長口舌を仰々しく大臣に上申することがある。

斯うした紳士は細君に慳食に當るか、或は柔和に當るもので、たとへ細君をザハールのやうに婆さんとして取扱はないまでも、眞面目な勤務生活を慰める小花くらゐに取扱ひ、共に語るに足る者と思つてゐない。

最う正午で、太陽は疾くから燦々と公園の小路を焼いてゐた。人々は皆な本陰に天幕を張つて、其の下に腰掛けてゐた。たゞ子供や、馬鹿者や、子守達だけは元氣よく歩いたり、正午の日光を浴びながら草の上に坐つたりしてゐた。

オプローモフは矢張り長椅子の上に横はつたまゝ、今朝、オリガと交した話の意味を信じたり、否定したりしてゐた。

『彼の女は俺を愛してゐるんだ。彼の女は俺に對し、燃えるやうな感情を持つてゐるんだ。さうかしら？オリガは俺のことを空想してゐるんだ。俺の爲めにあんなに熱心に歌を唄つたんだ。そして其の音楽が吾々二人を同情で結びつけたんだ。』

オプローモフの中には、自尊心が頭を擡げ、生活と、魅するやうな將來の生活と、たつた今迄無かつた色彩と光明とが輝き始めた。彼は最うオリガと一緒に外國へ行き、スウキツルの湖畔を逍遙したり、イタリヤで、羅馬の古城を訪ねたり、ゴンドラに乗つたり、それから巴里や倫敦などの群衆の中を歩い

たり、それから……それから自分の故郷の樂園で——オプローモフカで生活したりしてゐるやうな氣持になつてゐた。

オリガは愛らしい囁き聲と、美しく眞白い顔と、細そりして優しい頸とを有つた女神である……百姓達は今迄斯んな美しい女を見たことがなかつた。彼等は此の天使の前に俯伏す。オリガは静かに草の上を歩く。オプローモフと一緒に白楊の木陰を歩く。オリガは彼に歌を唄つて聞かせる……

オプローモフは生活と、生活の静かな流と、生活の甘い流と、波打とを感じる……彼は希望の満足と、幸福の充實との爲めに無我の境に陥る……

と、突然に彼の顔は曇つた。

『いや、そんなことがある筈はない！』と、オプローモフは長椅子から起き上り、室の中を歩きながら聲を發て、言つた。『眠さうな眼附をし、血色の悪い頬を有つた可笑しい恰好の俺を愛するなんて……彼の女は俺を見ると何時も笑つてゐるぢやないか……』

オプローモフは鏡の前に立ち止つて、長い間自分の姿を見てゐた。最初彼は不安な顔附をしてゐたが、やがて眼を光らせて莞爾とした。

『俺は街に居つた時より美しく晴々してゐるやうだ。』と、オプローモフは言つた。『俺の眼は曇つてゐない……眼丹が出来たと思つてゐたら、最う癒つて了つたのだ……此處の空氣で癒つたんだらう。それに無暗に歩くと、酒は一滴も飲まないし、寝轉びもしないから……最うエヂプトへ行く必要はありやしない。』

オリガの叔母なるマリヤ・ミハイロヴナから晩餐の使者が來た。

『行くよ、行くよ！』と、オプローモフは言つた。

使者は歸らうとした。

『おい、一寸待つて呉れ！之を遣らう。』

オプローモフは使者に幾らかの金錢を遣つた。

彼は愉快になり、氣が浮々として來た。自然も矢張り晴々しかつた。人と云ふ人は皆な善人で、皆な楽しんでゐるやうであつた。誰の顔にも幸福が漲つてゐた。たゞザハールだけは沈んでゐて、矢張り横目で主人を覗いてゐた。その代リアニシヤは面白さうに笑つてゐた。

(犬を飼はう)と、オプローモフは決心した。(それとも猫……猫の方が良い。猫は愛嬌があつて、鼻を鳴らす。)

オプローモフはオリガの許へ走つて行つた。

(けれど……オリガは俺を愛してゐるんだ!)と、彼は途々考へた。(彼の女は若くつて晴々した女だ!今、彼の女の想像の前には詩的生活が開かれてゐる。彼女は青年を夢見るはずだ。其の青年は黒い縮毛を有つてゐる。恰好の良いすらりとした體附で、其の中には考へ深い力が潜んでゐる。顔には勇氣と、誇りやかな微笑とが現れてゐる。眼には火花がある。其の火花は視線の中に溶け込み、慄へながら、軽く心臓まで擴がつて行く、此の青年の聲は柔かく爽かて、金屬の糸のやうに鳴る。それに、多くの女は

青年や、偉らさうな顔や、波蘭舞の上手や、馬乗の上手などを愛しない……オリガが軽薄な女でないことはよく分つてゐる。輕薄な女の心臓は、口髭でどき／＼する。輕薄な女の耳はサーベルの音に慄へる。が、まだ他に必要なものがあるではないか……それは智慧の力だ。例へば、女は温順しく此の智慧の前に頭を垂れなければならぬ。世間も此の智慧に伏拜しなければならぬ……或は評判の俳優でも良……が、俺は何だ？ オブローモフだ——たつたそれだけだ。あのストーリーリツは俺と違ふ男だ。ストーリーリツには智慧がある、力がある、自分と他人と運命とを支配する才能を有つてゐる。何處に行かうが、誰と交際しようが、まるで樂器を使ふやうに巧みに應對して行く……が、俺は……ザハール一人さへ使へない……自分ならもとよりだ……俺はオブローモフだ！ ストーリーリツ！ あゝ！——彼女はストーリーリツを愛してゐるんぢやないか。と、オブローモフは考へて吃驚した。（彼女は友として彼を愛してゐると言つた。が、それは嘘だ、多分無意識に言つた嘘だらう……男と女との間に友情と云ふものはない筈だ……）

オブローモフは疑念に捉はれて靜かに靜かに歩き出した。

（だが、オリガが俺に媚びるのは何う云ふ譯だらう？……若しもたゞ……）

オブローモフはすつかり立ち停つて暫く茫然としてゐた。

（之れが若し狡猾な計略であつたら……俺は何んな根據から彼女が俺を愛してゐるなんて考へたのだらう？ 彼女は何とも言やしなかつた。これは自惚から來る惡魔の囁きだ！ アンドレイかな！ まさか……そんなことはあるまい。彼女はそんな女ぢやない……そら、彼の女が！）と、オブローモフは彼を迎へに

來たオリガを見て、突然嬉しさに言つた。

オリガは樂しさに微笑を浮べながらオブローモフに手を出した。

（いや、此の女はそんな女ぢやない。瞞すやうな女ぢやない）と、オブローモフは決めた。（瞞す女は斯んな愛嬌のある眼附で見やしない。瞞す女には斯んな誠實な笑顔はありやしない……瞞す女は皆なたゞべちや／＼と饒舌るだけだ……が、此の女は俺を愛するとは言はなかつた！）彼は再た俄かに斯う考へて吃驚したが、更にこの驚きを打ち消して（だが、あの悲しみは何うしたのだらう？……あゝ！ 俺は深淵に陥つたのだ！）

『あなたの持つていらつしやるのは何？』と、オリガは訊いた。

『枝です。』

『何の枝なの？』

『御覽の通り、連翹の枝です。』

『何處から持つていらしつたの？ 此處に連翹は無いぢやありませんか。貴方何處を歩いていらしたの？』

『これはあなたが先刻、折つてお捨てになつたのです。』

『あなた何故それをお拾ひなすつて？』

『あなたが……悲しさに此の枝をお捨てになつたのが氣に入つたからです。』

『悲しみが氣に入る——これは珍しいわ！ 何故なの？』

『言ひますまゝ。』

『聞かして下さいな、何うかね、お願ひですから……』

『何と言はれても、何な事があつても言ひません。』

『御願ひですから。』

オブローモフは頭を横に振つた。

『ちや、私が若し歌を唄つたら？』

『其の時は……或は……』

『そんなにあなたは音楽に感動なさるのですか？』と、オリガは眉に皺を寄せながら言つた。『本當に感動なさるの？』

『本當ですとも、あなたのお歌ひになる歌は……』

『ちや、私、歌ひますわ…… Casta Diva, Casta di……』と、オリガは響きのある聲で調子を取り出したが、それつきり止めて了つた。

『さア、もう良いでせう、聞かせて下さいまし！』と、オリガは言つた。

オブローモフは暫く思ひ惑つてゐた。

『厭です、厭です！』と、彼は以前よりも堅い決心を示しながら言つた。『何な事があつても……決して言ひません！若しもこれが間違つてゐて、たゞ私にさう見えたゞけてあつたら何うします？……決して』

言ひません、決して言ひません！』

『どんな事なの？何か怖い事なんですか？』と、オリガは考へを此の間に向け、燃えるやうな眼をオブローモフに向けて言つた。

やがてオリガの顔は次第に意識に満されて來た。顔の輪郭には到る處に考へと推察との光が輝き出した。と、突然に彼女の顔全體は意識に輝いた。……太陽も矢張り何うかすると雲から出て、彼方の灌木、此方の灌木、此處の屋根と云ふ具合に少しづつ照してゐるうちに突然其の光を光景の全面に注ぐことがある。オリガは最うオブローモフの考へを見抜いたのである。

『いゝえ、さうぢやありません。私の舌はうまく廻りさうもないので……』と、オブローモノは言つた。だから聞かずに置いて下さい。』

『私、最うお尋ねしませんわ。』と、オリガは冷靜に答へた。

『何うして？すか？今、あなたは……』

『家へまゐりませう。』と、オブローモフの言ふことを聞かずにオリガは眞面目な顔をして言つた。『叔母が待つてゐますから。』

オリガは先に行き、オブローモフを叔母の許へ残して置いて、直ぐに自分の室へ入つて了つた。

此の日はオプロ・モフに取つて次第に幻滅して行くやうな日であつた。彼はオリガの叔母の許で此の目を送つた。オリガの叔母と云ふのは、非常に伶俐で、禮儀正しい女で、何時も綺麗な新らしい絹の衣服を着てゐた。此の衣服はよく此の女に似着くのであつた。それから彼女は何時も華美なレースの襟巻を巻いてゐた。頭巾も矢張り趣味に應ふやうに作つたものであつた。平紐などは、殆んど五十歳にもならうと云ふ年配ではあるが、まだ何處となく晴々しい此の女の顔に一種の魅力を添へてゐた。鎖には金縁の眼鏡が懸つてゐた。

彼女の姿態や身振りなどにも威厳が備はつてゐた。彼女は高價い絹の襟巻で巧妙に美飾してゐた。彼女は一寸した時にも、刺繍をした枕に肘を突いたり、勿體らしく長椅子の上に横になつたりした。彼女が仕事を爲してゐるのを見た者はなかつた。屈んだり、縫つたり、詰らない仕事をしたるものは、彼女の顔と、勿體らしい姿態とに釣合はなかつたのである。彼女は召使や女中などに用事を言ひ附けるにも、短かく淡白りと打ち解けた語調で言つた。

彼女は滅多に書物を読むことがなかつた。何か書くやうなことは決してなかつた。が、饒舌することはよく饒舌つた。それも多くは佛蘭西語であつた。けれども、彼女はオプロ・モフが自由に佛蘭西語を使へないことを知ると、其の次の日から露西亞語で饒舌るやうになつた。

彼女は話をして、空想染たことや、伶俐振つたことなどを言はなかつた。彼女の頭には嚴重に線が引かれてゐて、何な場合にも彼女の智慧は此の線の外に出なかつたやうに思はれる。種々な事によつて

推察するのに、感情と、有ゆる同情と、愛とが、他の要素と同等に彼女の生活の中に入りつゝあることも、或は入つてゐることも明らかであつた。これが若し他の女達ならば、若し事實でなければ、たゞ言葉の上だけでも愛を人生の有ゆる問題に關係させ、他のものを、愛とかけ離れて居れば居るだけ、脇の方に押し遣つて了ふのである。

此の女は何よりも先に生活の方法と自分を指導する事と思想と計畫と、計畫と實行とを平均させて置く事を考へてゐた。彼女は油断してゐることがなかつた。彼女は丁度注意深い敵のやうに、何時までも見守つてゐても、何時も其の眼を我々に向けて何事かを期待してゐた。

彼女の要素は世間であつた。だから語調と用心とを有ゆる思想や、有ゆる言葉や、有ゆる行動よりも尊んでゐた。

彼女は誰にも決して自分の心臓の秘密な鼓動を打ち開けもしなければ、誰にも精神の秘密を訴へもしなかつた。彼女の傍には、珈琲を飲みながらお互に内密話をし合ふやうな信用の置ける友達や婆さん達はゐなかつた。たゞ彼女が男爵・フォン・ラングワールと一緒にあることは度々あつた。何うかすると、彼が夜中までも話し込んでゐることもあつた。が、さういふ時には大概、オリガが彼女二人の傍にゐた。二人は多く黙つてゐた。が、それも何か意味あり氣に、伶俐さうに、そして他の人達が知らないことを知つてゐると言つたやうな黙り方であつた。

何うもあの二人は愛し合つてゐるらしい——これは、彼等を見た者が言ひ得る唯一の結論であつた。

彼女は男爵に對しても、矢張り他の人に對するやうに、つまり、丁寧に、親密に、同時に冷靜に落着いて應對してゐた。

之が爲めに種々な悪口も言ひ振らされ、二人の間は古い仲で、二人で外國旅行をしたこともあるなどと當て擦る者もあつた。けれども男爵に對する彼女の態度には、竊かな同情らしいものゝ影さへ見ることとは出来なかつた。これも次第に皆なに分ることだらう。

けれども男爵はオリガの餘り大きくない所有地の後見人であつた。オリガの其の所有地は或る負債の抵當に入つてゐた。

男爵は一種の順序を設けてゐた。即ち、彼は一人の役人に書類を書かせ、眼鏡をかけて其の書類を読み、それに署名して、役人に之れを裁判所に持つて行かせ、自分は世間に於ける種々な關係で此の順序を滞りなく進行させてゐた。彼は物事を速く幸福に片附ける人だと皆なに思はれてゐた。此の信用が男爵の悪評を斷つてゐたもので、人々は男爵を親戚のやうに自分の家へ迎へてゐた。

男爵は殆んど五十に手の達かうと云ふ人であつたが、まだ非常に若々しかつた。彼はたゞ口髭の手入ればかりしてゐた。そして少し一方に跛を引いてゐた。彼はきざだと思はれるほど慇懃であつたし、決して夫人達の傍で煙草を喫まなかつたし、一方の足を他の足のの上に載せもしなかつた。そして人仲で勝手に安樂椅子に腰掛けたり、膝や靴などを鼻のあたりまでも持ち上げたりするやうな若い連中を八ヶ間敷く叱り飛ばしてゐた。それから男爵は室の中でも手袋をはめてゐて、たゞ食卓に就いた時にそれを脱

ぐだけであつた。

彼は最近流行の衣服を着、フロックコートリボンの襟飾りに澤山の平紐を付けてゐた。彼は何時も箱馬車に乗つて歩き、非常に馬を大事にしてゐた。馬車に乗る時にも、彼は先づ馬車の周圍を見廻り、馬具はもとより、馬の蹄さへも調べ、何うかすると白い手巾を取り出して、馬の肩や鬣などを拭いて、綺麗に馬の手入れが出来てゐるか何うかと調べて見ることさへあつた。

彼は知人を迎へる時には丁寧に慇懃な微笑を浮べ、全く知らない人を迎へる時には――最初は冷淡であつても、其の人が男爵に紹介されて了ふと、其の冷淡は矢張り微笑に變り、紹介された者は、其後、何時行つても其の微笑で迎へられた。

彼は種々なことに就いて、例へば善行や、價值問題や、科學や、世間などに就いて同様に明らかな考へを有つてゐて、その考へを瞭然した、或る學校の爲めに書かれ、社會指導の爲めに世に發行された文章のやうに瞭然した規則正しい文句で言ひ現してゐた。

オリガと叔母との關係は、其の時まで非常に單純で平和であつた。彼等が適度を越えた優しさに陥るやうなことは決してなかつた。かと言つて、彼等の間に不満の影が横たはつたことも今迄になかつた。

これは、一つはオリガの叔母なるマリヤ・ミハイロウナの性格に基づくものであり、も一つは、二人の爲めに、別な態度を取らなければならぬやうな動機が少しも無かつたことに基づくものであつた。叔母の頭には、オリガの希望に全然反する事をオリガに求めようと云ふやうな考へは餘ほども浮ばなかつた。

つた。オリガもまた、叔母の希望を實行しまいか、叔母の勧めに従ふまいなど、云ふやうな考へを夢にも持ったことがなかつた。

其の希望は何んな事かと云ふと、それは衣服の選擇や、頭髮の結び方や、佛蘭西劇場か、或は歌劇かへ行かうと云つたやうなことなどに現はれるものであつた。

オリガは叔母に希望されただけ、若くは勧められただけを聞いて、それ以外のことを決して聞かなかつた——が、叔母は何時も冷淡と思はれる程適度を保つて、つまり、叔母の権利が許すだけの事を言つて、それ以上の事を言はなかつた。

此の二人の關係が餘り色も香もないので、人々は叔母の性格の中に、オリガの従順と、特別な優しきとに對する要求があるのだらうかとか、オリガの性格の中に、叔母に對する従順と、特別の優しきとがあるのだらうかなど、解釋に苦しむ程であつた。

その代り、彼等が一緒に居る所を一眼見ただけでも、彼等が、叔母と姪で、母と娘でないことは直ぐに察しられた。

『私は商店へ行くが、お前にも何か要る物はないかえ?』と、叔母が訊く。

『さうね、叔母さん、私、百合色の衣服を換へたいのよ。』と、オリガは言つて、二人一緒に商店へ行くか、或は『でも、叔母さん、私、近頃行つたばかりですもの。』と、オリガが言ふこともある。

叔母はオリガの兩頬を二本の指で挟んで、彼女の頬に接吻をする。オリガも叔母の手に接吻をする。

そして一人の方は商店へ行き、一人の方は家に残つてゐる。

『再たあの別荘を借りようかねえ?』と、叔母は訊くのもなければ、また自分の考へを述べるのでもなく、たゞ、自分で考へて見てゐるが、何方とも決らないのだと云つた風に言ふ。

『さうね、彼處は良い處よ。』と、オリガは言ふ。

二人は其の別荘を借りる。

が、若しもオリガが、

『あゝ、叔母さん、あなたは此の林と砂原とに飽き飽きなさらないのですか? 何處か別な處を捜した方がよかありませんか?』と言ふと、

『捜して見よう。』と、叔母は言ふ。『だが、オレーニカ(オリガの愛稱)劇場へ行かないかえ?』と、叔母は言ふ。『今度の劇は此間から評判が良いんだよ。』

『行きませう。』と、オリガは答へる。が、其の答へには叔母の氣に入りたいと云ふ忙しい希望もなければ、また従順の現れもない。

何うかすると、彼等は一寸した口論をすることがある。

『何ですね、これ、お前の顔に緑色の平紐が似合ふと思つてるのかい?』と、叔母は言ふ。『藁色の平紐にするが良い。』

『でも、叔母さん、私、最う六通も藁色の平紐をかけたんですから、人が見て笑ひますわ。』

『ちや、Pensee だなや』』

『あれを、叔母さんお好なんですか？』

叔母は凝つと見て、徐かに頭を振る。

『お前の好きなやうにするが良いさ。私がお前なら、Pensee か薬色にするのだけれど。』

『厭ですよ、叔母さん、私、これにするわ。』と、オリガは優しく言つて、自分の好きな平紐を附ける。

オリガは叔母に相談を持ちかけても、権威者に相談するのだと思はなかつた。権威者の命令はオリガに取つて法律でなければならなかつたからである……で、彼女は凡ての他の、自分より経験の多い女に相談するのだと思つてゐた。

『叔母さん、あなた、此の書物をお読みなすつたの——何な書物なのですか？』と、オリガは訊く。

『本當に詰らない書物だよ！』と、叔母は言つて書物を自分の方へ引き寄せる。が、それは書物を隠すのでもなければ、オリガがそれを讀まないやうな方法を取るのでもなかつた。

またオリガにも其の書物を讀みたいと言ふ考へは毛頭浮ばなかつた。が、若し其の書物をオリガが讀んで良いか何うか二人に判断が出来ない場合には、それを男爵フォン・ラングワーゲンか、或はシトリツがある時は彼かに訊き、彼等の判断に従つて讀むとも、讀まないとも決めた。

『ねえ、これ、オリガ！』と、何うかすると叔母が言ふ。『ザヴァードスキイの許でお前の傍に度々近寄る、あの若い人のことに就いてね、私に昨日妙な詰らない話をした者があるよ。』

叔母はたつたこれだけを言ふ。が、オリガは其の後も矢張り無頓着に其の男と話をす。

オプローモフがオリガの家に出入するやうになつた事は、叔母にも、男爵にも、またシトリツにさへも何等の問題をも、何等特別の注意をも起さなかつた。シトリツは自分の友を、周圍が整然としてゐて、食後に眠ることが許されなければかりか、片足を片足の上に載せることさへ許されない、そして清楚した衣服を着、口を利くにも一々注意しなければならぬやうな——一言で言へば、居眠ることも、横になることも出来ず、絶えず生々とした時事問題の話が交換されてゐるやうな、さう云ふ家に紹介したかつたのである。

次にシトリツは、オプローモフの眠つた生活の中へ、同情のある若い伶俐な生々した、そして幾らか皮肉な女を入れると云ふことは、眞暗い室の中へ洋燈を入れるのと同じことだと考へた、さうすると其の洋燈のお蔭で暗い隅々まで平らかな光が満ち溢れ、室が幾らか温かくなり、且つ明るくもなる。

ところがシトリツが自分の友をオリガに紹介した結果は豫想外であつた。シトリツは自分が持ち込む物が烟火であらうとは思はなかつた。オリガやオプローモフなどは殊に烟火のやうな性質を有つてゐたのだ。

イリヤ・イリイチは叔母と一緒に二時間も行儀よく腰掛けてゐた。彼は其の間、一度も足の上に足を載せず、何事を言ふにも立派に話をしてゐた。そして二度も叔母の足下に腰架を持つて行つたりした。

男爵は遣つて來ると、丁寧に莞爾として愛嬌よく彼の手を握つた。

オブローモフは益々行儀を良くした。三人は其れ以上に人を欲しいと思はずにお互に満足してゐた。叔母はオブローモフとオリガとが隅で話をしてゐるのや、散歩をしてゐるのやなどを見てゐた……いや、寧ろ一度も見たことがなかつたと言つた方が良かったらう。

若い人と、即ち紳士と散歩をすると云ふ事——これは別問題である。斯うした事なら叔母は何とも言はずに、彼女に特有な機智で、何うかして氣附かれないやうに、他の方法を取ることだらう。一度や二度なら自分で彼等と一緒に行き、三度目には誰か他の者を附けて遣ふことだらう。さうするうちに自然と散歩は止めになることだらう。

が、(オブローモフさん)と散歩をしたり、大きな客間の隅や、露臺などに腰掛けたりしたからと言つて——それから何な結果が生じよう？オブローモフは三十歳になつてゐる。オリガに下らない事を話したり、悪い書物を見せたりする氣づかひはない……が、斯んな考へさへ誰の念頭にも浮ばなかつた。

のみならず叔母は、シトリーリツが出發する前の晩にオリガに、オブローモフを居睡りさせないやうに、居眠りを禁じて彼を苦しめ、彼に命令し、彼に種々な事を頼むやうに——一言で言へば、オブローモフを監督するやうにと言ひ、オブローモフを忘れないやうに、度々彼を呼び附けて散歩や遠乗りなどに引摺り出し、彼が外國へ出かけるまで有ゆる方法で彼を動かして貰ひたいと頼んでゐたのを聞いたのである。

オリガはオブローモフが叔母と一緒に腰掛けてゐる間は姿を見せなかつた。が、時間は徐かに経過し

て、オブローモフは再た熱したり、冷たくなつたりしなげにならないうやうになつた。今では最うオブローモフはオリガの此の變化の原因を察してゐた。此の變化は彼にとつて、何故か以前の變化より一層心配であつた。

以前の變化の時には、彼はたゞ恐ろしくて恥かしいやうな氣がしたゞけであつたが、今度は心配で、落着いてゐられず、心がぞく／＼して、丁度濕々した雨天のやうに何となく悲しかつた。彼はオリガの自分に對する愛を察してゐるが、まだそれは十分でないことを彼女に悟らせようとした。が、それは實際、取り返しのつかない侮辱であつた。たとへ十分に察してゐたとしても、それは實に氣まづいことであつた！ 彼はたゞ氣取家に過ぎなかつた。

彼は、自分の若々しい處女のやうな心臓の中で悸々と慄へてゐる感情を追ひ拂ふことが出来た。彼の感情は、丁度用心深く、且つ身軽く樹の枝に止つてゐる小鳥のやうに一寸した音にも、またサラサラツと云ふ葉擦にも飛び去るのであつた。

オブローモフは息が詰るやうに慄へながら、オリガが晝餐に出て来て、自分に何を何う云ふ具合に話しかけ、何う云ふ具合に自分を見るかと待つてゐた。

オリガは出て来た。——彼はオリガを見ると身動きをすることも出来なかつた。彼は辛つとオリガを見た。オリガの顔は變つてゐた。聲さへも變つてゐた。

若々しい無邪氣な、殆んど子供らしい笑は一度も彼女の唇に現れなかつた。また、彼女の眼に疑問か、

不審か、單純な好奇心が現れても、彼女は最う何にも訊くことも、知りたいことも、驚くことも無いと云つたやうに一度も眼を大きく見開かなかつた。

彼女の眼は以前のやうにオプローモフに注がれてゐなかつた。オリガはオプローモフを、餘程以前に知り合つて何か教へたことのある人で、でもあるやうに、終には男爵と同じく彼女に取つて何の關係もない者のやうに——一言で言へば、オプローモフはオリガを一年も見なかつたのに、オリガは彼を一年も見てゐたと言つたやうにしてゐた。

オリガには冷酷な點もなければ、また昨日のやうな悲しい様子もなかつた。彼女は冗談を言つたり、笑つたり、以前ならば答へもしまいと思はれるやうな問に「ど〜と答へたりしてゐた。彼女は他の女達の爲ること、彼女が今迄爲たことになかつたことを強ひて爲ようと決心してゐるらしかつた。彼女には、彼女の考に浮んだ事を何でも皆な言つて了はせる自由と自然とが最う無かつた。突然に何も彼も何處へ隠れて了つたのだらう？」

晝餐を済すと、オプローモフはオリガの傍へ行つて、散歩に行かないかと訊いた。オリガはオプローモフには答へずに、叔母の方へ向いて訊いた。

『皆なで』散歩に行かうぢやありませんか？』

『遠くぢやないのでせうねえ。』と、叔母は言つた。『私の洋傘を持つて来るやうに言ひ付けてお呉れ。』皆な出かけた。皆な遠くベテルブルグの方を見ながら氣のない歩き方をしてゐたが、林まで行くと、直

ぐ歸つて露臺へ出た。

『あなたは今日、歌を唄ふやうな氣持ぢやないと見えますね？ それで、私はお願ひするのを遠慮してゐるのです。』と、オプローモフは此の要求が實行されやしないだらうかとか、此の要求がオリガを快活にしないだらうかとか云ふやうな豫期を持ちながら訊いた。

『暑くつてねえ！』と、叔母は言つた。

『大丈夫よ、歌つて見ますわ。』と、オリガは言つて、ロマンスの一曲を歌つた。

オプローモフはこれを聞くと、自分の耳を信ずることが出来なかつた。

今歌つてゐるのはオリガではない。以前の情熱的な音聲は何處にある？

オリガは、處女達が人仲で歌を強ひられて、何の感動もなく歌ふやうに、淡白りと法則通りに歌つた。

オリガは歌から自分の心を抜いてゐたので、聽いてゐる者の神経は少しも感動しなかつた。

オリガは何か計略んでゐるのだらうか、それとも裝うてゐるのだらうか、或は怒つてゐるのだらうか？ 全然察することが出来ない。彼女は愛嬌よく見、快活に饒舌つてゐる。が、其の饒舌り方は矢張り今の歌と同じである。他の處女達の饒舌り方と同じである……何うしたのだらう？

オプローモフはお茶が出るのを待たずに、帽子を取つて挨拶をした。

『始終入らして下さい。』と、叔母は言つた。『平日には何時も私共ばかりですから、若しお怠屈でなかつ

たら入らして下さい。日曜日には大概何方か見えてみますから——でもお怠屑でさへなければ……」
男爵は慇懃に立ち上つて、オプローモフにお辭儀をした。

オリガは親しい知人としてオプローモフに挨拶をした。が、彼が出て行くと、彼女は窓の方へ振り向いてオプローモフの後を見送り、だん／＼遠ざかつて行くオプローモフの足音を靜かに聞いてゐた。
此の二時間も経ち、次の三四日も経ち、尙ほ幾週間か経つうちに、オリガは或る力強い影響を感じ、凡ての點に於て著しく進歩した。斯んな急激な力の増加と、有ゆる精神状態の發達とはたゞ女にだけ見ることが出来るものである。

毎日ではなく、毎時に、オリガは生活から講義を聞いた。丁度小鳥のやうに男子の鼻先を閃めいて行くやうな小つぼけな眼にも留まらないほどの経験や場合などでも、處女は其れを不思議に素敏つく捉へるものである。オリガは斯うした経験や場合などの飛び去つて行くのを見送つてゐると、それが描いて行く曲りくねつた線は、消すことの出来ない記號や暗示や教訓となつて彼女の記憶の中に留まるのであつた。

男子の爲めには行先を書いた里標を建てる必要がある場合でも、處女はざわ／＼と云ふ風の音や、辛つと耳に入るくらゐの空氣の震動などで満足する。

何うして、何う云ふ原因で、まだ前の週間まであんなに暢氣であつた處女の顔に、可笑しい程無邪氣であつた處女の顔に突然斯んな嚴肅な考へが現れたのだらう？其の考へと云ふのは一體何だらう？何な事

だらう？その考への中には種々な事が入つてゐることだらう。種々な論理や、男の種々な推理的實驗的哲學や、種々な系統だつた人生觀などが入つてゐることだらう！

つい近頃、處女としてのオリガと別れた彼女の従兄弟は、學校を卒業し、肩章を付けて彼女に會つた時に、元氣よく彼女の傍に走り寄つて、以前のやうに彼女の肩を敲き、彼女と手を取り合つて椅子や長椅子などの間を踊り廻らうとした……が、彼女の顔を凝と視てみると、俄かに顔色を變へ、吃驚して後退りした。まだ子供らしい彼は、彼女が最う女になつてゐることを知つたのである！

何う爲たのだらう？何事が起つたのだらう？芝居ぢやないだらうか？評判になるやうな事件でも起つたのではないだらうか？何か新しい事が起つて、それを最う街ぢやが知つてゐるのではないだらうか？母親も、叔父も、叔母も、乳母も、女中も、皆な何事をも知らない。其んな事が起る時がなかつたのだ。彼女は二度も波蘭踊を踊り、幾度もコントラダンスを踊つたではないか。それに彼女の頭は何事か悩んでゐた。彼女は夜も眠らなかつた……

が、やがて再た何も彼も過ぎ去つた。彼女の顔には最う何か新しい物が現れた。彼女の物の見方は違ふやうになつた。彼女は大聲で笑ふのを止めた。一度に大食もしなくなつた。(彼等の寄宿舎に居つた時のやうに)話もしなくなつた……彼女も矢張り學校を卒業したのであつた。

オプローモフは其の翌日も、其の次の日、即ち従兄弟が幾らかオリガの心を了解した日も、悸々と彼女を見てゐた。が、オリガは以前のやうな好奇心も持たず、愛嬌もなく、全然赤の他人と言つたやうに

單純にオプローモフを見てゐた。

(彼の女は何うしたのだらう？ 今、何を考へてゐるのだらう？ 何を感じてゐるのだらう？)と、オプローモフは焦々しながら自問した。(まるつきり分らない！)

が、男が二十五歳くらゐの時に、二十五人の教授と、圖書館とに授けられたり、或は世間を放浪したりした揚句、また何うかすると精神の道徳的香氣と、清新な思想と、頭髮とを失なつた揚句、辛つと經驗するやうな事をオリガも經驗したのであると云ふこと、即ち、彼女が意識の圏内に入つたのであると云ふことは、何時かオプローモフに分る時があるだらう。オリガは斯くも易々と高い價を拂はずに意識の圏内に入ることが出来たのであつた。

『あゝ、實に苦痛だ。實に怠屈だ！』と、オプローモフは言つた。『ウイボルダスカヤ・ストロナへ行つて仕事をしたり、書物を読んだりしよう。それからオプローモフカへ行かう……一人で！』と、やがて彼はひどく悲觀しながら附け足した。『オリガとは別れよう！私の樂園よ、私の光明にして靜かな生活の理想よ、ぢや之れでお別れだ！』

が、オプローモフは四日経つても、五日経つても、何處へも行かなかつた。彼は讀書もしなければ、書きもしなかつた。散歩するつもりで埃だらけの路へ出ても、山まではまだだいたいあるのに、

(暑い中を歩くなんて、餘程物好きだわい！)と、彼は獨語ち、欠伸をしながら歸つて来る。そして長椅子の上に寝轉び、丁度ゴロホーワヤ街道に住んでゐた時分のやうに、窓掛を下ろした埃だらけの室の

中で重苦しい夢を見ながら眠つて了ふ。

夢は非常に漠然とした夢である。彼が眼を醒すと、彼の前には種々な物を載せた卓子や、雑煮や、叩き肉などがある。ザハールは夢を見てゐるやうに窓の方を見ながら立つてゐる。他の室ではアニシヤが皿の音をさせてゐる。

オプローモフは晝餐を済すと、窓の方へ向いて坐つた。怠屈である。氣分が悪い。矢張り一人なのだ！矢張り何處へも行きたくもなければ、何も爲たくない！

『これ、御覽なさいまし、且那樣。隣から猫の子を持つて参りました。要りませんか？お前様、昨日欲しいと言つて御座つたに。』と、アニシヤは言つて、オプローモフの氣を紛らさうと思ひながら彼の膝へ猫の子を載せた。

オプローモフは猫の子を撫で始めた。が、猫の子の相手では矢張り怠屈であつた！

『ザハール！』と、彼は言つた。

『何で御座りやナだ？』と、ザハールは氣のない返事をした。

『俺はねえ街へ行かうと思ふんだ。』と、オプローモフは言つた。

『何處の街でがすだ？室が無えだに。』

『いや、ウイボルダスカヤ・ストロナにさ。』

『此方の別荘から彼方の別荘と移つて歩いた日にや大變で御座りやす。』と、ザハールは答へた。『それに

彼處には、御存じねえだか？ミヘイ・アンドレイチが居りやすだよ。』

『だつて、此處は面白いんだ……』

『ぢや、また引越すがすか？あゝ、あゝ！また疲れることだ。それに二つの茶碗も床の刷毛も見つからねえに。若しミヘイ・アンドレイチが彼方へ運んだのでなければ、失なつたんでがすよ。』

オプローモフは黙つてゐた。ザハールは其處を去つたが、直ぐに鞆と旅行用の袋とを持つて來た。

『ぢや、これは何處へやりやすべえ？賣つ拂つてしまひやすべえか？』と、ザハールは鞆を足で蹴つて言つた。

『何んだお前は、氣が狂つたのか？俺は近いうちに外國へ行くんぢやないか。』と、オプローモフは腹立たしきうに遮ぎつた。

『外國へ！』と、ザハールは突然に莞爾つとして言つた。『お前様の言はつしやることは本當でがすか、外國へ行くなんて！』

『何がそんなに不思議なんだ？無論行く……最う旅行券も貰つてある。』と、オプローモフは言つた。

『だが、誰が外國でお前様の靴を脱いで呉れやすべえ！』と、ザハールは皮肉に言つた。『女中共でがすか？でも、外國へ行かつしやると俺がゐましねえだよ！』

ザハールは再たにやりとした。それが爲めに彼の頬髯と眉毛とは傍の方に押しやられた。

『貴様は何時も馬鹿なことを言ふ！これを持つて行け！』と、オプローモフは悲しきうに答へた。

翌る朝、オプローモフが十時頃に目を醒すと、ザハールは彼にお茶を持つて來て、パン屋へ行く途中で、お嬢様に會つたと言つた。

『何處のお嬢さんに？』と、オプローモフは訊いた。

『何處の？イリインスキイ家のお嬢さんでがす。オリガ・セルゲーウナさんでがす。』

『それで？』と、オプローモフはもどかしきうに訊いた。

『それで、宜しくお前様に申して呉れるつて言はつしやりやした。それからお前様はお壯健か、何を爲して御座るかつて訊きやした。』

『お前様は何と言つた？』

『お壯健でがす、が、何うかしておいで、御座りやすと言ひやした。』と、ザハールは答へた。

『何故お前は自分の馬鹿なお察しを付け加へたのだ？』と、オプローモフは言つた。『何うかしておいで御座りやす！』なんて、お前は何うして俺が何うか爲しゐることを知つてるのだ？で、それから何うした？』

『お前様は昨日何處で晝餐をお上りになつたかとお訊きになりやした。』

『それで？……』

『家でお上りになりやした。晚餐も家でと言ひやした。ところがお嬢様が（本當に晚餐もお家で、すか？）つてお訊きになりやした。だから、本當でがすとも、雛鶏の二羽もお食りになつたと申しやした……』

『馬——馬——馬鹿野郎!』と、オプローモフは怖ろしい聲で言った。

『何が馬鹿です! 本當ぢや御座んしねえか!』と、ザハールは言った。『骨も彼處あそこにありやすだよ。お目にかけてやすべえか……』

『本當に馬鹿だ!』と、オプローモフは繰り返した。『で、お嬢さんは何と言った?』

『笑つて御座つたが、(あんまりお少ないわねえ!)と後あとでおつしやりました』

『そら見ろ、馬鹿野郎!』と、オプローモフは言った。『貴様は俺に襯衣シャツを裏返しに着せたまで饒舌あだ舌つたんだらう……』

『訊かれねえだから、そんなこと言ひましねえだ。』と、ザハールは答へた。

『それから何を訊いた?』

『此頃は何をして御座るつて訊きやした。』

『で、お前は何と答へた?』

『何にもして御座らねえ、たゞ何時いつも寝て御座るつて言ひやした。』

『あゝ!』と、オプローモフは頷うなづくのとこまで拳を振り上げて、酷ひどく悲しさうに言った。『彼方あつちへ行け!』と、彼は嚇おどすやうに附け加へた。『若し此の次に俺のことで其んな馬鹿氣たことを勝手に言つて見る、お前まへを何だうするか分らないぞ! 何なんと云ふ毒々しい奴だらう——此の男は!』

『でも此の年齢としになつて、何しに嘘を言ひやすべえ?』とザハールは辯解した。

『彼方あつちへ行け!』と、イリヤ・イリイイチは繰り返した。

主人が(厭いやな言葉)さへ言はなければ、ザハールは痛罵いたくらゐ何とも思つてはゐない。

『俺われはお前様まへさまがウイボルグスカヤ・ストロナに行きたがつて御座ると言ひやした。』と、ザハールは言葉ことばを結むすんだ。

『行け!』と、命令するやうにオプローモフは叫んだ。

ザハールは出て行つた。彼は客間を呑んで了ふやうな溜息を吐いた。が、オプローモフはお茶を飲み始めた。

オプローモフはお茶を飲んで了ふと、澤山の圓まるパンと乾パンの中からたつた一つの圓パンを食たべた。これはザハールの不謹慎を怖れたからである。それから彼は葉巻を喫ふかしながら机に向つて坐り、何かの書ほん物ものを開けて一頁ばかり読み、次を開けやうとすると、次はまだ切つてなかつた。

オプローモフは紙を指で切つた。其の爲めに紙の端はしには花飾のやうなものが出来た。その書物ほんはシートリツのものであつた。シートリツは面倒なくらゐ厳格な秩序を實行してゐたが、殊に書物に就いてさうであつた。紙や、鉛筆や、其他の細こまかしい物まで在るべき所に置かれてあつた。

オプローモフは象牙の小刀ナイフを取りたかつたのだ。が、其れがなかつた。無論、食卓用の小刀を持つて來させることも出来たが、オプローモフは書物ほんを以前の場所に置いて、長椅子の上に寝た方が良いと思つた。彼は刺繡をした枕に片手を突すいて、素速すばやく横にならうとすると、其處そこへザハールが入つて來た。

『あの、お嬢さんが彼方に來て下せえと言ひやしたゞ……何と言ひやしたつけ……えゝと……』と、ザハールは言つた。

『何故お前は先刻、二時間前に言はなかつたのだ？』と、オプローモフは狼狽して訊いた。

『でも、彼方へ行けと言つて、言はせなかつたぢや御座んしねえか……』と、ザハールは反對した。

『ザハール、貴様は俺を苦しめるのだな！』とオプローモフは憤然として言つた。

(さア、再た自分勝手が始まつた!)と、ザハールは考へ、主人の方に左の頬髯を向けて壁を見てゐた。

(此間のやうに……あの言葉が出て來たぞ!)

『何處だ!』と、オプローモフは訊いた。

『あれ、彼處でがすよ、何と言ひやしたつけ? さうさう、庭でがす、あの……』

『公園か?』と、オプローモフは訊いた。

『さうでがす。公園でがす。(もしお氣に召したら散歩にいらつしやいませんか、私、彼處に居りますから。……おつしやりやした。』

『衣服を着せて呉れ!』

オプローモフは公園ぢうを駈け廻つて、崖や四阿などを覗いて歩いた。が、オリガはゐなかつた。で、彼は自分の心を打ち開けた時のあの並木路を歩いた。するとオリガは其處の腰架に、即ち彼女が枝を折つて投げ捨てた處の近くに腰掛けてゐた。

『私、あなたは最う入らつしやらないのかと思つてゐましたわ。』と、オリガは愛嬌よくオプローモフに言つた。

『私は先刻から公園ぢうを搜してゐたのです。』と、オプローモフは答へた。

『私、あなたがお捜しになることを知つてゐましたから、故意と此の並木路に腰掛けてゐたんです。あなたは屹度此處へいらつしやると思つたものですか。』

オプローモフは(何故あなたはさう思つたのですか?)と訊いて見たかつた。が、彼女を見ると訊かれなくなつて了つた。

オリガの顔はすつかり變つてゐて、以前のやうな、此處を二人で散歩した時のやうな顔附ではなかつた。彼女の顔はオプローモフがオリガと最後に別れた時のやうな、彼をあんなに驚ろかせた時のやうな顔附であつた。彼女の微笑は嘔み潰したやうな微笑であつた。表情も矢張り思ひ詰めた決心を現してゐた。で、オプローモフはオリガと察し合ひや、暗示の爲合ひや、無邪氣な質問の爲合ひなどが出來ないことも、またそんな子供らしい楽しい瞬間が過ぎ去らうとしてゐることも見抜いた。

まだ言つて了はれなかつたが、狡猾な質問をして探つて見ようと思つてゐた種々なことは、二人の間に言葉なく、説明なくして解決されて了つた。それが何う解決されたかと云ふことは分らないが、兎に角、それは過ぎ去つた問題になつてゐた。

『何うしてもつと速くいらつしやらなかつたの?』と、オリガは訊いた。

オブローモフは黙つてゐた。彼は再た何うかして傍觀の位置に立つて、オリガに、自分達二人の神秘的な美しい關係が消え失せたことや、彼女が或る思ひ詰めた考へを作り、其の考へて雲のやうに自分を取り巻き、彼と遂に絶交して彼を苦しめてゐることや、彼が何うしていゝか、またオリガに對してどんな關係を保つべきかを知ることが出来ないことなどを理解させたかつたらしい。

が、オブローモフは、斯んな事を少しでも仄めかさうものなら、先づオリガの眼が益々驚異を現し、次に彼女の態度が益々冷靜を加へ、最初不注意によつて消した彼女の同情の火花がすっかり消えて了ふだらうと感じた。で、彼は再たその火花を靜かに用心深く吹き起さなければならなかつた。が、何う云ふ具合に吹き起したのか、彼には全然分らなかつた。

オブローモフは、オリガが精神的に發育して、殆んど彼を凌駕しようとしてゐることや、最う彼女を子供の信じ易い心に返し得ないと云ふことや、彼等二人の前にルビコンが現れて、彼等の失つた幸福が最う對岸に行つてゐることや、彼も其處まで渡つて行かなければならぬことなどを漠然と覺つてゐた。が、何うなることだらう？彼一人で其處へ渡つて行けるだらうか？

オリガはオブローモフの心に何かゞ生じて來たことも、自分の方に強味があることもオブローモフよりも明らかに覺つてゐた。オリガは公然にオブローモフの心を見て、彼の心の底に或る感情が生れたことや、其の感情が益々激しくなつて表面に現れて來たことなどを知つてゐた。彼女はまた、彼に對して女の狡猾や、訶謗や、魅力など——ソーニチカの武器——が無用で、二人の前には何等の争も起るべき筈

がないことも知つてゐた。

またオリガは、まだ年が若いにも拘らず、此の同感の中では自分が第一の主要な役目を有つてゐると云ふことや、オブローモフからはたゞ深い印象と、羨切つたやうな從順と、彼女の脈搏の一つ一つの鼓動に對する永久の調和とだけとを要求すべきで、意志の活動や、能動的な思想などを要求すべきではないことなども知つてゐた。

オリガはオブローモフをチラリと見て、彼に對する自分の權利を仄めかした。オリガには路案内をする星、若くは光の役目が氣に入つたので、彼女は此の光を鏡のやうな湖水に注いで其處に反射させやうとしたのである。彼女は此の決闘に於ける自分の優先權を様々に働かせた。

種々な事情によつて見るのに此の喜劇、若くは悲劇に於ける二人の登場人物はどんな場合にも殆ど同じやうな性格を、即ち苦しめる男、若くは苦しめる女の性格と犠牲者の性格とを現してゐる。

無論、オリガは優先權を有つてゐる者の役目、即ち苦しめる女の役目を演ずる凡ての女のやうに、他の人物よりも少しく、且つ無意識であつた。が、彼女は自分の満足を拒むことは出来なかつた。僅かに猫のやうな満足を得るだけでは承知が出来なかつた。何うかするとオリガには電光や、豫期しない我儘などのやうに感情の閃きが起ることもあつた。が、やがて彼女は再た俄かに考へ込んで自分の中に閉ぢ籠るのであつた。けれども、オブローモフが自分では一步も進むことが出来ずに、彼女によつて伴れて行かれた處に何時までも凝としてゐることを知つてゐたので益々五月蠅く彼を突いて前進させてゐた。

『お忙しかったのですか?』と、オリガはカンバスに嵌めた小布を縫ひながら訊いた。
(忙しかったなんてザハールの奴が言ったな!)と、オプローモフは胸の中で呻つた。

『さうです、私は一寸した本を読んでゐたものですから。』と、オプローモフはうっかり答へた。

『何を、小説なの?』と、オリガは訊き、オプローモフへ眼を上げて、彼が何な顔附をして嘘を言ふかを見ようとした。

『いゝえ、私は小説を読んだことは殆どありません。』と、オプローモフは酷く落着いて答へた。『私は(発見と發明との歴史)と云ふのを讀んだのです。』

(俺はあの書物を今日、一寸二三枚走り讀みしたが、いゝことをした!)と、オプローモフは思つた。
『露西亞語で?』と、オリガは訊いた。

『いゝえ、英語です。』

『では、あなたは英語をお讀みなすつて?』

『何うか斯うか讀みます。——が、あなたは何處か街へでもいらつしやいませんか?』オプローモフは書物の話を揉み消したいので斯う訊いた。

『いゝえ、家にばかり居りましたわ。私は何時も此處で仕事をして居りますわ、此の並木路で。』

『何時も此處で?』

『えゝ、私は此の並木路が大好きなんですもの。あなたのお蔭で、斯んな並木路を知つたのよ。此處を通

る者は殆んどありませんからね!……』

『私があなたに此處を教へたんぢやありませんか。』と、オプローモフは遮つた。『ね、さうでせう? 私達

二人が偶然に此處へ來たんぢやありませんか。』

『さうですわねえ、實際さうですわ。』

二人は黙つた。

『あなたの眼丹はすつかり癒りまして?』と、オリガはオプローモフの右の眼を眞正面に見ながら訊いた。

オプローモフは顔を赤くした。

『お蔭で、最う癒りました。』と、彼は言つた。

『眼が痒い時は、普通のお酒で洗つて御覽なさい。』と、オリガは續けた。『眼丹は出來やしませんわ。これは乳母から教はつたのよ。』

(何うして此の女は眼丹のことばかり言ふのだらう?)と、オプローモフは考へた。

『それから晚餐を食らないでね。』と、オリガは眞面目に附け加へた。

(ザハール!)と、オプローモフはも少しで憎々しくザハールを呼ばうとした。

『たゞ晚餐も加減して召し食れば大丈夫よ。』と、オリガは仕事から眼を放さずに續けた。『でも三日も寝込んでいらつしやると、殊に仰向になつていらつしやると、屹度眼丹が出來てよ。』

(馬——馬——馬鹿野郎!) オブローモフの内心にはザハールに對する憎しみが慄へた。

『あなたは何を作つていらつしやるのです?』オブローモフは話題を變へようとして斯う訊いた。『花瓶敷よ。』と、オリガはカンバヌを裏返し、彼にその模様を見せて言つた。『男爵にあげるのよ。良くつて?』

『非常に良いですね。模様が大層綺麗です。それは連翹の枝ですか?』

『さうでせう……さうよ。』と、オリガはうつかり答へた。『私、何とでも取れるやうな物を選んだのよ……』

オリガは少し顔を赤めて、手早くカンバヌを返した。

(が、斯んなことが何時までも續いて、彼の女から何にも得る所がなけりや面白くもなんともない。)と、オブローモフは考へた。(他の者なら、——例へばシトリツなら何か掴むだらうが、俺には掴めない。) オブローモフは顔を擽めて、睡さうに周圍を見廻した。オリガは一寸オブローモフを見ると、やがて仕事を籠の中へ入れた。

『森の所まで行きませう。』と、オリガは言つて、籠をオブローモフに持たせ、自分は洋傘をさし、着物を直して歩き出した。『何うしてあなたは元氣がないのです?』と、彼女は訊いた。

『何うしてだか私にも分りません、オリガ・セルゲーウナさん。だが、何うして私は快活になれるでせう? 何うすれば快活になれるでせう?』

『仕事をしたり、もつと人と交際をしたりなさるといゝわ。』

『仕事をするんですつて? 目的さへあれば仕事も出来ます。が、私には何んな目的があるでせう? 目的がないんです。』

『目的は生活することよ。』

『ですが、何の爲めに生活するのかと云ふことを知らなければ、あやふやな生活をして日を送らなければならぬし、また、晝が過ぎ、夜が過ぎるのを喜こんで、夢でさへ、今日は何故生活したか、明日は何故生活しなければならぬかと云ふやうな怠惰な問題を考へ耽るやうなことになるんです。』

オリガは黙つたまゝ、嚴とした眼附をして聞いてゐた。彼女の釣り上つた眉には冷酷が仄見えてゐた。眞一文字に喰ひ締めた唇には、疑念でもなければ、輕蔑でもないやうなものが蛇のやうに匂つてゐた。『何故生活したかですつて?』と、オリガは繰り返した。『でも、どんな存在でも要らない存在はないんぢやなくつて?』

『ありますよ。例へば私のやうな。』と、オブローモフは言つた。

『ぢや、あなたは今迄、御自分の生活の目的が何處にあるか御存じなかつたのですか?』と、オリガは立留つて訊いた。『でも、私は信じませんわ。あなたは御自分を餘り貶していらつしやるのよ。でなければ御自分の生活を見下げていらつしやるのですわ……』

『私は最う生活のあるべき場處を過ぎ去つたのです。ですから私の前途には何にも無いのです。』

オブローモフは溜息を吐いた。が、オリガは莞爾とした。

『何にも無いんですつて?』と、オリガは不審さうに繰り返したが、彼の言葉を信じないやうに、そして彼の前途に何かあることを見抜いてでもゐるやうに、生々と快活に笑つた。

『幾ら笑はれても、』と、オブローモフは續けた。『それはさうなんです!』

オリガは頭を垂れて静かに歩いてゐた。

『私は何の爲めに、また誰の爲めに生活するのです?』と、オブローモフはオリガの後から隨いて行きながら言つた。『何を捜し、何處に思想や計畫を向けて行かなければならないでせう? 生活の花は落ちて、たゞ夢だけが残つてゐるのです。』

二人は静かに歩いてゐた。オリガは茫乎して聞いてゐたが路傍の連翹の枝を引き千切つて、彼を見ずにその枝を彼に與へた。

『之は何です?』と、オブローモフは狼狽して訊いた。

『御覽の通りの枝よ。』

『何の枝ですか?』と、オブローモフは眼を大きくして枝を見ながら言つた。

『連翹の枝よ。』

『それは分つてゐます……が、此の枝は何を意味してゐるのですか?』

『生活の花と、そして……』

オブローモフは立ち止つた。オリガも矢張り立ち止つた。

『そして?……』と、オブローモフは不審さうに繰り返した。

『私の悲哀を。』と、オリガは考へ耽つたやうな眼附で眞正面にオブローモフを見ながら言つて自分の爲てゐることを知つてゐるとも言ふやうに莞爾とした。

見透すことの出来ない雲のやうなものがオリガから漂ひ去つた。彼女は意味あり氣な、而も解り易い眼附をし、故意と書物の或る頁を開けて、其處の或る一部を讀ませてもしたものゝやうであつた。

『私は希望を有てるやうになりました……』と、オブローモフは嬉しさうに興奮して急に言つた。

『確かです! ですが……』

オリガは黙つた。

オブローモフは俄かに甦つたやうになつた。そして此度はオリガの方がオブローモフを見違へるやうになつた。曇りとした睡つたやうなオブローモフの顔は忽ち變つた。眼は大きく開かれた。頬には血色が現れた。思想が動き始めた。眼には希望と意志とが閃めいた。オリガはオブローモフの顔の變化から、此の瞬間に於てオブローモフに生活の目的が出來たことを明らかに讀み取つた。

『生活が、生活が再た私の前に展かれました。』と、オブローモフは譫言のやうに言つた。『あなたの眼の中に、微笑の中に、此の枝の中に、Costa Divaの中に……其處に生活全體があります……』

オリガは頭を振つた。

『いゝえ、全體ぢやないわ……半分だわ。』

『良い方の半分ですか？』

『さうでせう。』と、オリガは言つた。

『ぢや、他の半分は？此の外にまだあるのですか？』

『捜して御覽なさい。』

『何故ですか？』

『先の半分を失くさらない爲めよ。』と、オリガは言つて、オブローモフに片手を渡した。二人は家の方へ歩いて行つた。

オブローモフは喜こんだり、或は盗むやうにオリガの頭や、身體や、縮毛などに視線を投げたり、或は連翹の枝を握り締めたりした。

『之は皆な俺の所有だ！俺の所有だ！』と、オブローモフは心の中で言つた。が、自分で自分を信ずることが出来なかつた。

『あなたウイボルグムカヤ、ストロナへいらつしやらないのですか？』と、オブローモフが家に歸らうとした時、オリガは訊いた。

オブローモフは笑つた。そしてザハールを馬鹿野郎ときへ言はなかつた。

九

其の時以來、オリガに突然の變化はなかつた。彼女は冷靜な落着いた態度で叔母や他の人達と語り合つてゐた。が、其の内部には生活が漲つてゐて、オブローモフと話をする時にだけその生活を感じるのであつた。彼女は最う何うすれば良いとか、何う云ふ行動を取つて良いかなど、誰にも聞かなかつたし、またソーニチカで意識的に自分の考を證明するやうなこともなかつた。

生活、即ち、感情の姿がオリガの前に開かれて来るに従つて、彼女は現象の觀察に眼を見張り、自分の本能の聲を耳敏く聞き、自分が貯藏たくはへて置いた僅かの觀察を易々と信用し、自分の歩いて行くべき地盤を足で踏み締めて見ながら用心深く歩いて行つた。

オリガには相談相手になるやうな者が一人もなかつた。叔母？叔母は、其の答を一つの議論に纏めることも、それを記憶に刻み込むことも出来ない程、輕々しく淡泊おつきりとオリガの間を這つて行くのであつた。かと云つてシトリツツはゐない。ぢや、オブローモフか？けれども、オブローモフは一種のガラテヤガラテヤでオブローモフと話をすると彼女自身もビグマリオンビグマリオンにならなければならなかつた。

オリガの生活は靜かに、他の誰にも分らないやうに充實されてゐたので、彼女は他人ひとの注意を刺戟せず、露骨な情熱や感激などを見せもせず自分の新しい圈内うちに生活してゐた。彼女の爲る事は、他の人には誰にでも以前まへと同じ事のやうに見えたゐたが、實際は全く變つてゐたのであつた。

オリガは佛蘭西劇場へ行つた。が、彼女には戯曲の内容が彼女の生活に何か関係でもあるやうに思はれた。書物を読むと、其の書物には屹度彼女の考への火花を書いたやうな處があつて、彼女の感情の火は到る處に閃いてゐたし、また昨日言つた言葉も、著者が聞いたのではないかと思はれる程に、そして再た彼女の心臓が波立つ程に書いてあつた。

林の中には例の木がある。が、其の木の葉擦れの中には特別の意味が表はれてゐた。つまり、其の木と彼女との間に生きた一致が作られるのであつた。小鳥も單に鳴いたり、囀つたりしてゐるのではなくして矢張り何事かをお互に語り合つてゐるのであつた。斯う云ふ具合に、周囲の物は皆な何か物語つたり、彼女の心持に答へたりしてゐるやうであつた。小花が開くと、彼女は其の呼吸を聞いてゐるやうであつた。

夢の中にも矢張り彼女の生活が現れてゐた。夢には何だか幻影のやうな者が現れて、オリガは何うかすると、聲を出して其の幻影と語り合ふことがあつた。……幻影はオリガに何事かを語つた。が、それが明瞭しないので、オリガは其れを解することが出来なかつた。そして幻影に何か話したり、訊いたりしても矢張り譯の分らないことを言つてゐるのであつた。たゞ毎朝のやうにカーチャがオリガに譚言を言つたと言ふだけであつた。

オリガはストーリーツの豫言を想ひ出した。ストーリーツは度々オリガに、彼女がまだ生活を始めてゐないと言つた。彼女は最う二十歳にもなるのにストーリーツが自分を處女扱ひにすることを悔しがつたこと

もあつた。が、オリガは今、ストーリーツが言つた通り自分が漸く生活し始めたのだと云ふことを覺つた。

『あなたの肉體の有ゆる力が動き出す時に、あなたの周囲でも生活が動き出します。其時あなたは、今あなたの眼に映じない物を見たり、今あなたが聞くことの出来ない音を聞いたりします。神經の音楽が始まつて、あなたは周圍に騒がしい音を聞いたり、草の延びるのにも聞き惚れたりするやうになります。焦躁らずに待つていらつしやい。自てに來ますから！』と、ストーリーツは言つた。

それが來たのである。

『これが力の動搖で、肉體の目醒めなんだわ……』と、オリガはストーリーツの言葉を繰り返して、今迄經驗したことのない戰慄に耳敏く聞き惚れたり、目醒めた新しい力の新しい現れを一つも見通すまいと、悸々しながら鋭い眼附で見たりした。

オリガは空想に陥らなかつたし、また木の葉の突然の顛へにも、夜の幻影にも、夜分、誰か、彼女の耳の上に屈んで、何か譯の分らない茫やりしたことを言つたやうな氣持がする時、其の神祕な囁きにも従はなかつた。

『神經だわ！』と、オリガは何うかすると莞爾として繰り返すことがあつた。さうした時には彼女は涙を流しながらも、恐怖を斥けたり、まだ確固しない神經と目醒めた力との格闘を忍んだりしてゐた。

オリガは寢床から起きて、洋盃に一ばいの水を飲み、窓を開け、手巾で自分の顔を煽きながら夢現から醒めるのであつた。

が、オプロモフが朝に眼を醒すと、先づ第一に想像に浮ぶものは——オリガの姿であつた。オリガは全身を延し、手に連翹の枝を持つてゐた。彼は眠る時にもオリガのことを考へながら眠つた。散歩に出た時も、書物を読んでゐる時も、オリガは常に彼の前に現れてゐた。

オプロモフは心の中で晝も夜も間斷なくオリガと話をしてゐた。彼はオリガの容貌や性格の中に何か新らしいものを發見すると、それを何時も「發見と發明の歴史」の中に書き込み、尙ほ偶然にオリガと出會つたり、オリガに書物を送つたり、吃驚させるやうな贈物をしたりする機會をも發明した。

オプロモフはオリガと會つた時には、彼女と話をしながら一緒に自分の家まで来る。其時、何うかするとザハールが入つて來ることがある。が、オプロモフはオリガと話をする時のやうな非常に優しい柔らかない調子を意識しながらザハールに言ふ、

『おい、禿さん、此間もまた私に磨かない靴を出して呉れたんだねえ。よく見てお呉れ、私はお前の仕事を分擔するのは厭だよ……』

實際、オプロモフはオリガの歌を始めて聞いた其の瞬間から無頓着な性質をすっかり失つて了つた。彼は最う以前のやうな生活、即ち、仰向になつて寝てゐやうが、壁を見てゐやうが、自分の傍にアレクセーエフが腰掛けてゐやうが、或は自分自身がイワン、ゲラシモウイチの傍に腰掛けてゐやうが、そんな事は何うでも良いやうな生活を止して了つた。晝にならうが、夜にならうが、誰をも、又何事をも待たないやうな生活を止して了つた。

で、今では、晝も夜も、朝も晩も、何な時でも、此の凡ての時間が想像されたオリガの姿によつて満されるか、或はオリガのゐない、即ち萎えたやうな怠惰な時間が流れるかの如何によつて、その時間は虹のやうな輝きに満されたり、満されてゐたり、蒼白めたり、憂鬱になつたりするのであつた。

斯う云ふ事は皆なオプロモフの心の中から反射するものであつた。彼の頭には毎日毎時間の網のやうな考へや、推察や、豫感や、不明な苦痛などがあつたので、斯う云ふ事は皆な彼がオリガに會へるだらうか會へないだらうかとか、オリガが何な事を言ひ、何な事をするだらうかとか、オリガは何う云ふ見方をし、何な事を彼に依頼し、何な事を彼に訊くだらうかとか、彼女が彼の答へに満足するだらうか、満足しないだらうかなどと云ふ疑問から生ずるものであつた。そして斯う云ふ種々な考へは彼の生活の根本問題になつてゐた。

『あゝ、若し戀の此の滋味あじわひだけを經驗して、戀の戰慄おそを經驗しないものなら何なに良いだらう！』とオプロモフは空想した。『いや、生活は動き出したのだ。で、何處へ行つても斯う云ふ具合に燃えるのだ！無数の新らしい動搖と、仕事とが俄かに生活の中へ入つたのだ！戀は——人生の一番面倒な學校だ！』

オプロモフは最う幾冊かの書物を讀んだ。オリガは彼に其の書物の内容を話して呉れと言つて、信じられない程の辛抱をしてオプロモフの話聞いてゐた。オプロモフは村へ幾通かの手紙を書き、村長を代へ、シトリツの紹介で隣村の或る人に村の管理を頼んだ。オプロモフはオリガの傍を離れることさへ出來れば、或は村へ行つたかも知れなかつた。

オブローモフは晚餐も食べなければ、最う二週間も晝寝を忘れてゐた。

二三週間、二人はペテルブルグの近郊を残らず乗り廻つた。叔母とオリガと男爵と彼とは街端の音楽會にも行けば、賑やかな祝賀會にも行つた。フィンランディアやイマートラなどにも行かうと話合つた程であつた。

オブローモフに就いて言へば、彼は公園から先なら何處へも行かなかつた。オリガも矢張り、何時も考へ込んでばかりゐて、たゞオブローモフが何處かへ遊びに行かうと言ふ時だけ答をした。オリガはオブローモフとならば郊外遊びもした。そして其の時にはオリガは無闇に莞爾々々してゐた。別荘の周圍五露里の間でオブローモフが數回上らない小丘は一つとしてなかつた。

そのうちに彼等二人の同情は益々生長し、發達して、其の不變の法則通りに現れた。オリガは感情と一緒に益々美しくなつた。彼女の眼には光が加はり、その身振には優美が加はつた。彼女の胸も矢張り美しく發達して適度な波打を見せてゐた。

『オリガ、お前は別荘へ來てから大層美しくおなりだわねえ。』と、叔母は言つた。男爵の微笑の中には例の慰勸が現れてゐた。

オリガは顔を赤めて叔母の肩に頭を載せた。叔母は愛嬌よくオリガの頬を敲いた。

『オリガさん、オリガさん!』と、或る時オブローモフは山の下で殆んど嚙くやうに用心深くオリガを呼んだ。其處でオリガはオブローモフと出會つて散歩に出かけようと約束したのであつた。

が。答がない。オブローモフは時計を見た。

『オリガ・セルゲイウナさん!』と、此度は聲を出して附け加へた。

矢張り黙つてゐる。

オリガは山の上に坐り、オブローモフが呼ぶのを聞きながら、笑を殺して黙つてゐた。オリガはオブローモフを山に上らせたかつたのである。

『オリガ・セルゲイウナさん!』と、彼は灌木の間を山の中腹まで上り、頂の方を見上げながら呼んだ。

(五時半までに來る約束だつたのに。)と、彼は獨語つた。

オリガは堪へ切れなくなつて笑つた。

『オリガさん、オリガさん! 何です、あなたは、其處にゐたのですか!』と、彼は言つて山に上つた。

『あゝ! あなたは山の中に隠れようとなすつたのでせう!』オブローモフはオリガの傍に坐つた。『私を苦しめる積りで自分でも苦しんでゐるのですね。』

『あなたは何處からいらしつて? お家から直ぐに?』と、オリガは訊いた。

『いゝえ、私はあなたのお宅へ行つたんですよ。ところが、あなたはお出かけになつたと言ふんでせう。』

『あなたは今日何をなすつて?』と、オリガは訊いた。

『今日は……』

『ザハールさんを怒鳴つていらしたんですか?』と、オリガは言つた。

オプローモフはそんな事は全く有り得ない事だと言ふやうに笑つた。

『いゝえ、私は *Revue* を読んでみました。が、まあ、お聞きなさい、オリガさん……』

けれども彼は何にも言はずにオリガの傍に坐つたまま、彼女の半面や、頭や、前後に動く手や、彼女が針をカンバスに貫いたり、引き抜いたりするのなどを凝と見てゐた。彼は火の點つた洋燈のやうな眼をオリガに注いで、それを彼女から放すことが出来なかつた。

オプローモフ自身は身動もしなかつたが、眼だけは、オリガの手が動くにつれて、或は右に、或は左に、或は下に動いてゐた。オプローモフの中には非常な活動が行はれてゐた。益々激しくなる血液の循環、二倍の速さになつた脈搏の鼓動、心臓の沸騰——斯うしたものは皆な非常に激しかつたので、オプローモフは刑場に引かれた時か、最も高調した精神的歡樂の瞬間でもあるやうに、徐々に重苦しきやうに呼吸を吐いてゐた。

オプローモフは口を利くことが出来なかつた。身動さへ出来なかつた。が、たゞ感激の爲めに潤んだ眼だけは、凝とオリガに注がれてゐた。

オリガは時々オプローモフに搜るやうな視線を投げて、彼の顔に書かれてゐる愚かしい意味を讀んだ、そして考へた、(あゝ！此の人の愛は何と云ふ熱烈なものだらう！此の人は何と云ふ美しい方だらう。何と云ふ美しい方だらう！) 彼女は彼に見惚れながら、自分の力で自分の脚下に俯伏させられてゐる男があることに誇りを感じてゐた。

象徴的な暗示や、意味あり氣な微笑や、連翹の枝の時期は最久永久に過ぎ去つて了つた。戀は益々嚴肅になり、益々探求的になつて、一種の義務に變り始めた。相互の權利も現れた。雙方は益々打解けて來た。誤解や疑念などは消えたり、或はもつと判然とした積極的の問題に場處を譲つたりした。

オリガは何時も懶惰に過ごされたオプローモフの生活を軽く諷刺したり、冷酷な宣告をしたり、シトリツよりも深く、且つ露骨に彼の無感覺を責めたりしてゐたが、やがてオプローモフに益々接近するに従つて彼の萎縮した生活に對する諷刺から轉じて、暴君のやうに自分の意志を現すやうになつた。そして大膽にオプローモフに生活や義務などの目的を聞かせたり、嚴しく活動を要求したり、或は自分が知つてゐる生活上の些細な問題に彼を引き込んだり、或は自分に分らない曖昧な何かの問題を彼に持ちかけたりして、間斷なくオプローモフの知慧を試みてゐた。

オプローモフも大に心配して頭を碎き、オリガの眼に六ヶ敷さうに見えないやうにとか、或はオリガに或る難問題の解決を助けようとか、でなければ其の問題を勇ましく一刀兩斷にしてはうなど、心を痛めてゐた。

オリガの女らしい凡ゆる手段は、優しい同情に貫ぬかれてゐた。オリガの知慧の作用に隨いて行かうとするオプローモフの有ゆる努力は情熱を呼吸してゐた。

けれどもオプローモフは度々力を失つて、オリガの脚下に身體を横へ、手を心臓の上に載せ、オリガに驚異の眼を凝と注ぎながら心臓の鼓動を聞いてゐることがあつた。

(此の人の愛は何と云ふ熱烈なものだらう!) オリガは此の瞬間にもオプローモフに見惚れながら斯う考へた。が、若しオリガはオプローモフの精神の中に潜んでゐた以前の狀態——僅かな疲勞や、僅かに認められるやうな居睡つた生活などを何うかして見附けるやうなことがあらうものなら——尤もオリガはオプローモフの精神を深く見抜くのが上手であつた——忽ちオプローモフに對して嘲罵を浴せかけ、而も其の嘲罵を悔いるとか、誤を怖れるとか云ふやうなことは滅多になかつた。

何うかすると、オプローモフは欠伸をしようとして口を開けることがあつた——が、オリガの吃驚したやうな眼に刺戟されて、直ぐに口を閉ぢて齒をがたくさせた。斯う云ふ風に、オリガはオプローモフの顔に現れる僅かな睡魔の影さへも責めるのであつた。また、彼女はオプローモフが何を爲てゐるか云ふことばかりではなく、何を爲ようと思つてゐるか云ふことまで聞き訊した。

オプローモフは、自分が疲れた爲めにオリガまで疲れ、オリガが茫然して冷やかになつたのに氣がつくと、オリガに責られた時よりもつと激しく元氣附いた。さうした時などオプローモフには熱烈な生活と力と活動とが現れ、睡魔の影などは何處かへ消えて、再た同情が澄んだ力強い泉のやうに迸り出るのであつた。

けれども斯うした心掛は皆な戀の魔力の範圍を出てゐなかつた。オプローモフの活動は、消極的で、ただ彼は眠らずに書物を読んだり、時には計畫を書き附けようと思つて見たり、澤山に歩いたり、澤山に乗り廻つたりするだけであつた。そして將來の方針と、生活の思想そのものと、事業とは、まだ計畫され

たまゝであつた。

『アンドレイが希望してゐる生活と活動とは何なものだらう?』と、オプローモフは晝餐を済すと、眠らないやうに眼を瞬きながら言つた。『之は生活ぢやないのだらうか? 愛は勤務ぢやないのだらうか? 彼の男も遣つて見れば分ることだ! 毎日——十露里宛も歩くのだ! 昨日は街の汚ない旅宿に宿つて、着物も脱がず、たゞ靴だけ脱いで寝た。ザハールはゐない——皆なオリガに頼まれたお蔭だ!』

オプローモフに取つて一番苦しかつたのは、オリガが彼に専門的な問題を出して、大學の教授にでも要求するやうに彼に十分な解釋を要求した時であつた。が、斯んな事は一度や二度ではなかつた。それもオリガは學者を氣取りたい爲めに斯んな問題を出すのではなくして、單に事の真相を知り度いと云ふ希望からであつた。オリガは度々オプローモフに就いての自分の目的を忘れて、問題其ものに心を奪はれることさへあつた。

『何うして私達にそんな事を教へて呉れなかつたでせう!』と、オリガは考へ込みながら悲しうに言つた。何うかすると、貪るやうに、そして熱心に今迄女には不必要だと思はれて來たやうな問題に關する話を聞くこともあつた。

或時、突然に彼女はオプローモフに兄弟星に就いての問題を持ちかけたことがあつた。オプローモフはうつかりとヘルミエルの言葉を引用した爲めに、街へ行つて書物を読み、彼女が満足するまで彼女に話をして聞かせなければならなかつた。

一度など、彼は矢張り不注意の爲め、男爵との話の中に繪畫の派に就いて二言ばかり口走つて了つた。これで再^{また}オプローモフに一週間ばかりの仕事が出来た。讀書して話をしなければならなかつた。そればかりか、更にエルミタージュにまでオリガを案内して、實地に自分の讀んだ事を證明しなければならなかつた。若しオプローモフが何か出鱈目^{でたらめ}なことを言はうものなら、オリガは直ぐにそれを見抜いて、益々五月^{うる}蠅^まく質問するのであつた。

それからオプローモフは一週間もかゝつて彼方^{こちら}此方^{こちら}の商店を歩き廻り、名畫から取つた銅版畫を捜さなければならなかつた。

憐れなオプローモフは、或は同じ店に二度足を踏んだり、或は新らしい雑誌を買ふ爲めに書肆^{ほんや}へ駈けて行つたりした。時には夜通し眠りもせずに書物^{ほん}を漁^{あさ}つたり、讀んだりしても猶ほ分らないので、朝になつて記憶の古記録から引き出した知識で昨日の問題に答へる支度をすることもあつた。

オリガは斯うした問題を女らしい散漫な心持や、若くは種々な事を知りたいと云ふ一時的な慾望に支配されて持ち出すのではなくして、頑固に且つ熱心に持ち出すのであつた。で、若しオプローモフが彼女が持ち出した問題に對して黙つてゐるものなら、試^{たぶ}すやうな眼附で何時^{いつ}までも彼を責めた。斯んな眼附で見られると、オプローモフは何時も慄へ出した。

『何^どうしてあなたは何ともおつしやらないのですか？何うして黙つていらつしやるのですか？』と、オリガは訊いた。『あなたは怠^まれにおなりだと見えますね。』

『あゝ！』と、オプローモフは忘我の境から醒めたやうに言つた。『私は何^どなにあなたを愛してゐるか知れやしません！』

『本當なの？でも私、なんだかさうぢやないやうな気がしましたわ。』と、オリガは言つた。

『ぢや、あなたは私の心に何が生じてゐるかを感じていらつしやらないのですか？』と、オプローモフは言ひ始めた。『私には口に出すさへ六ヶ敷い程なのです。これ、此處に……手を貸して下さい。何かが邪魔をしてゐます。何か重たい石のやうな物が横はつてゐます。深い悲哀に陥つてでもゐるやうです。だが、不思議ですね。人間は悲哀の裡にゐても、幸福の裡にゐても、肉體を着てる以上は同じ作用に支配されます。あゝ、呼吸^{いそ}苦しい、呼吸をするのが痛いやうです。何だか泣きたいやうです！若し泣けば、悲哀を感じてゐる時のやうに、涙によつて私の心は幾らか安まるでせう……』

オリガは彼の言葉を信じたかのやうに黙つて彼を見、ながら彼の言葉と、彼の顔に書かれてゐるものとを比^{くら}べて莞爾^{えんじつ}とした。満足な信用を捉へたのである。オリガの顔には、何ものにも掻き亂されならしい平和な幸福の呼吸が漲つた。彼女の心は何の悲哀も感じないらしく、たゞ此の靜かな朝の自然のやうに美しかつた。

『私は何うしたのでせう？』と、オプローモフは考へ沈みながら自問するやうに訊いた。

『それはですねえ、何と言つたらいいでせう？』

『何ですか？』

『あなたは……戀をしていらつしやるのよ。』

『さうです、無論です。』と、オプローモフはオリガの手をキャンバスから引き離しながら言つた。が、手には接吻せず、たゞ指をしつかり唇に押し付けて、何時までもさうしてゐようとした。

オリガは竊つと手を退けようとしたが、オプローモフはしつかり掴んでゐた。

『さア、放して下さい、もう澤山ですわ。』と、オリガは言つた。

『ですが、あなたは？』と、オプローモフは訊いた。『あなたは……戀をしていらつしやらないのですか……』

『戀してゐますわ、いゝえ……私は此の人を戀してやしません。私はあなたを戀してゐるのです！』と、オリガは言つて、自分が本當に戀してゐるのが何うかと確かめるやうに、暫くオプローモフを見てゐた。

『私は愛……愛してゐます！』と、オプローモフは言つた。『けれども母親でも、父親でも、乳母でも、また犬の子でも愛することが出来ます。これは皆な（愛する）と云ふ総合的一般的な觀念で覆はれてゐるのです。つまり舊い……』

『夜着で？』と、オリガは笑ひながら言つた。『ですが Propos あなたの夜着は何處にあるのですか？』

『何の夜着です？私には夜着なんかありませんよ。』

オリガは詰るやうに微笑しながらオプローモフを見た。

『成程、あなたは古い夜着のことを言つていらつしやるのですね！』と、オプローモフは言つた。『けれ

どもあなたの心から迸り出る感情にあなたが何う云ふ名前をお付けになるか、それを聞かうと思つて待ち兼ねてゐるのです。ところが、あなたは……あゝ、オリガさん！私はあなたを戀してゐます。若し此の戀がなければ直接の愛もありません。人間は父も、母も、乳母も戀してゐやしません。たゞ愛してゐるだけです。』

『分りませんわ。』と、オリガは自分を見抜き、自分の裡に起つたものを捉へようとでもするやうに考へ沈みながら言つた。『私があなたを戀してゐるか何うかも分りませんわ。若し戀してゐないとすれば、まだ其の時期が来ないので。ですが、たゞ一つ分つてゐることは、私が父も、母も、乳母も斯んなに愛しなかつたと云ふことだけです……』

『何と云ふ相違でせう？あなたは何か特別な感じを有つていらつしやるのでせう？』と、オプローモフは遮つた。

『あなたはそれを知りたいとおつしやるのですか？』と、オリガは索るやうに訊いた。

『さうです、さうです、さうです！あなたにはそれを言ひ現したいと云ふ要求はありませんか？』

『ですが、何故あなたはそれを知りたいのです？』

『一分間でもそれによつて生活する爲めです。今日も、今晚も、明日も——またお會ひするまで……私はそれだけで生活するのです。』

『それ、御覽なさい、あなたにもあなたの愛情の貯蔵を毎日新らしくなされる必要があるんでせう！ぢや

愛される者と愛する者との間に、何處に相違があまりまして？私は……」

『あなたは？……』と、オブローモフはもどかしさうにオリガの言葉を待つてゐた。

『私は別な愛し方をしてゐてよ』と、オリガは椅子に脊中を押し着けて飛んで行く雲に眼を向けながら言つた。『私はあなたがいらつしやらないと退屈ですわ。あなたと暫く別れてゐても——悲しいんですけど。長い間別れてゐると苦痛ですわ。私は今度永久に知つたことがあつてよ。見抜いたことがあつてよ。私はそれを信じてゐるのよ。それはね、あなたが私を愛していらつしやると云ふことなの——ですからあなたが私を愛していらつしやることを最う繰り返して下さらなくつても、私は幸福です。私は最うこれ以上、またこれより良くあなたを愛することは出来ないのですから。』

（これは——宛然、コル德里ヤの言葉のやうだ。）と、オブローモフは熱情的にオリガを見ながら考へた。『あなたが……死にでもなされると、』と、オリガは口訥りながら續けた。『あなたの爲に私は永久に喪を守り、一生涯決して笑ひませんわ。あなたがたとへ他の女を愛するやうなことをなすつても——怨んだり呪つたりせずに、自分の心の裡であなたの幸福を祈つてゐますわ……私にとつて斯うした愛は——矢張り生活なので……けれど生活は……』

オリガは何う言つたものかと惑つた。

『あなたは生活を何う考へておいでですか？』と、オブローモフは訊いた。

『生活は責任です、義務です。ですから愛も——矢張り責任ですわ。神様が私に愛を下すつたのですも

の。』と、オリガは眼を空へ向けながら言つた。『神様が愛するやうにお命じになつたのですもの。』

『コル德里ヤです！』と、オブローモフは聲を出した。『彼の女も二十一歳でした！そして愛に就てあなたのやうな考へを持つてゐました！』と、オブローモフは考へ耽りながら附け加へた。

『それに、私には一生涯愛す力があるやうな氣がしますわ……』

『誰がこんなことを此の女に教へたのだらう？』と、オブローモフは殆んど崇敬の念に近い感情を懐いてオリガを見ながら考へた。『此の女は經驗と、奮闘と、火と、煙とによらずに、斯んなに明瞭に、而も單純に生活と愛とを理解してゐる』

『だが、生々した歡喜と、情熱とがありますか？』と、オブローモフは言ひ始めた。

『知りません。』と、オリガは言つた。『私はそんなものを感じたこともありませんし、またそれがどんなものかと云ふことも知らないんですもの。』

『私には今、其れが實に良く分つてゐますがねえ！』

『さうでせうとも。あなたにあるやうな熱情が私にも矢張り、あるやうな氣がします。あなたにお會ひしても、本當にあなたが私の前にいらつしやるのか何うか信じられない程なんです……滑稽なことですけど』と、オリガは快活に附け加へた。『あなたは時々妙な眼附をなさるのねえ。伯母も氣附いてゐることゝ思ふわ。』

『あなたは、愛による幸福は何だと思つておいでですか？』と、オブローモフは訊いた。『若しあなたに、

私を感じてゐるやうな生々した歡喜が無いとしますれば……」

『それはですね、それ、それよ！』と、オリガは彼と、自分と、彼等二人を取り圍んでゐる靜寂とを指差しながら言つた。『これが幸福ではないでせうか？ 私は以前にこんな生活をしたことがあつたでせうか？ 以前ならば私は二人で此の木の間に、書物も讀まず、歌も唄はずに十五分と坐つてゐられないのよ。アンドレイ・イワスイチ以外の男の方と話をすると、何んな話をして退屈で、何時も一人であたいと考へましたわ……けれど今は……二人で黙つてゐても楽しいんです！』

オリガは周圍の木や草を見廻し、やがて視線をオプローモフに止めると莞爾として彼に片手を渡した。『それに私はあなたが歸らうとなさると、悲しくつて堪らないのよ。』と、オリガが附け加へた。『ですから眠つて了つて退屈な夜を見まいと狼狽して寢床へ入るのよ。そして朝になるとあなたの許へ使を遣らずにゐられないのよ。それから……』

『そして』とか『それから』とか言はれる毎に、オプローモフの顔は益々赤くなつて、其の眼には光が満たされた。

『さうですか、さうですか。』と、オプローモフは繰り返した。『私も矢張り朝になるのを待つてゐます。私にも夜は退屈なんです。翌朝になると何も用事は無くつても、たゞあなたの名前を餘計に言ひ、餘計に聞き、何かあなたのことに就て知りたい爲めに使を遣るのです。ところが其の使者が最うあなたを見たのだと思ふと如ましくつて堪りません……私達は同じやうなことを考へ、同じやうなことを待ち同

じやうに生き、同じことを望んでゐるのですねえ。オリガさん、私が疑つたことを赦して下さい。私はあなたが私を愛してゐて下さることを信じます。そして私程にお父さんをも、叔母さんをも、それから……』

『犬の兒をも愛さなかつたわ。』と言つてオリガは笑ひ出した。

『私を信じて下さい。』と言つて、オリガは言葉を結んだ。『私があるあなたを信じてるやうにね、そして疑つたり、詰らない疑念で此の幸福を脅かしたりしないで下さいませぬ。でないと、幸福は逃げて行つて了ひますわ。私は一度自分のものにした以上、誰が奪らうとしても決して渡しませんわ。私はそれを知つてゐます。私はまだ若いんですけれど……本當ですよ』と、オリガは聲を強めて言つた。『私はあなたと御近づきになつて以來一ヶ月の間に種々なことを考へもすれば、經驗もして、丁度大きな書物を讀みてもしたやうに、段々と自分のことを……疑つちや厭ですよ……』

『疑はざるを得ませんねえ。』と、オプローモフは遮つた。『ですからそんなことを要求しないで下さい。今斯うしてあなたを見て居れば、私は何も彼も信じます、あなたの眼と聲とが凡てを語つてゐますからあなたに見られてゐると、何か言はれてゐるやうです。私には言葉なんか要りません。私はあなたの眼附を讀むことが出来るんです。が、あなたの傍から離れると、種々な疑問が起つて私を苦しめます。で、私は再たあなたの許へ駆けつけて、再たあなたを見なければならぬのです、でなければあなたを信じられないのです。何うしたんでせうねえ？』

『けれど私はあなたを信じてみますわ。何うしたんでせうねえ?』と、オリガは訊いた。

『まだ信じてはいらつしやらないでせう。あなたの前に居る者は發狂者で情熱に燃えてゐる者ですよ! あなたは鏡に向つた時のやうに私の眼の中に自分を見ていらつしやるのだと私は思ひます。それにあなたは二十歳でせう。考へて御覽なさい。男があなたを見て、あなたに驚異の貢を拂はずにゐられるでせうか……視線だけでも向けずにゐられるでせうか? あなたを知つたり、あなたの聲を聞いたり、長い間あなたを見たり、愛したりしてゐると——あゝ、直ぐに氣が狂つてしまひます! けれどもあなたはその通り冷靜に落着いていらつしやるんです。若し一晝夜も二晝夜もあなたから(愛する……)とバふ言葉を聞かなければ、此處が顫へ始めます……』

オプローモフは心臓の邊を指差した。

『愛してゐます、愛してゐます、愛してゐます。——さア、これで三晝夜分の貯藏をあなたに上げましたわ!』と、オリガは椅子から離れながら言つた。

『あなたは何時も茶化してお了ひなさる。が、私はどんなでせう!』と、オプローモフはオリガと一緒に丘から降りながら溜息を吐いて言つた。

彼等二人の間の斯う云ふ様々な樂譜の中には何時も同じ音律が響いてゐた。度々の構曳も對談も——皆な同じ歌であり、同じ音律であり、また同じやうに炎々と燃えてゐる光であつた。其の光線は更に屈折したり、薔薇色や、綠色や、樺色などに分離したりして周囲の雰圍氣の中に慄へてゐた。毎時、毎日、

新らしい音律と光線とが齎らされても、其の光線の燃え方も變つてゐなければ、また音律の響き方も以前と同じであつた。

オプローモフもオリガも此の音律に聞き惚れ、其れを捉へて、お互の聞いたことをお互に歌はうとし而も明日は他の音律が響き、他の光線が現れることを疑はなかつた。そして翌る日になると昨日の歌を忘れて了つて、今日の歌が昨日の歌と違つてゐるのだと確信してゐた。

オリガは感情の流露に其の瞬間彼女の想像を彩つた色彩を着せて、その色彩を最も自然なものとして自分の友の眼の前に無邪氣で、且つ無意識な媚を呈しながら自分を綺麗に着飾つて見せやうとするのであつた。

オプローモフは益々此の不思議な音律と魅力のある光線とを信ずるやうになつた。そしてオリガの前に自分の有たけの情熱を現し、自分の精神を燃してゐる火の凡ての輝きと、凡ての力とをオリガに見せようとした。

二人は自分に對しても、またお互にも嘘を言はなかつた。二人は衷心から逆り出ることを言つた。けれども其の聲は想像を通過してゐた。

オプローモフにとつて實體の如何と云ふことは問題でなかつた。オリガがコルデリヤのやうにならうが、コルデリヤの型に忠實であらうが、或は新らしい小徑を通つて行かうが、他の幻變に變らうが、ただ彼の心によつて着せられた色彩と光線とを着て現れさへすれば、オプローモフは満足であつた。

オリガも矢張り情熱的な友が彼女の手袋を拾はうが、また彼女が其の手袋を獅子の穴に投げ込んだ場合、其の手袋の爲めに深淵の中へ飛び込まうが、若しオリガが友の情熱の徴候さへ見れば、或は若しオプローモフが男の理想、殊に、彼女によつて生活に覺醒された男の理想にさへ忠實であつて呉れれば、或は若しオプローモフの覺醒の火が彼女の視線と、彼女の微笑とによつて燃され、オプローモフが彼女の中に生活の目的を見てさへあれば、それで不満を感じなかつた。

だからチラリと閃き去つたコルデリヤの姿の中にも、オプローモフの情火の中にも、たゞ同じ瞬間と同じ現象的な愛の呼吸と、同じ愛の朝と、同じ綺麗な模様とが反映してゐるだけであつた。が、明日になると、明日になると最う違つたものが輝やくであらう。矢張り美しくはあるが、併し兎に角違つたものが輝やくことであらう……

+

オプローモフは、丁度夏の夕陽を見送り、夕映から眼も放さなければ、また夜が押し寄せて来る背後を振り向きもせずに、たゞ／＼明日になると温かさとも明るさとも歸つて来ると云ふことばかりを考へながら紅い夕陽の跡に見惚れてゐる人のやうな心持を感じてゐた。

オプローモフは仰向に寝轉んだまゝ、昨日の嬉曳の最後の光景に心を奪はれてゐた。《愛してゐます。愛してゐます。愛してゐます》と云ふ言葉はまだ、オリガの何の歌よりも嬉しく彼の耳の中で慄へてゐた。

オリガの鋭い眼附の最後の光もまだ彼の裡に潜んでゐた。彼はオリガの眼に現れた意味を考へたり、彼女の愛の程度を測つたりしてゐるうちに、突然に夢のやうな無我の境へ入つて了つた。

翌る朝、オプローモフは蒼白めた憂鬱な顔附をして起きた。其の顔には不眠の跡が残つてゐた。額には澤山の皺が寄つてゐた。眼には火花も無ければ希望も無かつた。此の人の得意の色や、元氣のいゝ快活な眼附や、適度に忙しさうにする意識的な身振など——皆な残らず失はれてゐた。

彼は頹然としてお茶を飲んだが、一冊の書物にも手を附けず、また机にも向はずに考へ込んだまゝ葉巻を喫し、それから長椅子へどかツと腰掛けた。以前ならば身體を横へるところであつたが、今では起てゐるのに慣れてゐたので、彼は枕にさへ凭り懸らなかつた。けれども彼は枕に腕をついてゐた——之は以前の習慣を暗示する印である。

彼は憂鬱な顔附をして、時々溜息を吐いたり、突然に肩を窄めたり、無闇に頭を振つたりした。

彼の裡には何物かゞ力強く動いてゐた。が、其れは愛ではなかつた。オリガの姿は彼の前に現れたがそれは彼に關係のない者としてやがて遠く暗い霧の中へ消えて了つた。彼は病的な眼附でオリガの姿を見送りながら溜息を吐いた。

《神から命ぜられる通りに生活し、自分勝手な生活を捨てること——これが賢明な法則だ。けれども

……》

オプローモフは考へ始めた。

「さうだ、自分勝手な生活をしてはならぬと云ふことは——明かなことだ。」と、オブローモフは憂鬱に且つ頑固に言ひ始めた。「お前は混沌たる矛盾に陥つてゐる。人間の智慧がどれ程深く、どれ程鋭くつても此の矛盾を解くことは出来ない。昨日望み、今日其の望んだものを熱心に力の限り捉へても、明後口になると望んだものを恥ぢ、やがて、生活を呪ひ、實現されたものを呪ふだらう——人生を勝手に、そして大膽に濶歩することと、我儘な「欲望」とから生ずるものはこれだ。手索りをして歩き、様々な物から眼を閉ぢ、なほ幸福を夢みず、たとへ幸福が迂り落ちてでも決して其れを訴へないこと——これが生活だ！生活は幸福であるとか、歡樂であるなど、誰が考へ出したのだらう？無智な奴等だ！（生活は生活ですわ、責任ですわ）とオリガは言つた、（義務ですわ。けれど義務は重たいものよ。私達は責任を果しませうね……）」

オブローモフはほつと溜息を吐いた。

「もうオリガさんには會ふまい……あゝ！あなたは私の眼を開いて呉れました。私に責任を示して呉れました。」と、オブローモフは空を眺めながら言つた。「が、何處から力を得よう？別れなければならぬ！まだ今のうちなら苦痛ではあるが能ないことはない。さうすれば後になつて、何うしてあの時、別れなかつたらうと自分を怨むやうなこともあるまい……が、最うオリガさんから使者が来る時分だ。オリガさんは使者をよこさうと思つてゐるだらう……待ち兼ねてゐることだらう……」

何う云ふ理由だらう？どんな風が突然にオブローモフを吹いたのだらう？何う云ふ雲を吹き送つたの

だらう？そして何故オブローモフは斯んな悲しい軛を負ふ決心をしたのだらう？昨日彼はまたオリガの心を眺め、其處に光明な世界と、光明な運命とを見、自分と彼女との運星を讀んだ筈である。それにこれは何うしたことだらう？

多分オブローモフが晚餐を喰べて仰向に寝轉るんでゐるうちに、詩的氣分が或る一種の恐怖に變つたのだらう。

夏の静かな晴れ渡つた晩方、瞬く星を見てみると、明日は野原が朝の輝やかなしい色彩を受けて定めし美しいことだらうとか、林の繁みへ入つて暑氣を避けたらどんなに氣持が良いだらうなどと考へながら眠つて了ふ……と、突然に雨の音と、悲しげな灰色の雲との爲めに眼を醒すことがよくあるが、さうした時には周圍は寒くつて湿々してゐるものだ……

オブローモフは例によつて晩方から自分の心臓の鼓動に耳を澄したり、それから心臓の邊を手で觸つて心臓が肥大してはゐないかと調べて見たり、最後に熱心に自分の幸福を分解し出したりすると、突然に膽汁の滴に出會して落膽して了つた。

落膽の影響は強く、そして速かつた。オブローモフは走馬燈のやうに自分の今迄の生活を考へ浮べた、と、過去に對する悔恨と哀惜の情とは後れながらも幾度となく彼の心臓を襲うた。オブローモフは、若し自分がより充實し、より多面的な生活をする爲めに勇敢に前進してゐたならば、そして若し自分が着實で、今の自分は何者であらうとか、何うしてオリガは自分を愛しもし、また愛してもゐるのだらうと

か、或は何の爲めだらうなど云ふ問題へ轉じてみたならば、今自分は何うなつてゐるだらうと考へた。之は過誤ではないだらうかと、云ふ考へが突然にオプローモフの頭の中に電光のやうに閃いた。そして此の電光は丁度彼の心臓の眞上に落ちてそれを打ち砕いて了つた。彼は呻き始めた、(過誤だ! さうだ……確かにさうだ!)と云ふ考へが彼の頭の中を駆けずり廻つた。

と、(愛してゐます、愛してゐます、愛してゐます。)と云ふ言葉が突然に再た記憶の中に響いた。心臓は熱くなつて來た。が、突然に再た冷くなつた。オリガが三度も(愛してゐます)と繰り返したのは——一體何だらう? それは彼女の眼の欺瞞であり、浮氣な心の狡猾な囁きである。愛ではなくして、たゞ愛の豫感に過ぎないのだ!

此の聲は何時か鳴り響くことだらう。而も世界ぢうが顫ふ程の強い諧音となつて鳴り響くことだらう! 叔母も男爵も此の響を知るだらう。そして此の響の餘韻は更に遠くまで鳴り渡るだらう! 一體、感情と云ふものは、小川が辛つと聞える位にサラ／＼と云ふ音を發てながら草の中に隠れて了ふやうに靜かに流れないものである。

オリガは今、カンバスで刺繍をしながら愛を感じてゐる。模様は靜かに氣惰るさうに現れてゐる。彼女は更に氣惰るさうにカンバスを廻しながら其の模様に見惚れてゐる。が、やがて其れを置いて忘れて了ふであらう。さうだ、之はたゞ愛に對する準備に過ぎない。經驗に過ぎない。が、經驗は——主觀である。主觀は先づ最初に捨てられるもので、場合によつては經驗をする時にも少々厄介視されるものである。

ある……

偶然に彼等二人は近づいたのだ。オリガはオプローモフに氣が附かなかつたが、シトリーツがオプローモフを紹介して敏感な若い彼女の心を動かしたのだ。そこでオプローモフの境遇に對する同情が起り、頹然とした精神から睡魔を拂ひ落してやらうと云ふ主我的な心配が起つたのだ。

「さうだ!」と、オプローモフは怖ろしさうに言つて寢床から飛び起きた。そして手を慄はせながら蠟燭を黙けた。其處には其れ以外に何にも無いし、また何にも無かつた! オリガさんは愛を受ける準備をしてゐるのだ。オリガさんの心臓は鼓動を鎮めて待つてゐるのだ。此の俺も間違つてオリガさんに會ひ、それが爲めに過誤に陥つたのだ……で、他の男が現れると直ぐに——オリガさんは吃驚して過誤から飛び退くだらう! 其の時、オリガさんは何う云ふ風に此の俺を見るだらう。何う云ふ風に遁れるだらう。恐ろしい! 俺は他人の物を奪つたのだ! 俺は——盗人だ! 俺は何を爲てゐるのだらう。何を爲てゐるのだらう? 俺は何と云ふ盲人なんだらう——あゝ!」

オプローモフは鏡を見た。彼の顔は蒼白めて黄色かつた。彼の眼も鈍よりとしてゐた。彼は若い幸福な人達を想つて見た。彼等は潤みのある沈んだ、而もオリガのやうに力強くつて鋭どい眼を有つてゐた。彼等の眼には火花が慄へてゐた。微笑の裡には勝利の信念があつた。彼等の歩き方も元氣がよく、その聲にも響があつた。彼等の中から一人が現れる、彼は待たれてゐる。彼女は急に興奮して、彼を、即ちオプローモフを見る。そして……ホ、ホ、と笑ひ始める。

オプローモフは再た鏡を見た。

『斯んな男を愛する女はありやしない！』と、彼は言つた。

やがて彼は横はつて、顔を枕に押し着けた。

『赦して下さい、オリガさん。あなたは幸福でゐて下さい！』と、オプローモフは言つた。

『ザハール！』と、翌る朝彼は叫んだ。『若しイリインスキイ家から俺を迎へに来たらな、俺は家にゐな

い、街へ行つたと言つて呉れ。』

『畏まりやした。』

『さうだ……それより寧ろオリガさんへ手紙を書かう。』と、オプローモフは獨語つた、(だが、俺が突然に姿を隠すと云ふことは、オリガさんにとつて餘り亂暴に思はれるだらう。その理由を説明する必要がある。)

彼は卓子に向つて、素速く熱心に、そして非常な速度で手紙を書き始めた。五月の月上旬に家主に手紙を書いた時とは全然違つてゐた。「存じ候處」や「致すべく候」などが次から次と幾度も續いて不快を與へるやうなことは一度もなかつた。

『オリガ・セルゲイウナ様、(と、オプローモフは書いた)私達はお互にあんなに度々會つてゐたのに、今、私が行かずに此の手紙を差上げたなら、定めしあなたは不思議に思召すこととせう。が、末尾まで讀んで下さい。さうすれば、私にとつて斯う爲る外に、仕方がないことがお分りになります。此の手紙

さへ書けば、私達は將來良心の呵責を逃れることが出来るでせう。而も今はまだ遅くはありません。私達は突然に、そして非常に速く相愛するやうになりました。宛然二人は突然に病氣に取り付かれてもしたかのやうです。之が私のもつと速く覺醒するのを妨げたのです。のみならず、一日ぢうあなたを見、あなたの聲を聞いてゐて、何うしてあなたの魅力を避けると云ふ重苦しい義務を自由に引受けられるでせう？斜面に留つてゐる者が其の斜面に従つて轉がらない爲めに、傍見をしなかつたり、意志を緊張させたりしても、それは何になるでせう？私は毎日、(もう誘き附けられまい、留まらう、自分次第で何うでもなるのだと考へながら、矢張り誘き附けられ、現に今も戦つてゐるのです。此の戦にはあなたの援助を御願ひします。私は漸く今日になつて、今夜になつて、私の足がどんなに速く這つてゐるか云ふことを知りました。私は昨日漸く自分の陥りつゝある深淵の深い深いどん底を見ました。で、私は留まることに決めました。)

『私はたゞ自分のことだけを言ひます——之は主我主義の爲めではなく、私が此の深淵のどん底に横はる時に、あなたは矢張り清い天使として空高く飛び翔つていらつしやることと思ふからです。そしてあなたが此の深淵を一眼でも見ようとなさるか何うか私に分らないからです。お聞き下さい、遠廻しに言はずに率直に言ひますが、あなたは私を愛していらつしやらないのです。またあなたには私を愛することが出来ないのです。私の經驗をお聞き下さい。そして私の言葉を絶対に御信用下さい。私の心臓は疾うから鼓動し始めてゐます。其の鼓動は異様に不調です。が、此の鼓動によつて私は心臓の正調鼓動と

不調鼓動とを區別することを知りました。何處に眞理があつて、何處に迷誤があるかを知ることは、あなたには出来ないこととせうが、私には出来ますし、また何うしてもそれを知らなければなりません。そして私は之をまだ知り得ない者に對して警戒すべき義務を有つてゐます。で、今私はあなたに警戒します。あなたは迷つていらつしやるのです。よく見て御覽なさい！」

《愛が、微笑んでゐる幽かな幻影の形を取つて私達の間に現れた時、愛が Castdiva の中に響き、連翹の枝の匂の中や、まだ言ひ現されなかつた同感の中や、恥かしさうな眼付の中などに現れた時、私は其の愛を想像の遊戯であり、自惚の囁きであるとしてそれに信を置かなかつたのですが、程なく不眞面目な態度が過ぎ去つて、私は愛に悩み熱情の徴候を感じるやうになりました。あなたは沈み勝になり、眞劍になりました。あなたはあなたの時間を私に下さいました。あなたの神経は囁き始めました。あなたの胸は波立ち始めました。其の時になつて、即ち、今になつて私は漸く吃驚しました。そして立ち停つて之が何であるかと云ふことを言はねばならぬ義務が私の上に落ちて來たことを感じました。》

《私はあなたを愛してゐると言ひました。あなたも同じ言葉で答へになりました。何うです、此處には不諧の調が響いてゐますが、聞えませんか？では、後で私が愈々どん底に横はつた時にあなたの耳へ入るでせう。私を見て下さい、私の状態を考へて下さい。あなたは私を愛することが出来ますか。あなたは私を愛していらつしやるのですか？《愛してゐます、愛してゐます。愛してゐます》と、あなたは昨日おつしやつたけれども、私は、さうではありません、さうではありません、さうではありません！

と確信をもつて答へます。》

《あなたは私を愛していらつしやらないのです。けれどあなたは嘘をおつしやるのではありません——急いで附け加へて置きますが——あなたは私を欺むかうとなさるのでもありません。あなたは内心が「さうではない」と言ふ時に「さうだ」と言ひ得ない方です。で、私はたゞ一つあなたに證明したい事があります。それは、あなたの現在の「愛してゐます」と云ふことは、現在の愛ではなくして、未來の愛だと云ふことです。それはたゞ、愛しようとする無意識の要求に過ぎないのです。其の要求は、現在の糧が十分でない爲めと、火力の無い爲めとで、燃焼力を有つた本當の火となつて燃えることが出来ないのです。ですから女の場合には、其の要求は、何うかすると赤兒や、同性などに對する愛情の中に現れたり、或は單に涙の中や、ヒステリックな發作の中などに現れたりすることがあります。私は最初からあなたに對して、(あなたは間違つたことをしていらつしやる。あなたの前に立つてゐる者は、あなたが豫期し、空想して居られた者ではありません。暫時お待ち下さい。程なく其の人が來ます。其の時あなたは覺醒します。其の時、あなたは自分の間違を悲しむでせう、恥ぢるでせう。けれどもあなたの此の悲哀と悔恨とは私を苦しめるでせう。)と、嚴然として言はなければならなかつたのです——若し私が天性、透徹した理智と覺醒した精神とを有つてゐたら、そして更に私がもつと眞面目であつたら、屹度私はさう言つたでせう……無論、私は言ひました。が、それは怖るく、あなたが其れを信じないやうに、またそんな事が起らないやうに言つたのでした。私が以前に言つたことは、後で他の人も言へることとて、私は

成べくあなたの耳を引かないやうに、あなたに信用を與へないやうに心掛けました。そして急いであなたに會ふやうにしながら（何時か他の男が来るまで自分は幸福なんだ）と考へてみました。これが衝動と情熱との論理です。」

「今では私は最う別な考へを有つてゐます。けれども若し私が前の考へに捉はれてゐたならば、若しあなたと會ふことが、生活の贅澤でなくして必要になつたならば、そして若し愛が心に浸み込んで了つたならば（私はよくこそ愛が益々深く浸み込んで行くのを感じたものです。）何う云ふことが起つたでせう？其時は何うして愛から離れることが出来るでせう？矢張り斯んな苦痛を感じるでせうか？私はどんなに苦しむか分らないのです。私は今になつてその事を考へると、慄然とします。若しあなたが私より經驗に富み、私より年齢をとつていらつしやれば、私は自分の幸福を祝福し、永久にあなたに手を渡したことでせう、所が、それが……」

「何故私は手紙を書くのでせう？何故私は直接あなたの許へ行つて、あなたに會ひたいと云ふ希望は一日毎に生長して行くが、最う會ふことは出来ないと言はないのでせう？けれどもこれをあなたの前で言ふには——お察し下さい、私にそれだけの勇氣がないのです！何うかすると、それらしい事をあなたに言ひたいと思ふことがあります。が、愈々言ふ段になると、全然別なことを言ふのです。多分、あなたの顔に悲哀が現れはしまいかとか（若しあなたが私と一緒にゐて退屈でなかつたことが本當だとすると。）或はあなたが私の善良なる計畫を理解なさらないで、反つて悲しみはなさらないだらうかなどと考

へた爲めでせう。私はその執をも忍び得ないので、再たも別な事を言ひました。そして本當の計畫は塵のやうに飛び散り、私は相變らず翌日お會ひすることに腐心するのでした。が、今、此處にはあなたがいらつしやらないので思つた通りに書けます。あなたの優しい眼と、美しくつて愛らしい顔とが私の前にありません。紙は凝と忍んで黙つてゐます。私は落着いて手紙を書いてゐます、（嘘です）私達は最う會はないやうにしませう」（嘘ではありません）と。」

「他の人なら「涙を灑ぎながら書いてゐます」と附け加へるでせうが、私はあなたの前で壯麗なことを言ひますまい。自分の悲哀を虚飾しますまい。と云ふのは、私は苦痛を増し哀惜を消したくないからです。一體斯うした虚飾は、普通、益々深く感情の地盤に根を下ろさうと云ふ野心を有つてゐます。が、私はあなたの裡にも、自分の裡にも此の野心の種子を亡ぼしたいのです。泣くと云ふことは、言葉巧みに女の不注意な自惚心を捉へやうと心掛けてゐる誘惑者か、或は疲れ切つた空想家かに應はしいことですか。斯う言つて私は遠國へ旅立する親友と別れるやうに、あなたとお別れします。三週間経ち、一ヶ月と經つうちに益々遅くなり、益々別れ難くなります。愛は不思議な程進歩します。愛は精神上的の疫病です。今では最う私は全く別な人間になりました。一時間一分間と算へはしません、太陽の出入にも注意しません。が、私が今、算へて居ることは、あなたにお會ひしたこと——お會ひしなかつたこと、お會ひしてゐること、お會ひしてゐないこと、あなたがお出かけになつたこと——お見えにならなかつたこと、私が待つてゐたことなどです……斯う云ふことは皆な愉快な昂奮や不快な昂奮などを容易く忍ぶ青

年の顔には釣合ふものですが、私の顔には平靜が釣合ひます。それも退屈な、眠つたやうな平靜で、それは私の特徴なのです。私には暴風雨を鎮めるやうなことは到底出来ないのです。」

「大抵の人は私の遣り方に吃驚するでせう。何故逃げ出すのだ？と言ふでせう。大抵の人は私を笑ふでせう。けれども私は其の嘲笑を覺悟してゐます。私があなたに會はない覺悟をしたのは、どんな事でも忍ぶ覺悟をしたと云ふことを意味するものです。」

「私は深い悲愁に沈みつゝも、なほ幾らか慰められてゐます。私を慰めるものは、私達の生活の短かい挿話が清く香高い追憶を私に永久に残して呉れたことです。私はたゞ此の追憶さへ有つて居れば最ら決して以前のやうな精神的睡眠に陥ることはありません。それに此の追憶はあなたを害しないばかりか、反つて將來に於けるあなたの定規的生活を指導することとせう。もうこれでお別れです。天使よ、吃驚した小鳥が間違つて止つた枝を飛び去るやうに速く飛び去つて下さい。小鳥が偶然に止つた枝を飛び去るやうに、身軽く、元氣よく、そして快活に飛び去つて下さい！」

オプローモフは感激しながら書いた。ペンは飛ぶやうに紙の上を走つた。眼は輝やき、頬は燃えてゐた。手紙は、普通の艶書のやうに随分長くなつた。戀をする人達は怦々しながらもお饒舌りな者である。「妙だ！俺は最う退屈でも、苦痛でもなくなつた！」と、オプローモフは考へた。「俺は反つて幸福を感じるくらゐだ……何うしてだらう？それは多分、精神の重荷を手紙の上へ載せて了つたからだらう。」

オプローモフは先づ手紙を読み返し、それからそれを折つて封筒へ入れた。

「ザハール！」と、オプローモフは言つた。「使者が來たら、此の手紙を渡してお嬢さんに届けるやうに言つて呉れ。」

「畏まりやした。」と、ザハールは言つた。

實際、オプローモフは快活になつた。彼は長椅子に腰掛け、兩脚も其の上に載せて、何か朝食に食べる物はないかと訊いた。彼は卵を二個食べると、葉巻を喫し始めた。彼の心臓も頭も何かに充たされてゐた。彼は生活してゐた。彼はオリガが手紙を受け取つてどんなに驚ろくだらうとか、あれを讀んでどんな顔をするだらうとか、それから何うするだらうなど、想像してゐた……

オプローモフは其の日の光景と、新しい状態とに見惚れてゐた……彼は心臓の鼓動を止めて、人が來やしないだらうかとか、オリガが最う手紙を讀んでゐるのではないだらうかなど、考へながら、扉を叩く音に聞き耳を立てゝゐた……が、玄關の方は静かであつた。

「何う云ふ譯だらう？」と、オプローモフは不安さうに考へた。「誰も來ないやうだ、何うしたんだらう？」

と、「何うしてお前は怦々してゐるのだ？お前にとつて、關係を斷つ爲めに、誰も來ないが良いではないか？」と云ふ囁くやうな幽かな聲が彼の耳へ入つた。が、彼は此の聲に深く心を向けなかつた。

三十分も経つと、オプローモフは屋敷の中で馭者と話し込んでゐるザハールを呼んだ。

「誰も來なかつたか？」と、彼は訊いた。「誰か來やしなかつたか？」

『へい、めえりやした。』と、ザハールは答へた。

『で、何うした？』

『お前様おねえ、街へ行つたと申しやしたじよ。』

オプローモフはザハールを睨み附けた。

『何故お前はそんなことを言つたのだ？』と、オプローモフは訊いた。『俺は下男が來たら何うしろとお前に言ひ附けたか憶えてゐるか？』

『でも、來たのは、下男ぢやなく、女中がすよ。』と、ザハールは馬鹿に落着いて答へた。

『ぢや、手紙を渡したか？』

『いゝえ、お前様、最初、家にゐないと言へつて言ひ附けて、それから手紙を渡せとおつしやつたじよ。だから此の次に下男が來たら手紙を渡しやすべえよ。』

『さうぢやないんだ、さうぢや……氣の利かない馬鹿野郎だ！手紙は何處にある？此處へ持つて來い！』と、オプローモフは言つた。

ザハールは手紙を持つて來た。が、最う酷く汚れてゐた。

『貴様は手を洗へ、何だ其の手は！』と、オプローモフは憎々しきうにザハールの汚れた手を指差しながら言つた。

『俺の手は綺麗がすよ。』と、ザハールは傍の方を見ながら答へた。

『アニーシャ・アニーシャ！』と、オプローモフは叫んだ。

アニーシャは玄關の間から身體を半分出した。

『まア、見て呉れ。ザハールは何をしてるんだ？』と、オプローモフはアニーシャに訴へた。『さ、此の手紙だ、此の手紙をイリインスキイ家から下男でも女中でも來たら、お嬢さんへ届けると言つて渡して呉れ——分つたか？』

『旦那様、分りました。屹度渡しますで御座ります。』

が、アニーシャが玄關の間へ出るや否やザハールは直ぐに彼女から手紙をひつたくつた。

『彼方へ行けやい、彼方へ。』と、ザハールは叫んだ。『てめえは婆アの仕事でもするがいゝだ！』

程なく女中が再た駈けて來た。ザハールが女中の爲めに扉を開けて遣らうとすると、其の扉口へアニーシャも出て來た。が、ザハールは憎々しきうにヂロリとアニーシャを睨んだ。

『てめえ、何しに此處へ來た？』と、ザハールは啞れ聲で訊いた。

『あれを聞きにさ、お前があの……』

『よし、よし、よし！』と、ザハールは眩でアニーシャを拂ひ退けながら呻くやうに言つた。『彼方へ行け！』

アニーシャはにやりとして其處を去つたが、次の間の鍵穴から、ザハールが主人の命令通りにするか何うかと見てゐた。

イリヤ・イリイチは此の騒ぎを聞きつけたので、自分も飛び出して来た。

『カーチャ、何だ？』と、オプローモフは訊いた。

『お嬢様からあなたが何處へいらつしやつたか訊いて来るやうに言ひ附けられたのです。でも、あなたは何處へも行かずに、お家にゐらしたんですね！ 駈けて行つてさう言ひますわ。』と、カーチャは言つて駈け出さうとした。

『俺は家に居つたのさ。此奴は何時も嘘ばかり言ふんだ、』と、オプローモフは言つた。『さア、此の手紙をお嬢さんに渡してお呉れ！』

『畏まりました。お渡しします！』

『今、お嬢さんは何處におゐるかね？』

『村を散歩していらつしやいます。若しあなたが書物を読んでお了ひになつたら、二時までに庭へ来て頂くやうに言へと言ひ附つて来ましたんです。』

カーチャは歸つた。

『いや、行くまい……萬事を片付けて了はなければならぬ時に、何の爲めに感情を刺戟するんだ？……』と、オプローモフは村の方へ行きながら考へた。

オプローモフは、遠くからオリガが丘を歩いてゐるのや、カーチャがオリガの跡を追うて手紙を渡したのなどを見た。また彼はオリガが一寸立ち留つて手紙を見ると、暫く考へてゐたが、やがてカーチャ

は點頭いて、公園の並木路へ入つて行つたのも見た。

オプローモフは丘を迂廻つて反對の側から例の並木路へ入り、その中頃で灌木の間の草の中に坐つてオリガを待つてゐた。

『彼の女は此處を通るだらう。』と、彼は考へた。『彼の女が何う爲るか竊り見て、そして永久に別れよう』オプローモフは心臓の鼓動を止めるやうにしてオリガの足音を待つてゐた。が、彼女の足音はしない。森然としてゐる。自然は活潑な生命を漲らせてゐた。周圍には眼に止らないやうな小さな勞働が沸騰してゐた。が、萬象は莊嚴な靜寂の裡に横はつてゐるやうに思はれた。

殊に草の中では種々な物が動いたり、匂つたり、飛び廻はたりしてゐた。其處には澤山の蟻が、こせこせと忙しさうに彼方此方と匂ひ廻つたり衝突り合つたり、走せ別れたり、急いだりして、その様は丁度高い處から人間の市場か何かを見てゐるやうであつた。市場では矢張り斯う云ふ具合に、大勢の人々が群つたり、衝突り合つたりしながら蠢々してゐるものである。

草花の傍では一匹の地蜂が羽を鳴らしながら、巢の中へ匂ひ込まうとしてゐた。と思ふと一方には澤山の蠅が、菩提樹の裂目から滴り出てゐる汁の傍に集つてゐた。小鳥は繁茂の中で先刻から同じ鳴き聲を繰り返してゐた。多分伴侶を呼んでゐるのであらう。

と此度は二匹の蝶が空中で連れ合ひながら舞踏をすゐるやうに忙しなく古木の傍をヒラ／＼と飛んでゐた。草は強い薫を放つてゐた。草の中からは斷間なく蟲の音が聞えてゐた……

『實に騒しい世界だ！』と、オプローモフは此の焦燥を見入り、自然の微かな騒音に聞き惚れながら考へた。『けれども外部から見ると矢張り森然として静かなものだ！……』

が、足音はまだ聞えなかつた。しかし遂々來た……『あゝ！』と、オプローモフは靜かに杖を押し退けながら溜息を吐いた。『彼女だ、彼女だ……何うしたのだらう？ 泣いてゐる！ あゝ！』

オリガは靜かに歩きながら手巾で涙を拭いてゐた。が、辛つと拭いて了ふと、また新たに涙が出た。彼女は恥かしさうに涙を呑み込みながら木立をも厭ふと云ふ風であつた。オプローモフは今迄一度もオリガの涙を見たことがなかつたので、まさか彼女が泣かうとは思はなかつた。彼はオリガの涙に焼かれるやうな氣持がした。が、その涙は熱くはなくて温かであつた。

オプローモフは急いでオリガの背後へ出た。

『オリガさん、オリガさん！』と、彼はオリガの後を隨けながら優しく言つた。

オリガは慄然つとして振り返り、吃驚して彼を見たが、また先方を向いて歩き出した。

オプローモフはオリガと並んで歩いた。

『あなた、泣いてるのですか？』と、オプローモフは言つた。

オリガの涙は益々激しく流れ出た。彼女は最う涙を止めることが出来ないので手巾を顔に押し當て、歎息をしながら最初の腰架に腰掛けた。

『私は飛んだ事を爲ましたねえ！』と、オプローモフは彼女の片手を握つて其れを顔から引き放さうと

しながら悸々と囁いた。

『放棄つて置いて下さい！』と、オリガは言つた。『彼方へ行つて下さい！ 何故あなたは此處へいらしたの？ 私は泣かなくつてもいゝことを知つてゐますわ。あなたのおつしやる通りよ。どうせ斯うなるに定つてたんですもの。』

『でも、あなたの涙を止めるには何う爲たらいゝでせう？』と、オプローモフはオリガの前に跪びいて訊いた。『言つて下さい。命じて下さい。私はどんな事でも爲ます……』

『あなたは涙を出させることは出来ても、其れを止める権利を有つていらつしやらないのです……あなたはそれ程強い方ではないんですもの！ 放棄つて置いて下さい！』と、オリガは手巾で顔を撫てながら言つた。

オプローモフはオリガを見ると、彼女が彼を呪つてゐるのを見抜いた。

『悪い手紙だつた！』と、オプローモフは後悔しながら言つた。

オリガは仕事の籠を開け、其中から手紙を出してオプローモフに渡した。

『返しますわ。』と、オリガは言つた。『私が此の後これを見て泣くことがないやうに持つ行つて下さい。』

『』

オプローモフは黙つて手紙を衣匣へ入れ、頭垂れたまゝオリガの傍に腰掛けてゐた。

『兎に角、オリガさん、あなたは私の計畫が正當であつたことを認めて下さいますか？』と、オプロー

モフは静かに言つた。『此の手紙は、あなたの幸福が私にとつてどのくらゐ尊いかと云ふことの證據なんです。』

『さう、そんなに尊いと思つていらしつて!』と、オリガは溜息を吐きながら言つた。『いゝえ、さうぢやないわ、イリヤ・イリイチさん。あなたは屹度私の静かな幸福を羨やんで、それを掻き亂さうとなさるんですわ。』

『掻き亂さうと! ぢや、あなたは私の手紙をすつかりお讀みにならなかつたのですね? 私が一度讀んでお聞かせしませう……』

『讀んで了ひませんとも。だつて眼に一ばい涙が溢れるんですもの。私はまだ馬鹿なのねえ! けれど私は残を察してゐますから最う繰り返さないで下さい、また泣くのは厭です……』

また涙が溢れ出た。

『私があなたとお別れするのは、』と、オプローモフは言ひ始めた。『あなたの將來の幸福を見て、其の幸福の爲めに自分自身を犠牲にするのです……私が斯う云ふ事を冷淡に遣れるでせうか? 何うして私は内心で泣かずにゐられませう? 何の爲めに私は斯んな事を爲たのでせう?』

『何の爲めになすつたの?』と、オリガは俄かに泣き止んで、彼の方へ振り向きながら繰り返した。『何故ですか。今、あなたは灌木の中に隠れてゐて、私が泣くだらうか、どんな風に泣くだらうかと盗み見ていらしつたのは——それは何故ですか? 若し誠心誠意で手紙をお書きなすつたのなら、そしてまた何うし

ても私と別れなければならぬと固く決心していらつしやるのなら、私に會はずに外國へいらつしやるさうなものぢやありませんか。』

『それは酷です!』と、オプローモフは詰るやうに言ひかけたが、皆な言つて了はなかつた。

彼はオリガの想像に驚ろかされたのであつた。何故かと言へば、彼は此の想像の尤もであることを急に明瞭と意識したからである。

『さうよ』と、オリガは言つた。『あなたは昨日、私に「愛してゐます」と言はせ、今日は涙を流させ、明日は多分、私が死ぬのを見ようとなさるのでせう。』

『オリガさん、それは餘り酷い侮辱です! 私があなたの笑聲を聞き、あなたの涙を見まいとして、今、生命の半をあなたに捧げてゐるのだと云ふことをあなたは信じて下さらないのですか……』

『さうですわ、其れは今ですわ。一人の女があなたの爲めに何んなに泣くかと云ふことを最う御覽なすつた今のことです……いゝえ、』と、オリガは附け加へた。『あなたには心臓がないのです。あなたは私を泣かせたくないとおつしやるけれど、若し本當に泣かせたくないのなら、斯んな事を爲さるなけりやいぢやありませんか……』

『でも、私は知らなかつたのです!』と、オプローモフは疑念と肯定との意味を聲に含め、兩方の掌を胸に當てながら言つた。

『でも、心臓は愛する時には相當の智慧を有つてゐるものよ。』と、オリガは反對した。『心臓は自分が何、

を望んでるかと言ふことを知つてゐますし、また將來にどんな事が起つて來るかと言ふことも知つてゐます。昨日は突然にお客があつたものですから此處へ來られなかつたのですけれど、私はあなたが心配しながら私を待つていらつしたことも、夜分もよくお寝みになれなかつたことも分つてゐました。私
が此處へ來たのも、あなたを苦しめたくないからなんです……ところが、あなたは……あなたには私の
泣くのが面白いのです。幾らでも私を見て楽しんで下さい……」

オリガは再び泣き出した。

『オリガさん、全く私はよく眠れなかつたのです。夜通し悶えてゐたのです……』

『ぢや、私がよく眠つて、苦しまなかつたのがお氣に障つたのですね——さうぢやなくつて?』と、オリガは遮つた。『若し私が今泣かなければ、あなたは今晚もよくお寝になれなかつたことでせうねえ。』

『では此の場合私は何う爲たらうでせう。謝るより外に詮方はないでせうか?』と、オプローモフは下手に出て優しく言つた。

『謝るくらゐなら子供でもしますわ。また、大勢の人中で誰かに足を踏まれた時、赦さない譯に行きませんわ。』と、オリガは再び手巾で顔を撫でながら言つた。

『けれどもオリガさん、若し私の言つた通りだつたら何うします? 若し私の考へが當つてゐて、あなたの愛が——間違つてゐたら何うします。若しあなたが他の男を愛するやうになれば、其時あなたは私を見て赤面なさらなければなりません……』

『それで何うだとおつしやるの?』と、オリガはオプローモフがどぎまぎする程、鋭い眼付に嘲笑の色を湛へて彼を見ながら訊いた。

『此の女は俺から何かを見抜かうとするのだ!』と、オプローモフは考へた、『イリヤ・イリイチ、油斷するな!』

『「それで何うだ」とは何です!』と、オプローモフは不安らしくオリガを見ながら機械的に繰り返したが、どんな考へがオリガの頭の裡に形造られてゐるか、また間違つた考へを有つてゐる彼女が、そして此の愛の結果を辯護することの出來ない彼女が、『それで何うだとおつしやるの』と云ふ言葉を何う辯解するかを察することが出來なかつた。

けれどもオリガは意識的に或る信念を有つてオプローモフを見てゐたし、また自分の考へを自由に支配してゐるらしかつた。

『あなたは「深淵のどん底」に陥ることを怖がつていらつしやるのですわ。』と、オリガは皮肉に反對した。『私があなたに對する愛を失ひはしないかと將來の恥辱を考へて怖がつていらつしやるのですわ!……あなたはお手紙にも「私はどんなに苦しむか分らない」と書いていらつしやるんですもの……』

オプローモフは矢張り未だ十分に覺らなかつた。

『さうです、私が他の男を愛するやうになれば、私は反つて好都合ですわ。私が他の男を愛するやうになるのは、私が幸福になることなのです! それにあなたは「私の將來の幸福を豫知して、私の爲めに何

んな物でも、生命いのちでさへも犠牲にする覚悟だ」とおつしやつたぢやありませんか？」
オプローモフは凝ことオリガを見ながら、時々大きく瞬またきををした。

「これは何うも妙な論法になつたものですねえ！」と、オプローモフは瞬またいた。「私は斯うとられやうと思はなかつたんです……」

が、オリガは矢張り彼の足先から頭のでつべんまでを毒々しい眼付で眺めてゐた。

『ですが、あなたを狂氣まぼろしにする程の幸福と云ふのは？』と、オリガは續けた。「今迄の朝も、晩も、此の公園も、また私が「愛してゐます」と云つた言葉も——皆な下らないもので、何の價値ねいちもなく、何の犠牲でも、苦痛でもないのですか？』

「あゝ、地の中へでも潜もぐり込みたいやうだ！」と、オプローモフは考へた。彼にオリガの考へが分つて來るに従つて彼は内心の苦痛を感じて來たのであつた。

『ですが、』と、オリガは熱心に訊きき始めた。「あなたは書物や、勤務つとめや、世間などの爲めにお疲れなすつたやうに、此の愛の爲めにもお疲れなすつたんでせう。同時に他の女も、他の愛もないので、御自分の長椅子の上うへにいらつしやるやうに私の傍で突然にお疲れなすつたのでせう。私の聲もあなたを醒さすことが出來ないのでせう。心の腫物はれものが癒なつて了つたのでせう。女などより御自分の夜着の方があなたにとつて御大事なのでせう……」

「オリガさん、そんなことはありませんよ！」と、オプローモフはオリガから一寸離れながら不満足さ

うに遮つた。

『何どうして？』と、オリガは訊きいた。「あなたは、私が《間違つてゐるので、結局他の男おとこを愛するやうになる。》とおつしやつたけれど、私は何うかすると反つてあなたが私に對する愛を失つてお了りひなすつたのだと思ふことがありますわ。さうであつたら何うでせう？ 私は何と言つて今自分の爲ためてゐることを辯解べんげいしたらいゝでせう？ 若し人様せけんも世間よもなければ、私は自分自身に何と言ふでせう？……私も矢張り斯んな事を考へて眠ねらないことがあるのよ。けれど將來を推察すいさつしてあなたを苦しめやしませんわ。だつて將來の幸福を信じてゐるんですもの。けれど私の幸福は次第しだいに恐怖おそを強めてゐますわ。あなたの眼が私によつて輝きらいた時や、あなたが丘の上うへに攀登のぼつて私を捜したり退屈たいくつを忘れたり、私の爲ために熱あつい日ひ中ちゆう、花束はなむくや、書物ほんなどを買かひに街まちへゐらして下さつた時や、私があなたを笑はせたり、あなたに生活慾せいかよくを起おこしたのを知つた時など、私はどんなに喜よろこんだか分わりません……私はたゞ幸福だけを待つてゐるんです。捜たづしてゐるんです。そしてそれを見附みけたことを信じてゐます。で、たとへ私が間違まちがつてゐても、たとへあなたのおつしやる通り私が自分の過誤おとまちを泣くやうなことがあつても、少なくとも私の過誤おとまちは私の罪つとでないことを此處こゝで（と、彼女は片掌かたてを胸むねに當あたてた。）感じてゐます。運命めいめいが幸福を望のぞまなかつたのです。神様かみさまが下さらなかつたのですわ。けれど私は將來の涙を怖おそれてはゐません。その涙は無駄むだになりやしないと思おもひますわ。私はその涙で何かを買かふのです……私はあなたに幸福で……あつたのですもの！……」と、オリガは附つけ足あした。

『また幸福になつて下さい!』と、オブローモフは願ふやうに言った。

『ですが、あなたは將來の暗黒ばかり見ていらつしやるのですわねえ。あなたにはどんな事でも幸福だと思はれないのですね……それは感謝なさらないからよ。』と、オリガは續けた。『あなたに愛が無いからよ。そしてたい……』

『主我主義だからです!』と、オブローモフは言ひ足したが、彼にはオリガを見る勇氣もなければ、口を利く勇氣もなく、また救しを乞ふ勇氣もなかつた。

『何處かへいらつしやい』と、オリガは靜かに言った。『何處へでも勝手にいらつしやい。』

オブローモフはちらりとオリガを見た。彼女の眼には涙が乾いてゐた。彼女は沈んだ顔付をして下を見ながら、砂の上に洋傘で何か書いてゐた。

『再た仰向に寝ていらつしやいよ。』と、オリガはやがて附け足した。『一番間違がないし、深淵に陥る心配がありませんわ。』

『私は自分を毒し、あなたをも毒し、反つて得らるべき幸福を失つて了ひました……』と、オブローモフは後悔するやうに呟いた。

『麴酒でも飲んでいらつしやれば、毒に當てられるやうなことはなかつたのに。』と、オリガは毒々しく言った。

『オリガさん!それは餘り思ひ切つたお言葉ぢやありませんか!』と、オブローモフは言った。『私は最

う意識で自分を罰してゐるのに……』

『でも、あなたは口の先だけで御自分を罰したり、深淵に飛び込んだり、生命の半分を犠牲にして、矢張り疑ぐつたり、夜分に眠れなかつたりしていらつしやるのですもの。あなたは本當に御自分に優しく用心深くそして醒醒としていらつしやるのねえ!餘り先の事を心配し過ぎるのですわ!……』

『確かにさうだ。此の女は何と云ふ單純な女だらう!』と、オブローモフは考へたが、恥かしいのでその考へを口に出さなかつた。

何うしてオブローモフがオリガを解釋することが出來ずに、生活し始めたばかりのオリガが自分で自分を解釋したのだらう?オリガの發達は何と云ふ速いことだらう!近頃まで彼女はまだ子供らしい觀察をしてゐたのに。

『私達にはもう何にもお話する事はありませんわ。』とオリガは起ち上りながら言った。『イヤ・イヤ・イチさん、左様なら。御機嫌……良う。これがあなたの幸福なんですわねえ。』

『オリガさん!さつちやありません、決してさうぢやありません!最ら悉皆分りましたから、何うか悪く思はないで下さい……』と、オブローモフはオリガの手を捉へて言った。

『私に何の御用なの?あなたに對する私の愛が誤りではないかとあなたは疑ぐつていらつしやるのでせう。私にはあなたの疑念を解くことが出來ませんわ。或は本當に誤りかも知れませんが……』

オブローモフはオリガの手を放した。再た彼の上に小刀が閃めいた。

『何うしてあなたには分らないのでせう？何うしてあなたに通じないのでせう？』と、オブローモフは再た顔に疑の色を浮べながら訊いた。『何うしてあなたの疑念が解けないのでせうねえ？……』

『私は何にも疑ぐつちやみませんわ。私は幸福を感じてゐるけれど、一年経つてそれが何つたるか分らないと昨日あなたに言ひましたわねえ。でも、一つの幸福に續いて第二、第三、第四と幸福が来るものでせうか？』と、オリガは大きな眼でオブローモフを見ながら訊いた。『何うでせう？あなたは私より澤山の經驗を有つていらつしやるのですから。』

けれどもオブローモフは最うオリガの此の考へに同意したくなかつたので、黙つたまゝ片手でアカシヤの木を揺つてゐた。

『いゝや、愛はたゞ一度發るだけです！』と、オブローモフは小學校の生徒のやうに教はつたばかりの一句を繰り返した。

『それ御覽なさい、私もさうだと信じてゐます。』と、オリガは附け足した。『若しさうでなかつたら、私はあなたに對する愛を捨てるかも知れません。私は誤りの爲めに苦しむかも知れません、あなたも矢張りさうよ。そして私達は別れるかも知れません！……けれど二度も三度も愛するなんて……そんなことがあるのですか。そんなことはないわ……私はそんなことを信じたくないわ！』

オブローモフは溜息を吐いた。此の「かも知れません」と云ふ言葉が彼の精神を掻き亂すのであつた。彼は沈んでオリガの後から隨いて行つた。が、一足毎に氣持がよくなつて來るのを感じた。彼が夜考へ

た間違と云ふのは、非常に遠い未來の事であつた……（此の間違は獨り愛ばかりではない。生活全體がさうだ……）と、突然に彼は考へた。《凡ての場合には皆な間違として衝突り合つてゐるのだ、何時間違えないものが出來やう？俺は何うしたのだらう？宛然盲人のやうだつた……》

『オリガさん』と、オブローモフは二本の指で一才オリガの身體に觸りながら（オリガは立止つてゐた。）言つた。『あなたの方が私より餘程惻巧です……』

オリガは頭を振つた。

『いゝえ、私はあなたより單純で、大膽です。あなたは何を怖がつていらつしやるのですか？あなたは愛の裏切を眞面目に信じてゐらしたてはありませんか？』と、オリガは傲然と確信してゐるらしく言つた。『今では最う私も怖れません！』と、オブローモフは元氣よく言つた。『あなたと一緒に受ける運命なら怖くありません！』

『其の言葉は私、近頃何かで讀んだことがあるわ……たしかシユーにあつたのかしら。』と、オリガは突然に彼の方へ振り返つて皮肉に言つた。『けれどもあれは女が男に言つたのよ……』

オブローモフはさつと顔を赤らめた。

『オリガさん！何うか今迄の通りにして下さい。』と、オブローモフは願つた。『私は「間違」を惟れませんか。』

オリガは黙つてゐた。

「さうして戴けますか？」と、オブローモフは怦々と訊いた。
オリガは黙つてゐた。

「ちや、言ふのがお厭なら、何か印を下さい……連翹の枝でも……」

「連翹は……過去のもので凋れて了りましたわ！」と、オリガは答へた。「これ、此の通り凋れてゐます！」
「過去のもので凋れて了つたんですつて！」と、オブローモフは連翹を眺めながら繰り返した。「ですが手紙も過去のものですよ！」と、彼は突然に言つた。

オリガは頭を横に振つた。オブローモフはオリガの後から隨いて行きながら手紙のことや、今迄の幸福のことや、凋れた連翹のことなどを考へてゐた。

「實際、連翹は凋れてゐる！」と、彼は考へた。「何故俺は斯んな手紙を書いたんだらう？何の爲めに俺は、夜通し眠らずに朝になつて斯んな手紙を書いたのだらう？けれども今では最う心が再た落着いた……（彼は欠伸をした）……馬鹿に眠くなつた。が、若し手紙さへ書かなけりや、斯んな事はなかつたのだ。オリガさんは泣かなかつたらう。今迄のやうにしてゐられたことだらう。二人は此の並木路に静かに腰掛けて、お互に見交しながら幸福のことを語り合つたことだらう。そして今日のやうにまた明日も……」オブローモフは口を一ばいに欠伸をした。

更にまた彼の頭には、若し此の手紙が目的を達したら、若しオリガが彼の考へに同意し、彼と同じく間違と遠い將來の嵐とに驚いたら、そして若し彼の所謂經驗と賢明とを聞き、別れることに賛成してお

互に忘れて了つたら何う云ふ事になつたらうと云ふ考へが突然に浮んだ。

あゝ、其の時は何うなつたらう！オリガに別れて街の新らしい借間へ行かなければなるまい！其れからは再た長い夜と、退屈な翌日と、堪へ切れない翌々日とが續くことだらう。そして何の日も何の日も益々蒼白めて行くだらう……

何うしてそんな事を忍べやう？それは死だ！が、若しそんな事にでもなつたら、オブローモフは病氣になるに違ひない。彼は別れたくなかつたのだ。だから彼は別れてゐられずに以前の通りになつて呉れと申し込むだらう。「何うして俺は手紙なんか書いたのだらう？」と、オブローモフは自問した。

「オリガ・セルゲーウナさん！」と、オブローモフは言つた。

「何ですか？」

「私が今迄言つたことに、も一つ附け足さなければならぬことがあります……」

「どんな事なの？」

「手紙を書く必要は些ともなかつたと云ふことです……」

「そんなことがあるのですか。あの手紙は必要でしたわ。」と、オリガは言つた。

オリガは振り返つて彼の顔付と、彼から突然に睡魔が去つたのと、彼の眼が驚きの爲めに擴がつたのを見ながら笑ひ始めた。

「必要ですつて？」と、オブローモフは其の吃驚した眼をオリガの香中に向けながら徐々に繰り返した。

が、オリガの香中には外套の二つの房があるだけであつた。

「何うして此の女は泣いたり、詰責つたりしたのだらう？狡猾な手段かも知れない。」けれども、オリガが狡猾でないことは彼にもよく分つてゐた。

たゞ多少制限された女だけが狡猾なことを言つたり、吝なことを爲したりするものだ。斯う云ふ女達は率直な智慧を有つてゐない爲めに撥條仕掛で狡猾に毎日の少つぽけな生活を動かし、自分の家庭上の交際をレース糸のやうに編んでゐることに氣が附かないのは無論のこと、自分達の周圍に生活の主要な線が畫かれて、其の線を越えて出ようとしても出ることが出来ないことにも、其の線の外でお互に交際することが出来ないやうになりつゝあるのにも氣が附かないのである。

狡猾は小さい貨幣のやうなものである。その貨幣で澤山に品物を買ふことは出来ない。小さい貨幣では二時間ばかりしか生命を繋げないやうに、狡猾では彼方で何かを隠蔽したり、此方で嘘を吐いたり、欺むいたりすることが出来るくらゐのものである。遠い地平線上を見たり、重大事件の端緒や結果などを作る場合に狡猾は何の役にも立たないものである。

狡猾は近視眼である。鼻の下だけならば良く見ることが出来るが、遠方の事は分らない。だから他の者が仕掛けた罠に陥るやうな事がよくあるのである。

オリガは單純な智慧を有つてゐた。で、焦眉の問題ばかりではなく、どんな問題でも明瞭に易々と解決するのであつた！彼女は事件の真相を直ぐに見抜き、近路を通つて其の真相に迫ることが出来た。

けれども狡猾は鼠のやうに周圍を駈け廻つて直ぐに隠れて了ふ……オリガの性格はさう云ふものではなかつた。何と云ふ珍らしいことであらう？

「何故手紙は必要なんですか？」と、オブローモフは訊いた。

「何故ですつて？」と、オリガは繰り返した。そして快活な額附をして素速くオブローモフの方へ振り向き益々オブローモフの反對を面白がつた。『それは斯う云ふ譯よ。』と、やがて間を置いて言ひ始めた。

「あなたが夜も寝ないで、私の爲めに手紙をお書きなすつたからよ。私も矢張り主我主義者ですもの！これが第一です……」

『では何故あなたは今私をお責めなすつたのです？最ら私に同意していらつしやるのに。』と、オブローモフは遮つた。

「あなたが苦痛をお作りになつたからよ。私は自分で苦痛を作つたことはありませんが、それでもなほ其の苦痛がひよい／＼出来るのです。でも私はもう苦痛がなくなつたのに喜んでゐたのです。ところがあなたは其れを作つて、私より先に味はつてお了ひなすつたんですもの。あなたは——悪い方よ！ですから私はあなたを責めたのよ。それからあなたのお手紙は感情と思想との戯れなのよ……あなたは、御自分の思ふ通りに昨夜と今朝とをお過しなさらなかつたのです。けれど、あなたのお友達の方は、あなたが生活なきることをどんなに望んでゐたでせう……これが第二よ。第三には……」

オリガはオブローモフに近づいたので、オリガの血が彼の心臓と頭の中とに流れ込むかと思はれた。

オブローモフは昂奮を感じ乍ら重苦しき息を吐き始めた。が、オリガは彼の眼を真正面に見てゐた。

『第三に、あのお手紙の必要な理由は、丁度鏡に映つたやうに、あなたの優しさと、あなたの警戒心と、私に就いての御心配と、私の幸福に對する危惧と、あなたの純激な良心とが……アンドレイ・イワヌイチさんがあなたに就いて私に教へて下さつたものが残らず現れてゐたからですわ。私は其れを愛し、其れが爲めにあなたの懶惰性……冷淡を忘れたのですもの……あなたは知らず識らず自分をあの手紙に現していらつしやるのよ。イリヤ・イリイチさん、あなたは主我主義者ではなくてよ。あなたがあんな事をお書きなすつたのは、別れる爲めではなかつたのよ。あなたは別れる事を望んでいらつしやるのではないのですもの。あなたがあれをお書きなすつたのは、私を欺むく事を怖れていらつしやるからですわ……潔白があの手紙を書かせたのよ。でなければあの手紙は私を侮辱したに違ひありませんわ。私も泣きはしなかつたでせう——自尊心から！此の通り、は私何故あなたを愛するかと云ふことを知つてゐるので。私は間違を怖れやしません。私はあなたを間違なく……』

オリガは斯う言ふ間、輝かしい顔附をしてゐたが、それはオブローモフにも分つた。オリガの眼は愛の勝利と、自分の力の意識とに輝いてゐた。頬には二つの赤い薔薇色の點が現れてゐた。彼も、彼も此の現象の原因であつた！彼はその潔白な心の働きて、彼女の精神に此の火花と、此の遊戯と、此の光輝とを投げ込んだのである。

『オリガさん！あなたは……あらゆる女の中で一番美しい方です。あなたは、世界ぢうの女の中で第一

です！』と、オブローモフは歡ばしきうに言つて、夢中に両手を擦りながらオリガに頭を下げた。『何うか……一度接吻をさせて下さい、言ひ現し難い幸福の印に。』と、彼は譚語のやうに囁いた。

と、オリガは忽ち一足後へ退つた。嚴やかな輝きと、顔の赤味とは消えて了つた。優しい眼は怖ろしく輝いた。

『厭です！厭です！近寄らないで下さい！』と、オリガは吃驚して殆んど恐怖を感じるものゝやうに手と洋傘とをオブローモフの前へ突き出しながら言つた。そして植ゑ込まれるか、或は化石でもしたもののやうに息も吐かず、怖ろしい身振と、怖ろしい眼附とをして半ば振り返つたまゝ立止つた。

オブローモフは急に憤ましい様子をした。彼の前に立つてゐる者は優しいオリガではなくして、辱かしめれた尊大と憤怒の女神が、唇を喰ひ締め、眼を電光のやうに光らせながら立つてゐるやうであつた。『殺して下さい……』と、オブローモフはどきまぎしながら怦々と呟いた。

オリガは徐かに顔を向け變へ、怖ろしきうにオブローモフを肩越しに見ながら歩き出したが、オブローモフは別段に變つた様子もせずに、水を浴せられた犬が尾を捲いてゐるやうに靜かに歩いてゐた。

オリガは一足進む毎にオブローモフを見て噴き出したくなるのを堪へながら益々落着いて歩き、たゞ時々身體を顫はせるだけであつた。薔薇色の點は最う兩方の頬に現れてゐた。

オリガが歩いて行くに従つて其の顔は晴やかになり、其の呼吸は落着いて來た。彼女はまた落着いた。歩調で歩き出した。オリガは、オブローモフにとつて『厭です』と云ふ言葉がどのくらゐ神聖なものであ

るかを見て取ると、彼女の怒の発作はだん／＼と静まつて、次第に憐愍の念に代るやうになつた。彼女は益々静かに足を運んだ……

オリガは自分の激昂を静めたかつたので、話題を考へ始めた。

《餘り不眞面目であつた！之が本當の間違だ！「厭です」あゝ、連翹は凋れた。》と、オブローモフは垂れ下つてゐる連翹を見ながら考へた。《昨日も凋れた。手紙も矢張り凋れた。そしてあの瞬間は、女が初めて天來の聲のやうに、俺に良い點がある、と言つた其の瞬間は俺の一生の中で一番幸福な時であつた。が、その瞬間も凋れて了つた。……》

オブローモフはオリガを見た。彼女は立つて、眼を伏せたまゝ、彼を待つてゐた。

『私、お手紙を頂きますわ！……』と、オリガは静かに言つた。

『手紙は凋れて了ひました！』と、オブローモフは手紙を渡しながら悲しきやうに言つた。

オリガは再びオブローモフに近づいて、更に頭を垂れた。彼女の睫毛はすっかり閉ぢられてゐた……オリガは身慄してゐるやうであつた。オブローモフは手紙を渡した。オリガは頭を擡げなかつた。其處を動きもしなかつた。

『あなたには吃驚させられましたわ。』と、オリガは優しく附け加へた。

『オリガさん、赦して下さい。』と、オブローモフは呟いた。

オリガは黙つてゐた。

『「厭です」と言はれた時には、私も驚ろきましたよ！……』と、オブローモフは悲しきやうに言つて、溜息を吐いた。

『それも今に凋れますわ！』と、オリガは顔を赧らめながら辛つと聞えるくらゐに言つた。

オリガはオブローモフに恥かしさうな、而も愛嬌のあゝ視線を投げ、彼の兩手を取つて其れを自分の手で固く握り締ると、やがて自分の胸に押し着けた。

『ね、酷く動悸してゐるでせう！』と、オリガは言つた。『あなたには吃驚させられましたわ！さ、もういいわ！』

と、彼女は彼を見もせずに向きを變へると、衣服の前を少し引き上げながら路に沿うて駈け出した。

『あなたは何處へ行くんです？』と、オブローモフは言つた。『私は疲れてゐますから、あなたに隨いて行けません……』

『放棄つて置いて下さい。駈けて行つて、歌を、歌を、歌を唄ふのよ！……』と、オリガは燃えるやうな顔をして言つた。『私は胸苦しいんですもの、痛い程ですわ！』

オブローモフは一處に立止つたまゝ、飛び翔る天使のやうなオリガの後を長い間見送つてゐた。

《あの瞬間も凋れるだらうか？》と、オブローモフは悲しきやうに考へたが、自分で歩いてゐるのか、立止つてゐるのか分らない程茫然としてゐた。

《連翹は過ぎ去つた。》と再び彼は考へた。《昨日も過ぎ去つた。夜も、幻影も、苦悶も、矢張り過ぎ去つ

た……さうだあの瞬間も連翹のやうに過ぎ去るだらう！だが、今夜が過ぎ去れば、同時に翌朝が輝くのだ……」

『いや、これは奇しい！』と、オプローモフは我を忘れて聲を出した。『愛も矢張り……愛もだらうか。けれども愛は熱い太陽のやうに愛されてゐる者の上に懸つてゐて、愛の雰圍氣の中には動く物も無ければ休んでゐる物も無いのだと俺は思つてゐた。そして愛には平靜がない、愛は何時も前へ前へと何處かへ進んでゐるものだと思つてゐた……（生活全體のやうに）』と、ストーリーリツは言つた。それに愛に向つて『停れ！』と言ふやうな、イエス・ナビンが生れたこともまだ聞かない。明日は何うなることだらう？』と、オプローモフは悸々しながら自問して、頹然と沈んで家へ歸つた。

彼はオリガの窓の傍を通る時、オリガがシューベルトを歌つて胸の苦痛を和らげてゐるのを聞いた。その聲は丁度幸福に充たされて歎息いてゐるやうであつた。

あゝ！世の中に生きてゐるのは、何と云ふ幸福なことだらう！

十一

オプローモフは家に歸つて見ると、ストーリーリツから手紙が来てゐた。其の手紙は（今一時か、でなければ永久に）と云ふ言葉で始まり、矢張り同じ言葉で終つてゐた。それからほ到る處に安坐を責める言葉があつた。ストーリーリツが行かうとしてゐるスウキツルへ屹度来るやうにと云ふことも書いてあつ

た。最後にはイタリヤに來いと書いてあつた。

若し外國へ來なければ、村へ行つて自分の仕事を整理し、百姓の放縱な生活を諷め、自分の収入を整理し、新築の指圖を自分でするやうにと書いてあつた。

（今一時か、でなければ永久だと言ふ例の言葉を忘れ給ふな。）と言つて彼は手紙を結んでゐた。『今一時、今一時、今一時！』と、オプローモフは繰り返した。『アンドレイは俺の生活にどんな詩的な事が演ぜられて居るか知らないのだ。彼れは此の上何を爲ようと思つてゐるのだらう？俺は何う云ふ場合にもあんなに忙しく爲てはゐられない。まア遣つて見るがいゝ！フランス人のことや、イギリス人のことなどを讀んで見ると、彼等は何時も働き、何時も仕事のことばかり考へてゐるやうだ！歐羅巴中を駆けずり廻つたり、アジャヤアフリカなどにさへ行つたりしてゐるやうだ。が、そのくせ些とも用事は無いのだ。寫生をしたり、古物の採集をしたり、獅子狩をしたり、蛇退治をしたりするくらゐのものだ。斯んな事をしない者は、安樂に悠然と家に坐つてゐて、友人や婦人達と朝餐を食つたり、晝餐を食つたりしてゐる——之が彼等の仕事なんだ！俺は何うして囚人のやうだらう！たゞアンドレイだけが（働け、馬のやうに働け！）などと考へてゐるのだ！が、何の爲めに働くのだ！俺は腹一ばいに食ひ、温く着てゐる。だが、オリガは再た俺がオプローモフかへ行かうと思つてゐるのではないかと訊いた……』

オプローモフは手紙を書いたり、種々な事を考へたり、建築師の許へ出かけた。程なく彼の小さい卓子の上には、家と庭園との設計圖面が置かれた。家は家族の住宅で、廣々としてゐて、それには

二つの露臺が附くことになつてゐた。

〔此處に俺が、此處にオリガが、此處に寢室が、(子供の寢室)が……〕と、彼は莞爾々々しながら考へた。〔だが、百姓達は、百姓達は……〕と、彼の頭からは微笑が消えて、其の額には心配の皺が出来た。〔隣の人が手紙をよこして詳しく知らせて来た。下作のことや、打成のことなどを書いてゐた……何と云ふ詰らない事だ！それにまだ皆なで金を出し合つて商業の盛んな大きな村へ道路を作る。それには橋を架けなければならぬから三千留出して呉れと申込んで来た。そしてオプローモフカを抵當に金を借りては何うだと言つてゐる……だが、俺には果してそんな事を爲る必要があるか何うか分らない……皆なには笑はれはしまいか？彼奴は嘘を言つてるんぢやないだらうか？……彼奴は潔白な男だと言ふ話だ。シトーリツは彼奴を知つてるが、彼も矢張り瞞されないと限らない。大金を棒に振つて了つたら何うする！三千留——大した金額だ！何處に其の出路がある？出處はない。怖ろしいことだ！それからまだ幾らかの百姓達を荒地へ遣らなければならぬと書いて、返事を至急呉れと言つてゐる——何時も至急返事を呉れと言ひやがる。が彼奴は財産を抵當に入れる爲めに一切の書類を公證人役場へ送らうとしてゐる。(私儀證據書類を残らず公證人役場へ發送致すべく候に付、且那樣にも役場へ御出での上、なほ御證明なし被下度)——何うしようと思ふのだらう！が、俺は何處に役場があるか、また役場の扉は何方に何う云ふ風に開くのかも知らない。〕

オプローモフは次の週間にも隣の人へ返事を出さなかつた。それにオリガは公證人役場へ行つたかと

彼に訊いた。近頃は近頃でシトーリツがまた彼とオリガとに手紙をよこして〔彼は何を爲てゐるか？〕と訊いて来た。

殊にオリガは自分の友の活動をたゞ外部からのみ観てゐるだけでは承知が出来なかつた。無論オリガの眼に映ずる範圍だけであるが彼女はオプローモフが快活に見てゐるか、元氣よく彼方此方と歩き廻つてゐるか、約束の時に森へ来るか、どのくらゐ街の出来事や、人々との對話などに注意を拂つてゐるか、と云ふやうなことを見てゐた。殊にオリガは一番熱心に、オプローモフが生活の主要な目的を忘れやしないかと監視してゐた。またオリガがオプローモフに公證人役場へ行つたか何うかと訊いたのは、シトーリツに友の消息を報告する爲めであつた。

夏の眞最中であつた。七月も過ぎやうとしてゐた。毎日好い天氣が続いてゐた。オリガとオプローモフは片時も離れたことがなかつた。彼は朗らかな日にはオリガと一緒に公園へ行つた。暑い日には彼女と一緒に森へ行つて、松の間で日を送つた。彼はオリガの脚下に坐つて、彼女に書物を読んで聞かせるのであつた。オリガは最う他の布片をカンバスに張つて刺繡をしてゐた——こんどはオプローモフの爲めであつた。

彼等も矢張り暑い夏のやうな状態にあつた。で時々雨雲が押し寄せて来るかと思ふと、直ぐに過ぎ去つて了ふのであつた。

若しオプローモフが重苦しい夢を見て、その心臓を疑念が訪づれるやうなことがあると、オリガは天

使のやちに彼の番をしてゐた。オリガは其の晴々しい眼で彼の顔を見てゐた。そして彼の心に蹲つてゐるものを見抜いて了ふ。と、凡ては再た静かになり、感情も再た河のやうに悠然と流れて、その上には新らしい空模様が反射するのであつた。

人生や、愛や、其他種々なものに對するオリガの見解は、益々明瞭し、益々一定して來た。オリガは以前よりも固い確信を持つて自分の周囲を見てゐたので、將來を思つて心を惱まされるやうなことがなかつた。オリガには新らしい方面の智慧と、新らしい性格とが發達した。その性格は詩的に、複雑に、深刻に現れることもあれば、また常規的に、明瞭と、靜かに、そして自然に現れることもあつた……

オリガには一種の頑固があつた。其の頑固は運命の有ゆる暴威を歴へるばかりか、オプローモフの懶惰性と冷淡とをも動かすものであつた。若しオリガに或る計畫が現れると、その計畫は直ぐ實行になつた。オリガは其の計畫のことばかり話してゐた。たとへ話さなくつても、また實行しなくつても、オリガは其の計畫を變へもしなければ忘れもせず、捨てもしなければ失ひもせず、自分の求むるものを斷えず考へながらそれを實現し行つた。

オプローモフは彼女が何處から斯んな力と斯んな才能とを得たかを覺ることが出来なかつた。オリガは何んな事件が現れても、それを何うすればいゝかと云ふことを知つてゐたし、またそれを巧みに片附ける才能を有つてゐた。

《あんな才能を有つてゐるのは、》と、オプローモフは考へた。《オリガさんの片方の眉が平らにならな

いつも少し釣り上つてゐて、其の上にあの細い辛つと見えるくらゐの皺があるからだ……彼處に、あの皺の中に、オリガさんの頑固が集まつてゐるのだ。》

オリガの顔に、どんな平和な輝かしい表情が現れても、此の皺は消えなかつた。眉も平らにならなかつた。けれどもオリガには外部の力も、てきばきした方法や得手などもなかつた。また計畫に對する執拗や頑固などは一足もオリガを女の圏内から引き出さなかつた。

オリガは阿諛者になるのも嫌ひであつた。下らない崇拜者に齒の浮くやうな言葉をかけたり、利發な智慧で滿堂のお客を驚ろかせて、隅にゐる誰かに、偉い！偉い！と叫ばれたりしたことも思はなかつた。寧ろ彼女には多くの女に特有な臆病心があつた。尤もオリガは鼠を見て吃驚したり、椅子から落ちて氣絶をしたりしなかつたが、それでも矢張り家から遠くへ行くのを怖がつたり、怪しいと思ふやうな百姓を見てびく／＼したり、夜になると盗人が入らないやうに窓を閉めたりした——斯う云ふことは皆な女にあり勝ちの事である。

それからオリガは同情と憐憫の念に豊かであつた。彼女は涙を呼び出すのをさう六ヶ敷い事と思はなかつた。彼女の心は非常に柔らかであつた。オリガはまた優しい愛を有つてゐた。彼女は誰に對しても優しくつて愛嬌があつた——一言で言へば彼女は女であつた！

何うかするとオリガは自分の言葉の中に諷刺を仄めかすことがあつた。が、此の諷刺の中にさへ一種の禮儀と優しく愛らしい智慧とが輝いてゐたので、誰でも喜んでオリガの諷刺の下に額を持つて行つた。

其の代りオリガは身を切るやうな風を恐れずに夕方薄着をして歩いて——何の障りもなかつた！オリガは健康であつた、食事も随分進む方であつた。オリガには好きな食物があつた。彼女はその作り方も知つてゐた。

尤も、大抵の女は斯んな料理を知つてゐるが、大抵の女は場合に應じた料理の仕方を知らない。たとへ知つてゐても、たゞ習つたり、聞いたりしたことだけで、何故さうしなければならぬかと云ふことを知らない。だから彼等は習つたり、聞いたりした通りに料理をするだけで、二言目には叔母だの従姉だのを引合ひに出すのである。

また大抵の女は何を望まなければならぬかと云ふことさへ知らない。たとへ自分の要求を決めてもその要求は何うでもいゝ程に弱いものである。之は彼女達の眉が溫柔しく弧形をなしてゐて指で引つ張ることが出来るのと、額に皺がない爲めである。

オブローモフとオリガとの間には、他人に分らない不思議な關係があつた。どんな眼付をしても、他人の居る處でどんな無意味なことを言つても、その眼附なり、言葉なりは彼等二人にとつて特別な意味を有つてゐた。そして彼等は何事によらず、其處に愛に對する暗示を認めてゐた。

オリガも益々自信を強めてゐる矢先に卓子の前で、自分の經驗に似寄つた誰かの戀物語を聞く時など時によると酷く昂奮することがあつた。またどんな戀物語でも、皆な同じやうなものだと思つて、顔を赧らめることなどもあつた。

オブローモフもお茶の時など斯んなことを仄めかされると狼狽て乾麴麩を一掴み掴んで誰かに笑はれることがあつた。

彼等は鋭敏に、そして注意深くなつた。何うかすると、オリガはオブローモフに會つたことを叔母に言はないやうなこともあつた。オブローモフも家を出がけには街へ行くんだと言つて其の實公園へ行くこともあつた。

然しオリガの智慧は幾ら明晰でも、幾らオリガは注意して周囲を見廻しても、また幾ら健康で、晴々してゐても、彼女も矢張り新しい病的な徴候を感じるものがあつた。オリガは時々不安に襲はれ、其の不安を種々に考へて見ても、其れを何う解釋して良いか分らないことがあつた。

オリガは暑い日中にオブローモフに手を取られて歩いてゐる時など、頽然とオブローモフの肩に凭れかゝり、一種の疲勞を感じながら頑固に黙つたまゝ機械的に歩くことがあつた。さうした時には彼女は元氣を失ふ。生氣を失なつた彼女の疲れた眼は、凝と据つて何處か一點を見詰めてゐる。オリガには自分の眼を他の物へ向け變へるさへ怠儀なのである。

オリガは重苦しさを感ずる。何かで胸を壓へられてゐるやうで不安になる。オリガは肩から外套や、肩掛などを脱ぐ。が、斯うしても少しも利き目がない——矢張り壓迫を感ずる。矢張り息苦しくなる。オリガは木の下に横にでもなると、幾時間もさうして横はつてゐることがある。

オブローモフは驚いて、木の枝でオリガの顔を煽ぐ、が、オリガは堪らないと云つた風にオブローモ

フの心遣ひを斥ぞけて手を振る。

やがてオリガは突然に溜息を吐き、意識的に自分の周囲を見廻はし、オプローモフを眺め、彼の手を握つて莞爾とする。と、再た元氣と笑顔とが現れる。その時、オリガは最う我に歸つてゐるのである。

殊にある晩、オリガは此の怖ろしい状態に、即ち、一種の愛の睡遊病に陥つて、新らしい世界をオプローモフに見せたことがあつた。

息苦しく暑かつた。林からは生温い風がざわ／＼と吹いてゐた。空は重々しい雲で閉ぢられてゐた。周囲は益々暗くなつた。

『雨になりますね』と、男爵は言つて家へ歸つた。

叔母は自分の室へ入つた。オリガは沈んだまゝ長い間、ピアノを弾いてゐたが、やがてそれを止めた。『弾けないわ。指が慄へるし、それに何だか息苦しいわ』と、オリガはオプローモフに言つた『庭へ行きませう。』

二人は長い間、手を取り合つて黙つたまゝ並木路を歩いた。オリガの手は濕々して柔らか／＼つた。二人は公園に入つた。

木と灌木とは暗い一つの塊に融け合つてゐた。二足も先は何にも見えなかつた。たゞ砂を敷いた路だけが白い條のやうに見えてゐた。

オリガは凝と暗闇の中を見入つてゐたが突然にオプローモフへ抱き附いた。二人は黙つて歩き廻つた。

『私、怖いわ！』二人が殆んど索るやうにして狭い並木路の見透せない暗い林の壁の間に入つた時、オリガは溜息を吐いて突然に斯う言つた。

『何がです？』と、オプローモフは訊いた。『オリガさん、怖いことありません。私が附いてゐますから。』
『私にはあなたも怖いわ！』と、オリガは囁くやうに言つた。『けれど何だか氣持よく怖いわ！心臓の動悸が止んでゐてよ。觸つて御覽なさい。こんなよ。』

が、オリガは身慄をして周囲を見廻した。

『何でせう、何でせう？』と、オリガは身振をし、両手でオプローモフの肩をしつかり捉まへながら囁いた。『今、闇の中で誰かチラツとしたのを御覽にならなかつて？……』

オリガは益々彼にしがみついた。

『誰もみませんよ……』と、オプローモフは言つたが、矢張りぞく／＼した。

『私の眼を速く何かで蔽うて下さい……しつかりと！』と、オリガは囁くやうに言つた。『あゝ、最う何にも見えない……あれは神経だつたのよ』と、彼女はどき／＼しながら附け足した。『あら、再た！御覽なさい、あれは誰でせう？何處かの腰架に腰掛けませう……』

オプローモフは手索りて腰架を捜し出してオリガを其處へ腰掛けさせた。

『オリガさん、家へ行きませう』と、オプローモフは勧めた。『あなたは身體の加減が良くないのです。』
オリガはオプローモフの肩に頭を載せた。

『いやですわ、此處の方が空気が綺麗ですから』と、オリガは言った。『私の此處が心臓のところを履し着けられるやうよ。』

オリガはオプローモフの頸に熱い息を吹きかけた。

オプローモフはオリガの頭を手で觸つて見た。頭は熱かった。胸は重苦しきやうに息をし、度々溜息を吐いてその苦痛を和らげてゐた。

『家へ行つた方が良くはありませんか？』と、オプローモフは不安さうに言った。『寝なけりや不可ませんよ……』

『いやです、いやです、打棄つて置いて下さい。構はないで下さい……』と、オリガは落膽したやうに辛つと聞えるくらゐに言つた。『私の此處が燃えてゐるんですから……』と、オリガは胸を指差した。

『そんなことを言はずに家へ行きませう……』と、オプローモフは急がせた。

『いや、まあ少し待つて下さい。今直ぐに良くなりますから……』

オリガはオプローモフの手を握り、時々顔を近づけてオプローモフの眼を見ながら何時までも黙つてゐたが、遂々泣き出した。

最初は静かであつたが、終には歎息を吐き出した。オプローモフはおどく／＼してゐた。

『オリガさん、何うか速く家へ行つて下さい！』と、彼は不安さうに言つた。

『大丈夫よ』と、オリガは歎息をしながら答へた。『構はないで、泣き度いだけ泣かして置いて下さい』

……涙で火が消えて、幾らか気分が良くなるでせうから。之は皆な神経の所爲なんです……』

オプローモフは暗闇の中にオリガが苦しきやうに息をしてゐるのを聞き、彼の手に滴たるオリガの熱い涙と、彼の手を痙攣的に握り締めるオリガの手に感じた。

オプローモフは指も動かさなければ、息も吐かなかつた。が、オリガの頭は彼の肩に横はつてゐた。

息は焼くやうに彼の頬に吹きかけられてゐた……彼も矢張り身慄してゐたが、唇を彼女の頬に押しつける勇氣を有たなかつた。

やがてオリガは段々と静かになり、彼女の呼吸も平らになつて來た……オリガは黙り込んで了つた。

オプローモフはオリガが眠つたのではないかと思つたので、身動きするのを怖れた。

『オリガさん！』と、オプローモフは囁くやうに叫んだ。

『何に？』と、オリガがも囁くやうに答へてホツと溜息を吐いた。

『最う……癒りました……』と、オリガは頹然して言つた。『よほど樂になりました。自由に呼吸が吐けるようになりました。』

『歸りませう』と、オプローモフは言つた。

『歸りませう！』と、オリガは厭々ながら繰り返した。『ねえオプローモフさん！』と、やがて優しく囁き、彼の手を握り、彼の肩に凭り掛つたまゝ、踉蹌々々としながら家へ行つた。

客間へ入るとオプローモフはオリガを見た。彼女は元氣がなかつた。が、宛然夢でも見てゐるやうに

異様に、そして無意識に莞爾とした。

オブローモフはオリガを長椅子に坐らせてその傍に跪つき、幾度となく深い感動の中にオリガの手を接吻した。

オリガは何時までも同じ微笑を湛へながら両手を握り合つてオブローモフを見、なほ彼が扉口から出て行くのを見送つた。

オブローモフは扉口の處で振り返つた。オリガは矢張り彼の後を見てゐた。彼女の顔には矢張り例の疲れと、憐れつばい微笑とが現れてゐた。オリガは如何にも其の微笑を消すことが出来ないものゝやうであつた。……

オブローモフは考へに耽りながら歸つた。彼は何處かであんな微笑を見たことがあつた。彼は何かの繪にあんな微笑を浮べた女が描かれてあつたことを想ひ出した……が、それがコル德里ヤでないことだけは確かであつた。

翌る日、彼は容體を訊きに遣つた。使者は斯う云ふ報告を齎らした。

『有難う御座います。今日は食事を勧められてゐます。晩には皆なで五露里ある所まで花火を見に行くつもりです。』

オブローモフは信じられないので、自分で出かけて行つた。オリガは小花のやうに晴々しかつた。眼には輝きと、活氣とが現はれてゐた。頬には二つの薔薇色の星が紅くなつてゐた。聲は平常の通り響があ

つたが、オリガはオブローモフが自分に近づいた時、突然にどきまぎし出して、も少しで叫ぼうとした。

殊にオブローモフが今日は如何ですか？ と訊いた時など、酷く昂奮した。

『あれは一寸とした神経の攪亂ですわ』と、オリガは狼狽て言つた。『私の叔母は、速く寝るやうにしなけりやいけない』と云つて言つてゐますわ。斯んなことは暫くなかつたものですからねえ……』

オリガは斯う言つて了はないうちに、最う宥して貰ひ度いと言つた風に話を切つたが、何うして心の亂を感じるのかと云ふことは——自分ながら分らなかつた。昨日の晩と、此の攪亂とを想ひ出すことが何故彼女を嗜み、彼女を焼くのであらう？

オリガには何か聴かしいものがあつた。誰かを見ると悲しかつた。其れは自分でもなければ、オブローモフでもなかつた。が、後でオリガには、オブローモフが益々愛らしく、益々慕はしくなつたことや、自分が彼に泣き度い程引き附けられるのを感じてゐることや、自分が彼と昨晚から或る不思議な親密な關係に入るやうになつたことなどが分つた。

オリガは長い間眠らなかつた。朝も長い間心を波立たせながら、並木路に沿うて公園から家まで幾度となく往復した。そして何時までも考へてゐた。種々なことを想像した。或は擧めたり、或は突然に昂奮して顔を赤くしたり、何かに莞爾したりした。が、矢張り何事をも解決することが出来なかつた。

『あゝ、ソーニチカ！』と、オリガは悲しさに考へた。『何と云ふ幸福な女だらう！彼の女なら直ぐに決めて了ふだけだ』

が、オプローモフは何うしてゐたらう？彼は何うして昨日オリガと會つた時、黙つてゐたのだらう、
凝としてゐたのだらう？オリガの呼吸が彼の頬に熱氣を吹きかける必要もなければ、オリガの熱い涙が
彼の手に灑がれる必要もなく、また彼がオリガを殆んど抱くやうにして家へ連れ戻り、彼女の心の傲慢
な囁を聞く必要もなかつたのだらうか？…他の人なら何うしたであらう？他の人達はあんなに無禮な
視方をしてゐる。

オプローモフは其の青年時代を、該博な知識を有ち、有ゆる人生問題を疾づくに解決し、何物をも信
じないで、何時も冷静に賢明に解剖してゐる青年達の仲間で送つたけれども、然し彼の精神の裡には、
友誼や、愛情や、人間の潔白などに對する信仰が熱を有つてゐた。で、彼は幾ら人を見誤つても、更に
再た見誤つても、彼の心は或る何ものかを求めてゐた。そして一度も善良な信すべき心を疑はなかつた。
彼は竊かに女の純潔を崇拜し、女の權利を承認し、女に犠牲を捧げてゐたのである。

が、彼は、善と、無垢とを崇拜する説を公然に認める性質を缺いてゐたので、たゞ靜かに無垢の匂に
酔つてゐた。が、何うかすると、貞操や、貞操崇拜に疑を挟む犬儒派の哲學者の説にかぶれ、彼等の亂
暴な説に自分の輕浮な言葉を附け加へるやうなこともあつた。

オプローモフは善とか、正義とか、純潔など、云ふやうな言葉が——人間の話の流れに投げ込まれる言
葉が如何に偉大な價值を有つてゐるか云ふことや、此の言葉がどんな深い溝を作つて行きつゝあるか
と云ふことなどを明かに理解することが出来なかつた。また彼は大聲に大聲に、そして少しも恥づる色な

く、勇敢に稱へられた此の言葉が、世俗的な諷刺家の醜い叫喚の中に沈んで了ふものではなくして、
丁度灰のやうに社會生活のどん底に沈みながら常に自分の爲めに貝殻を見附け出してゐることを考へな
かつた。

大抵の人間は、善いことを言ふ時には、恥かしさうに顔を赤くして口咄り、輕浮な言葉なら大膽に大
聲に揚言する。そして彼等は其の言葉が不幸にも無駄にならずに、何うかすると磨滅することの出来な
い惡の痕跡を長く残すものだ云ふことを疑はない。

其の代り、オプローモフは實際には潔白であつた。一點の汚點でも、冷淡無情な犬儒哲學の片影でも、魅
力なく、争闘なくして彼の良心に横はることは出来なかつた。彼は、或る者が馬や家具を換へたとか、或
る者が女を換へたなど、言ふやうな話を毎日聞くのが嫌であつた…それに換へると云ふ事は非常に費
用のかゝることであつた…

彼は男が失なつた品位と潔白とを恢復しようとして苦しんだり、自分に關係のない女の不潔な墮落の
爲めに泣いたりすることが度々あつた。が、世間を怖れていつも黙つてゐた。

之は察しなければならぬ。オリガは之を察してゐた。
男達は斯うした奇人を笑ふ。が、女達は直ぐに彼等の心を知る。貞操潔白な女は、同情から彼等を愛

する。墮落しかゝつた女は腐爛から爽やかになる爲めに彼等に近づかうとする。
夏も深くて、遂々去つた。朝夕は薄暗く濕々して來た。連翹や菩提樹の花が散つたばかりか、樹の果

さへ落ちた。オブローモフとオリガとは毎日會つてゐた。

オブローモフは生活を獲た。つまり以前遠ざかつてゐた凡てを再た獲たのである。何故フランスの公使は羅馬を去つたか、何故イギリス人は軍隊を滿載した船を極東に送つたかと云ふやうなことを知つた。ドイツやフランスで新道を開くのをさへ興味があつた。が、オブローモフを経て大きな村へ道路を作ると云ふことに就いては考へなかつた。公證人役場へ行つて證據立もしなかつた。シトリーツに返事の手紙も出さなかつた。

オブローモフはオリガの家で毎日取り交される話の範圍に廻轉してゐる事と、其處で讀む新聞の中の事だけしか知らなかつた。それからなほ執拗いオリガのお蔭で非常に熱心に當時の外國文學の傾向を見てゐたが、餘は全然純潔な愛の雰圍氣の中に沈んでゐた。

此の薔薇色の雰圍氣は度々變つたが、其の根柢となつてゐるものは地平線上に雲の影を認めないことであつた。若しオリガが何うかしてオブローモフのことや、彼に對する自分の愛の事などを思案したり、心の中にある楽しい時や、楽しい場處などが此の愛から離れたり、彼女の凡ての間に對してオブローモフが満足な整つた答をして呉れなかつたり、オリガの意志にオブローモフの意志が應へなかつたり、生活に對するオリガの勇氣と戰慄とにオブローモフがたゞ凝として動かない情熱的な眼附で答へたりするやうなことがあると——オリガは惱ましさうに沈んで了ふのであつた。そして何か蛇のやうな冷たい物が彼女の心の中へ匂ひ込んで彼女の空想を破壊し、温かい物語のやうな愛の世界は、凡てが灰色に見える

秋の日に變るのであつた。

オリガは斯うした幸福の不充實と、不満足とが何うして生ずるのであらうかと考へた。では、彼女が不足に思ふのは何であらう？まだ何が要るのだらう？之は運命ではないだらうか——オブローモフを愛することが彼女の使命ではないだらうか？彼女の愛は、オブローモフの溫柔と、善に對する潔白な信念と、彼女が今迄男の眼の中に見たことのない優しさとで辯解されるのである。

オリガの凡ての視線に對してオブローモフの眼が首肯かなかつたり、オブローモフの聲の中に一度オリガが夢現で聞いたことのある例の聲が響かなかつたりすることが何うして問題になる？……それは想像か神經なのだ。神經の言ふことを聞くのは伶俐なことではない。

また、たとへオリガが此の愛から離れようとしても——何うして離れることが出来る。事は既に遂げられたのだ。オリガは既に愛したのだ。愛を衣服のやうに脱ぎ捨てることは出来ない。《一生の中に二度戀をする者はない。》と、オリガは考へた。《世間では二度戀をすることは非道德的なことだと言つてゐる。》オリガは斯う云ふ風に愛を學び、また斯う云ふ愛を要求してゐた。そして一步踏み出すと、涙か或は微笑に出會すのだと思つて踏み出すことを躊躇つてゐた。が、やがて彼女の顔には最う集中的な表情が現れた。其表情の下には涙と微笑とが潜んでゐた。而も其の表情は、オブローモフをあんなに驚かしたのだ。けれどもオリガは斯んな自分の考へや、斯んな内心の争闘をオブローモフに仄めかさなかつた。オブローモフは愛を學ばなかつた。彼は何時かシトリーツに語つたことのある眠つたやうな甘い空想

に耽つてゐた。時には彼は何時も晴々してゐる生活を信ずるやうなことがあつた。そして再た善良で親しみのある暢氣な人達の住んでゐるオプローモフカを夢見た。物見臺に腰掛けてゐるところや、幸福の充實と飽滿とに酔つてゐるところなどを夢見ることもあつた。

オプローモフは今でも何うかすると斯う云ふ思案に耽ることがあつた。そしてオリガの來るのを林の中で待ちながら、彼女には祕密で二度も居眠りをして……突然に雨雲に襲はれたことなどもあつた。或る時、彼等二人は何處からか頹然と疲れて口も利かずに歸つて來たことがあつた。丁度大街道を横切らうとする時、彼等の方へ雲のやうな埃が飛んで來た。埃の中には四輪車が走つてゐた。四輪車の中にはソーニチカが自分の夫と一緒に腰掛けてゐた。まだ其他に一人の紳士と、一人の婦人とが同乗してゐた。

『オリガさん・オリガさん！オリガ、セルゲーウナさん！』と云ふ叫び聲が響き渡つた。

四輪車は止つた。中の紳士や婦人達は皆な車から出てオリガを取り圍み、挨拶をするやら接吻をするやらして長い間オプローモフは氣が附かずに話をしてゐた。が、やがて皆な彼を見た。其の中の一人の紳士は眼鏡をかけてゐた。

『此の方は何方？』と、ソーニチカは靜かに訊いた。

『イリヤ・イリイチ、オプローモフさんです！』と、オリガは彼を紹介した。

皆な歩いて家へ行つた。オプローモフは面白くないので、仲間から離れようと思つた。で籬に片足

をかけて、他の方から家へ入らうとした。が、オリガは眼で彼を止めた。

斯んなことは何でもない事ではあるが、其處に居合した紳士や婦人達は皆な妙な眼附でオプローモフを見た。之も何でもありやしない。以前にも彼が眠たさうな意屈らしい眼附をし、身装も構はずにゐた時に、皆な斯んな眼附で彼を見ない者はなかつたから。

けれども紳士と婦人達は其の妙な眼附を彼からオリガへ移した。彼等が其の疑ふやうな眼でオリガを見た時、オプローモフの心臓は突然に冷乎とした。何者か彼を噛み始めた。其の苦痛に堪へ切れないので、オプローモフは家へ歸つて憂鬱に沈んでゐた。

翌る日、オリガの愛らしいお饒舌と、愛嬌のある冗談とは、オプローモフを面白がらせることが出来なかつた。彼はオリガの執拗い問を頭痛がすると言つて斷り、七十五哥價の哥羅尼水を頭に注がれるのを辛つと我慢したりしてゐた。

それから其の翌る日、彼等二人が遅くなつて家へ歸つた時など、叔母は何う云ふ譯か、非常に注意して彼等を見た。殊に彼を注意して見た。やがて叔母は少し脹れ上つた其の大きな臉を閉ぢたが、彼女の眼は矢張り睫毛を透して彼等を見てゐるやうであつた。叔母は一寸思案しながら睡眠劑の匂を嗅いだ。オプローモフは煩悶した。が、黙つてゐた。彼はオリガに自分の疑惑を言ひ得なかつた。と云ふのは彼はオリガを驚かし、彼女に身慄をさせるのを怖れてゐたからである。が、更に之を正しく言ふと、彼は自分の爲めに怖れたのであつた。彼は斯んな重大事件を詮索して此の靜かな晴れ渡つた平和を攪亂す

るのを怖れてゐたからである。

これは最う、オリガがオプローモフを愛してゐるのは誤りではなからうかとか、或は彼等の愛や、彼等が時々林の中でたつた二人きりで夜遅く密會することなどが誤りではなからうかなど云ふやうな問題ではなかつた。

「俺は接吻をする爲めに行つたのだ。」と、オプローモフは怖ろしきうに考へた。「が、之は倫理書中の刑事的犯罪で、些々たる最初の犯罪ではない！此の犯罪までには多くの階段がある。握手とか、愛の承認とか、手紙とか……俺達は斯んな事を皆な爲て了つたのだ。けれども」と、彼は頭を擽げて其の先を考へた。「俺の企は潔白だ。俺は……」

と、突然に雨雲は消え去つて、彼の前にはお祭のやうな輝かしいオプローモフカが薫り、それが太陽の光に燦々と輝き出した。其處には緑の丘もあれば、銀の河もあつた。彼はオリガと一緒に考へ沈みながら彼女の腰を抱いて長い並木路を歩いてゐる。四阿や物觀臺などに腰掛けてゐる。……

オリガの傍にゐる者は皆なオリガを尊敬して頭を下げる——一言で言へば、以前彼がシトリーツに話した通りである。

「さうだ、さうだ。けれども之から始めなければならぬのだ！」と、オプローモフは再た怖ろしきうに考へた。「愛すると云ふ三度の言葉も、連翹の枝も、愛の承認も——皆なこれは一生涯の幸福の萌芽でなければならぬ。これは純潔な女が二度と繰り返すことの出来ないものだ。ぢや、俺は何だらう？俺は

何者だらう？」彼の頭は槌で敲かれるやうであつた。

「俺は誘惑者だ、色魔だ！卑劣な、そして老獪な色情狂としての此の俺は、脂ぎつた眼と、赤い鼻とを持つた俺は、女から盗んで來た薔薇を縫飾の中に突き込んで、友人の耳に自分の勝利を囁くやうな………たゞそれを……それを……しないでだけだ。あゝ、あゝ、俺は何處へ入つて來たのだらう！そら、其處に深淵がある！オリガさんは其の深淵の上を高く飛んでゐない。オリガさんは深淵のどん底にゐる……何と云ふ事だらう、何と云ふ事だらう。」

彼は落膽した。彼は自分の生活の虹のやうな色彩が突然に蒼くなつたこと、オリガが將來犠牲にならなければならぬこと、の爲めに子供のやうに泣いた。彼の凡ての愛は犯罪であつた。良心の上に現れた汚點であつた。

一時攪亂した智慧は、やがてオプローモフが其の規定の出路を意識しに時に再た晴々しくなつた。其の出路と云ふのは、指輪を嵌めた手をオリガに出すことである……（譯者註、これは結婚をする意味である。教會の規定により、新婚者二人は祭壇の前で指輪を交換する。）

「さうだ、さうだ。」と、オプローモフは喜ばしさに慄へながら言つた。「さうすれば、其の答へとして恥かしさうな同意の眼が注がれるだらう……オリガさんは一言も言はず、昂奮して心の底から微笑むだらう。それからオリガさんの眼は涙に満たされるだらう……」

涙と、微笑と、黙つて差し出す手と、それから生々した熱い喜悅と、幸福な、そして忙がしさうな身

振と、長い／＼對話と、二人きりの瞬きと、此の信じ合つた心の瞬きと、神秘的な理解とは、二つの生命を一つに合せて了ふだらう！

空話や、毎日の出来事に就いての對談の中にも、其の空話と對談以外に無形の愛が籠つてゐることは誰の眼にも見えるだらう。誰も彼等二人に輕蔑の眼を注がないやうになるだらう……

俄かにオプローモフの顔は嚴そかになり、勿體らしくなつた。

『さうだ。』と、彼は獨語つた。『其處に正當な、尊い、堅實な幸福の世界があるのだ！今迄俺が、此の色彩を隠したり、愛の匂の中で子供らしい事をしたり、面會を求めたり、月夜に歩いたり、處女の心臓の鼓動を聞いたり、オリガさんの空想の慄へを捉へたりしたのは恥かしいことであつた……あゝ！』

オプローモフは耳の下まで眞赤になつた。

『今晚、オリガさんは、愛によつて負はせられる嚴重な義務を知るのだ。たつた二人つきりて會ふのは今日が最後だ。今日が……』

オプローモフは片手を心臓の上に載せた。心臓は強く鼓動してゐたが、潔白な人の心臓のやうに規則正しく鼓動してゐた。彼は再た、二人は最う會ふ必要がないのだと言つて先づオリガを悲しませてやらう、それから怦々と自分の計畫を打ち明けやう、が、其の前にオリガの考へを索る必要がある、オリガはどきまぎすることだらう、けれども、其處には……など、考へて心を波立たせた。

其の後、オプローモフは何時まで、オリガの恥かしさうな同意と、微笑と、涙と、黙つて差し出す

手と、長い神秘的な瞬きと、世界ぢうに見せびらかすやうな接吻とを夢のやうに考へてゐた。

十二

オプローモフはオリガに會はうと思つて駈けて行つた。オリガの家では彼女は何處かへ出かけて行つたと答へた。彼は村へ行つた——が、其處にも彼女はゐなかつた。と、見ると、オリガは丁度天使が天に昇るやうに丘へ上つてゐた。彼女は軽く足を運び、軽く身體を揺りながら上つてゐた。

オプローモフはオリガの後を追うた。彼女はちよい／＼と草に手を觸れながら飛ぶやうに軽く歩いてゐた。彼は山の半腹まで上ると、オリガに聲をかけた。

オリガは彼を待つた。彼が二サーゼンばかりの處まで近づくと、オリガは少し進み出たが、彼と自分との間に大分間隔を置いて彼の前に立ち止り、そして莞爾とした。

オプローモフもオリガが逃げて行かないのを信じて遂々立ち止つた。オリガは五六歩彼の方へ歩み寄つて、彼に手を貸し、笑ひながら彼を引つ張り出した。

二人は森へ入つた。彼が帽子を脱ぐと、オリガは手巾で彼の額を拭いて洋傘で彼の顔を煽ぎ始めた。オリガは殊に生々してゐた。彼はよく饒舌りもすれば、また元氣もよかつた。そして突然優しい情熱の發作に心を奪はれたが、やがて急に考へ込んだ。

『私が昨日何を爲たか當て、御覽なさい。』二人が樹陰に坐つた時、オリガは斯う訊いた。

『書物を讀んだでせう?』

オリガは頭を振つた。

『ぢや、何か書きましたか?』

『いえ。』

『歌を唄つたでせう?』

『いえ、占ひをして見ましたわ!』と、オリガは言つた。『女中頭のグラフィニーナが昨日來ましてお骨牌占が上手な女ですから、私、頼んで見ましたわ。』

『で、何うでした?』

『何でもないので。最初は路が出ましたわ。次に人の群のやうなものが出て、何處にも美しい男がゐるのよ……何處にもよ。女中頭がカーチャの居る處で、突然に骨牌のキングが私を思つてゐると言つた時なんか、私、眞赤になりましたわ。そして其の女が、私に誰を思つてゐるつて訊かうとしましたから骨牌を紛亂にして逃げて了つたのよ。あなたが私のことを思つていらつしやるのですか?』と、俄かにオリガは訊いた。

『あゝ!』と、オプローモフは言つた。『もちつと少く思ひたいものです!』

『ですが私は!』と、考へ込んでオリガは言つた。『私は最う之れ以外の生活を忘れて了ひましたわ。あなたはこの週間に嘘を言つて、二日もいらつしやらなかつたでせう——憶えてゐて、其の時なんか腹が

立ちましたわ!——私は急に別な人間になつて、悪い者になつて、あなたがザハールをお怒鳴りになるやうに、私もカーチャを怒鳴りましたわ。そして彼女が竊そり泣いてるのを見ても、少しも可哀想だと思はないのよ。叔母には返事もせず、何を言はれても聞きもせず、かと云つて何にも爲たくもなければ何處へも行きたくもなかつたのよ。ところが、あなたがいらつしやると、直ぐにまた別な人間になつて了ひ、カーチャには連翹色の衣服を遣つたりしましたわ……』

『其れが愛なんです!』と、オプローモフは情熱的に言つた。

『何がですか?連翹色の衣服が?』

『何も彼もです!私はあなたの言葉で自分を知りました。私もあなたの傍にゐないと、日も生活もないのです。夜は何時も花が咲いてゐる野原のやうな處を夢見ます。私はあなたを見ると——立派な活動家になります。が、あなたがゐないと——怠屈で頹然します。寝たくなつて、何事も考へるのが厭になります……愛して下さい、そして自分の愛を恥かしいと思はないで……』

と、突然にオプローモフは口を噤んだ。『俺は何を言つてゐるのだらう?俺は斯んなことを言ふ爲めに來たのではないぢやないか!』と、彼は考へて咳をし出し、眉に皺を寄せた。

『ですが、若し私が急に死んだら?』と、オリガは訊いた。

『何を考へていらつしやるのです!』と、オプローモフは平氣で言つた。

『だつて、』と、オリガは言つた。『私が感冒を引いて、肺炎になるでせう。あなたは此處へいらつしても

——私はゐないでせう。私の家へいらつしやると、家の者達は私が病氣だと言ひます。翌る日も矢張りさうよ。私の窓の扉は閉められて了ひます。醫者は頭を振る。カーチャが泣きながら爪先で歩いてあなたの許へ行き、私が病氣で死にさうだと囁んでせう……」

『あゝ』と、オプローモフは突然に聲を發てた。

オリガは笑つた。

『その時、あなたは何うなすつて？』と、オリガは彼の顔を見ながら訊いた。

『何うするとおつしやるのですか？氣が狂つて自殺しますねえ。けれども、あなたは急に癒つてお了ひになるでせう！』

『いゝえ、いゝえ、お止しなさいよ！』と、オリガは怖ろしきうに言つた。『妙な話になりましたわね！

あなたは死んでいらつしやるのなら私の傍へ來ないで下さい。私は死人が怖いよ……』

オプローモフは笑つた。オリガも矢張り笑つた。

『あゝ、私達は本當に子供ねえ！』と、オリガは斯んな話を斥ぞけるやうに言つた。

オプローモフは再た咳をした。

『オリガさん、あのね……私はお話したいことがあるのですが。』

『何に？』と、オリガは生々と彼の方へ振り向きながら訊いた。

オプローモフは怖ろしきうに口を噤んだ。

『さア、おつしやいな。』と、オリガは彼の袖を軽く引きながら訊いた。

『何アに、別段……』と、オプローモフは怦々しながら言つた。

『いゝえ、あなたは何か考へていらつしやるのでせう？』

オプローモフは黙つてゐた。

『若し何か怖いことなら、おつしやらないで下さい。』と、オリガは言つた。『いゝえ、おつしやつて下さい！』と再た俄かに彼女は附け足した。

『いや、何アに、何にもないのですよ。』

『いゝえ、いゝえ、何かあります。おつしやつて下さい！』と、オリガは上着の兩袖をしつかり攔んで

急がせた。オプローモフは彼女に餘り近寄られたので、彼女に接吻しないやうに顔を左右に動かさなければならなかつた。

オプローモフは顔を動かし度くないのだけれども、彼の耳にはオリガの怖ろしい（厭です）と云ふ言葉が響いてゐた。

『おつしやいな！』と、オリガは急がせた。

『言へません。言ふ必要はありません……』と、オプローモフは避けた。

『確信がお互の幸福の土臺だ』とか、（少しでも心臓に起つた事を殺してはいけない、少しでも友の眼を讀まないやうなことがあつてはいけない。）とあなたは何故おつしやつたのですか？之はあなたのお言葉

ではありませんか？」

「私が言はうと思つた事は、たゞ」と、オブローモフは徐々言ひ始めた。「私は斯んなにあなたを愛してゐますが、斯んなに愛してゐますが、若し……」

オブローモフは躊躇つた。

「それから？」と、オリガはもどかしさうに訊いた。

「若しあなたが今他の男を愛していらつしやれば、其の男は尙ほ一層あなたを幸福にして呉れると言ふことです。私は……黙つて自分の悲しみを呑み込み、其の男に自分の位置を譲ります。」

オリガは俄かに彼の上着を手から放した。

「何故？」と、オリガは驚ろいて訊いた。「私にはあなたのおつしやる事は分りませんわ。私はあなたを誰にも譲らないつもりよ。私はあなたが他の女と一緒にいつて幸福におなりになるのは厭ですわ。あなたのおつしやることは、何だか伶俐さうに聞えるけれど私には分りませんわ。」

オリガの視線は考へ沈みながら樹の間を逍遙つてゐた。

「で、あなたのおつしやることは、あなたが私を愛していらつしやらないと云ふことなんですか？」と、やがてオリガは訊いた。

「その反対です。私は自分を犠牲にする程あなたを愛してゐます。何時でも私は自分を犠牲にしてお目にかけます。」

「だつて、何の爲めに？誰があなたに犠牲になつて下さいと言ひまして？」

「私は、若しあなたが、あなたが他の男を愛していらつしやる場合のことを言ふのです。」

「他の男を！あなたは気が狂つてるのではなくつて？私はあなたを愛してゐるぢやありませんか。何うしてそんなことが出来るでせう？あなたは他の女を愛していらつしやるの？」

「何をお訊きになるのです？私が何を言つてゐるか、あなたに分らないことはないでせう。あなたは私を信じていらつしやるのでせう！私は其んなことを言ふつもりではなかつたのです……」

「ぢや、あなたは何を言はうと思つてゐられたの？」

「私が言はうと思つたことは、あなたの前に私は罪を犯してゐること、疾くから罪を犯してゐることです……」

「何うして？どんな罪？」と、オリガは訊いた。「私を愛してはゐらつしやらないのですか？冗談でも爲てゐらしたのですか？さア、おつしやつて下さい、速く！」

「いゝえ、いゝえ、そんな事ぢやないのです！」と、オブローモフは悲しさうに言つた。「それは斯う云ふ事です……」と、彼は言ひにくさうに言ひ始めた。「私達は會つてゐるでせう……竊そりと……」

「竊そりと？何うして竊そりなの？私は何時でもあなたとお會したことを叔母に言ひますわ……」

「何時でも？」と、不安さうにオブローモフは訊いた。

「何故それが悪くつて？」

『私が悪かったです。私が疾くに、そんなことをしては……言はずに置いては不可ないとあなたに言へばよかったです……』

『あなた、おつしやつたわ。』と、オリガは言った。

『言ひましたか？へエー！では、私は……灰めかしたのですね。ぢや、私は自分のすべき事をしたのですねえ。』

オブローモフは元氣附いて、オリガが容易く彼から義務の轡を退けて呉れたことを喜んだ。

『それから？』と、オリガは訊いた。

『それから……たゞ其れだけです。』と、オブローモフは答へた。

『さうぢやないでせう！』と、オリガは見抜くやうに言った。『まだ何かありますわ。あなた悉皆おつしやらないんですわ。』

『それから私は斯んなことも考へました……』と、オブローモフは言葉を成るべく打ち解けた調子にしようと思ひながら言ひ始めた。

『それは……』

オブローモフは立停つた。オリガは彼を待つてゐた。

『それは、もう少し私達の會ひ方を少なくしなければ不可いと言ふことです……』と、オブローモフは言つて、倅々とオリガを見た。

オリガは黙つてゐた。

『何故？』と、やがてオリガは考へながら言つた。

『蛇が私を噛むのです。其れは——良心ですええ……私達は斯んなに長い間、二人つきりであるのですから、私は波立を感じ、私の心臓の動悸が止みさうなんです。あなたも矢張り平靜ぢやないでせう……私は怖れるのです……』と、オブローモフは辛つと言つた。

『何を？』

『あなたは若いから、種々な危険を御存じないのです。ねえ、オリガさん。人間は何らかすると自分に對して権力がないことがありますよ。人間の中に地獄の力が入り、心に暗闇が蔽ひかゝつて、眼には電光が輝きます。明らかな智慧も味みまず。純潔や無垢に對する敬意さへ——皆な旋風になつて飛んで了ひます。人間はさうした時には自分を忘れて、たゞ情熱を呼吸し、自分を支配することが出来なくなります——其の時、脚下に深淵が開けるのです。』

オブローモフは溜息を吐いた。

『で、何うだとおつしやるの？開けてもいゝぢやありませんか！』と、オリガは眼を大きくして彼を見ながら言つた。

オブローモフは黙つた。其れ以上は言ふこともなければ、また言ふ必要もなかつたのだ。

オリガは、書物の中に何かを読むやうにオブローモフの額に出来た皺の中にも何物かを読まうとして

長い間彼を見てゐた。そして彼の一言一句と、彼の眼附とを想ひ出し、自分の戀の歴史に考へ及び、更に庭での暗い晩のことまで想ひ出して突然に顔を赧くした。

『あなたは何時も詰らないことばかりおつしやるのねえ!』とオリガは、傍を見ながら速口に言つた。

『私、あなたの眼の中に電光なんか見なかつたわ……あなたは私の大部分を見ていらつしやるでせう……私の乳母のクジミニーナのやうに!……』と、オリガは附け加へて笑つた。

『オリガさん、あなたは冗談をおつしやるけれども、私は眞面目に言つてゐるのですよ……まだ悉皆言つて了はないのです。』

『ぢや、後は何に?』と、オリガは訊いた。『こんどはどんな深淵なの?』

オプローモフは溜息を吐いた。

『それは、私達が會つては不可ないと云ふことです……たつた二人つきりで……』

『何故?』

『良くないからです……』

オリガは一寸考へ込んだ。

『さうよ、世間では、そんな事を爲ては不可ないと言ひますわ』と、オリガは考へ込みながら言つた。

『ですが、何故でせう?』

『世間が噂をしたり、知つたりすると、直ぐに擴まりますから……』

『誰が言ひます? 私には母親がないのですもの。母親だけは、何故あなたとお會ひするかと云ふことを私に訊くことが出来ません。私も母親の前でなら泣いて答へ、私が何にも悪いことをしてゐないことや、あなたも矢張りさうだと云ふことが出来ます。母親も私の言葉を信じて呉れるでせう。他に誰が言ひますか?』とオリガは訊いた。

『叔母さんが』と、オプローモフは言つた。

『叔母が?』

オリガは悲しさに頭を掉つた。

『叔母は決して訊きませんわ。若し私が何處かへ行つて了つても、叔母は私を尋ねも捜もしないでせう。私も、何處に居つて何をしてゐると云ふことを叔母に言ひに歸りはしません。他に誰?』

『他の人は皆なです……此間もソーニチカが私とあなたを見て笑つてゐましたし、あの女と一緒にゐた他の男や女達も矢張り笑つてゐたでせう。』

オプローモフは其の時から自分が感じてゐた恐怖を悉皆オリガに物語つた。

『あの女が私だけを見てゐる間は』と、オプローモフは附け加へた。『まだ何ともなかつたですが、其の眼をあなたに向けた時に、私の手足は冷たくなりましたよ……』

『それで?……』と、オリガは冷淡に訊いた。

『それで、其の時から私は夜も晝も心配して、噂を妨ぐ方法に頭を砕いてゐたのです。あなたを驚ろかさ

ないやうに心配してゐたのです……私は疾く此の事をあなたにお話ししようと思つてたのですが……」
『詰らない心配ねえ』と、オリガは反對した。『私はあなたから聞かないでも知つてゐますわ……』
『何うして知つてゐたのです？』と、オブローモフは吃驚して訊いた。

『それは斯うなの。ソーニチカは私に話をしてゐるうちに、私を擦つたり、皮肉つたりして、あなたと何う云ふ風に關係しなければならぬかと云ふことまで教へたのですもの……』

『オリガさん、あなたはその事を一言も私に言はなかつたのですね！』と、オブローモフは詰るやうに言つた。

『あなたも今迄、心配していらつしやることを些つともおつしやらなかつたでせう！』

『で、あなたはソーニチカさんに何と答へました？』と、オブローモフは訊いた。

『何とも答へませんわ！何と答へられるでせう？たゞ顔を赧くしましたわ！』

『あゝ！飛んだことですね。あなたは顔を赤くしたのでですね！』と、吃驚してオブローモフは言つた。

『私達はあまり不注意です！今後何うなるでせう？』

オブローモフは聞き訊すやうな眼附をしてオリガを見た。

『知りませんわ』と、オリガは優しく答へた。

オブローモフはオリガに心配を別けて安心をし、彼女の眼と明らかな言葉との中に意志の力を汲まうと思つたのであつた。ところが生々した決心の答をオリガから聞かなかつたので彼は俄かに落膽した。

オブローモフの顔は弛んで躊躇を現し、彼の眼は悲しさうにキョト／＼と周囲を見廻した。彼の内部には最う軽い戦慄が起つてゐた。彼は殆んどオリガのことを忘れてゐた。彼の前には、ソーニチカや其の夫やお客などが集まつてゐた。彼等の話聲や笑聲さへ聞えた。

オリガは何時もの機智も出さずに黙つたまゝ冷やかにオブローモフを見てゐた。そして更に一層冷やかに『知りませんわ』と言つた。が、オブローモフは平氣であつた。彼は『知りませんわ』と云ふ言葉の中に潜んでゐる意味を捉へることが出来なかつたのである。

オブローモフも黙つてゐた。他人の助力がなければ彼の考へと計畫とは成熟しなかつた。熟し切つた林檎のやうに自でに落ちるやうなことは決してなかつた。千切られるまでは決して落ちなかつた。

オリガは暫くオブローモフを見てゐたが、やがて外套を着たり、枝から肩掛を外して徐かに頭へ載せたりして洋傘を取つた。

『何處へいらつしやるのです？まだ早いのに！』と、オブローモフは俄かに我に歸つて言つた。

『いゝえ、もう遅いわ。あなたのおつしやつた通りですわ』と、オリガは悲しさうに沈んで言つた。『私達は餘り入り過ぎて出口を見失つたのよ。速く別れて今迄の跡を掃き清めなければなりません、左様なら！』とオリガは淡白と冷淡に言ひ、一寸お辭儀をして路を歩き出さうとした。

『オリガさん、まア待つて下さい！何うして會はずにゐられませう。それに私は……オリガさん……』
オリガは之を聞かずに急いで歩き出した。砂はザク／＼とオリガの靴の下で嗚鳴つた。

『オリガ・セルゲイウナさん!』と、オプローモフは叫んだ。
聞えないらしく歩いてゐた。

『何うか、此處へ歸つて下さい!』と、オプローモフは叫んだが、最うその聲は涙に曇つてゐた。『罪人の言ふことも聞く必要があるのに……あゝ! オリガさんには心があるのだらうか? ……あれが女と云ふものだ!』

彼は腰掛けて両手で眼を蔽うた。足音は最う聞えなかつた。

『行つて了つた!』と、オプローモフは殆んど怖ろしい事でももあるやうに言つて頭を擡げた。

オリガは彼の前にゐた。

彼は嬉しさうにオリガの手を握つた。

『あなたは行かなかつたのですか? 行かないのですか? ……』と、オプローモフは言つた。『行かないで下さい。あなたが行つて了つた後では——私は死人だと想つて下さい!』

『ですが、若し私が行かなければ、私は罪人です。あなたもさうよ。イリヤさん、此の事を考へて下さい。』

『あゝ、さうぢやありません……』

『何うしてさうぢやないのですか? 若しソーニチカと、あの女の旦那さんとが、私達が一緒にゐるのも一度見て御覽なさい——私は死んで了ひますわ。』

オプローモフは溜息を吐いた。

『まア、お聴きなさい』と、オプローモフは口唞りながら急いで言つた。『私はまだ悉皆言つて了はないのです……』と、言つて言葉を切つた。

オプローモフにとつて家に居ると云ふことは、單純で、餘儀ないことだと思はれてゐたし、

また彼の幸福として彼に微笑んでゐたが、今ではそれは突然に一種の深淵になつた。オプローモフには此の深淵を乗り起して行かうと云ふ勇氣が起つた。彼は勇敢な歩調で進んで行かうと決心した。

『誰か來ましたわ!』と、オリガは言つた。

傍の路に足音が聞えた。

『ソーニチカさんが來たのではありませんか?』と、オプローモフは訊き乍ら吃驚して凝と眼を据ゑた。

二人の男と一人の女とが來た。皆な知らない人であつた。オプローモフは漸く安心した。

『オリガさん』と、オプローモフは急しさうに言つて彼女の手を取つた。『あれ、彼處の誰もゐない處へ行きますせう。彼處へ行つて腰掛けませう。』

オプローモフはオリガを腰掛けさせて、自分は彼女の傍の草の上に坐つた。

『あなたは昂奮して歸らうとなすつたが、オリガさん、私はまだ悉皆言つて了はないのですよ』と、オプローモフは言つた。

『再た私を擲擧うと、私は再た行つて、今度は最う歸りませんよ』と、オリガは言つた。『一度私の涙が面白かつたので、今も多分あなたは私を踏みつけやうとなさるのでせう。そして段々私を御自分の奴隷

にし、勝手にし、私の心を読み、それから御自分でも泣いたり、驚いたりして私まで驚かせ、其の揚句に何うしたらいゝだらう？と御訊きになるのでせう。けれど、イリヤ・イリイチさん」と、オリガは俄かに腰架から起ち上つて傲然と附け加へた。「私はあなたを知り、あなたがどんな戯れをなさるかを知つた……時から非常に大人になりました。私は最うあなたに涙を見せるやうなことをしません……」

「あゝ冗談ぢやない、私は戯れてゐるんぢやありません！」と、オブローモフは辯解するやうに言つた。「ぢや、なほ更あなたは信用が出来ません。」と、オリガは冷やかに言つた。「ですからあなたのおつしやる危険とか、警戒とか、謎とかに對して私は一言言つて置きます。今日お會するまで私はあなたを愛してゐました。またあなたが私に何をなさるのかと云ふことも知りませんでした。が、今は最う分りました」と言つて、オリガは其處を去らうと決心した。「私はあなたに最う相談しません。」

「分りました。」と、オブローモフはオリガの手を取つて腰架へ腰掛けさせながら言つた。そして心を落着ける爲めに一寸黙つて、「察して下さい。」と言ひ始めた。「私の心は一つの希望に満たされてゐます。頭も一つの考へに満たされてゐます。が、意志と舌とが私の思ふ通りにならないのです。言ひ度いと思ひますが、言葉が舌から出ないのです。が、どんなに單純に……どんなに……オリガさん、察して下さい。」

「私には、あなたが何を考へていらつしやるか分らないのですもの……」

「あゝ、何うか、「あなた」なんて言はないで下さい。あなたの傲慢な眼附は私を殺します。あなたの言葉は何れも寒中のやうに凍つてゐます……」

オリガは笑つた。

「あなたは發狂者よ！」と、オリガは彼の頭へ片手を載せて言つた。

「さうです、さうして下さい。それで私は天來の思想と言葉とを受けました！オリガさん」と、オブローモフはオリガの前に跪ひざまづいて言つた。「私の妻になつて下さい！」

オリガは黙つたまゝ彼から顔を背けた。

「オリガさん、私に手を貸して下さい！」と、オブローモフは續けた。

オリガは貸さなかつた。オブローモフは自分で手を取つて唇に壓おさし着けた。オリガは其れを退けもしなかつた。手は温かく、柔らかく、そして幾らか濕々じめくしてゐた。オブローモフはオリガの顔を覗き込まうとした——が、オリガは益々顔を背けた。

「沈黙ですか？」と、オリガの手に接吻しながら、オブローモフは怏々おどろと訊いた。

「同意の印しるしよ！」と、オリガは靜かに言つたが、矢張り彼の顔を見なかつた。

「あなたは今、何を感じていらつしやるのですか？何を考へていらつしやるのですか？」と、オブローモフは恥かしい同意と、涙とに就いての自分の空想を憶おもひ出しながら訊いた。

「あなたの考へと同じことを」と、オリガは何處か林の方を見續けながら答へた。が、彼女の胸は波立つてゐた。オリガは自分を壓おさへてゐるのであつた。

「彼女の眼には涙があるのだらうか？」と、オブローモフは考へた。オリガは頑固に下を見てゐた。

『あなたは冷静ですか？あなたは落着いてゐますか？』と、オブローモフは彼女を自分の方へ引き寄せようとしながら訊いた。

『冷静ではありません。けれど、落着いてゐますわ。』

『何うして？』

『斯うなることを疾から知つてゐましたし、また始終考へてゐましたから。』

『疾くから』と、オブローモフは驚いて繰り返した。

『さうよ、あなたに連翹の枝を上げた時からよ……私、心の中であなたを……』

オリガは言つて了はなかつた。

『あの時から！』

オブローモフは両手を擴げて、オリガを抱かうとした。

『深淵が開け、電光が輝いたわ……用心しなけりや！』と、オリガは巧みに言ふと、彼の抱擁をスルリと迂り脱けて、彼の手を洋傘で遮ぎつた。

オブローモフは『厭です』と云ふ怖ろしい言葉を想ひ出して心を壓へた。

『けれどもあなたは一度もそんなことをおつしやらないし、少しもそんな様子を見せなかつたぢやありませんか……』と、オブローモフは言つた。

『私達はお嫁に行くのではなくて遣られるか、貰はれるかするのでありますもの。』

『あの時から……まさか？……』と、オブローモフは考へ込んだまゝ繰り返した。

『あなたは、私があなただを理解せずに、此處にあなたと一緒にゐたり、毎晩四阿の中で腰掛けたり、あなたのおつしやることを聞いたり、信じたりしてゐるのだと思つてゐらしたの？』と、オリガは傲慢さうに言つた。

『さうです……』と、オブローモフは顔色を變へ、オリガの手を放しながら言つた。

オブローモフの考へは異様に慄へた。オリガは彼を傲慢さうに落着いて見てゐた。そして固く決心をして彼の言葉を待つてゐた。が、オブローモフは此の時、傲慢と決心とを望まなかつた。寧ろ涙と、情熱と、幸福の瞬きとを僅か一分間でも見たいと望んだ。そして其の次に亂されぬ平和の生活が流れて來るやうに望んだ。

ところが豫期しない幸福から迷り出る涙もなければ、恥かしさうな同意もなかつた！之を何う解釋したものだらう！

オブローモフの心には蛇のやうな疑念が目醒して匂ひ出した……オリガは彼を愛してゐるのだらうか、それとも他へ嫁に行くのだらうか？

『けれども他にまだ幸福へ行く路がありますよ』と、オブローモフは言つた。

『どんな路なの？』と、オリガは訊いた。

『何うかすると、愛は辛抱もしなければ、我慢もせず、また打算もしないことがあります……女は何時

でも火と、戦慄の中に居つて、直ぐに非常な苦痛と歡喜とを感じるものです。其の苦痛と歡喜と云ふのは……」

『其の路と云ふのは私に分りませんわ。』

『其の路といふのは、女が平和でも、噤でも、尊敬でも、凡てを犠牲にすることです。そして愛の中に其の償を見附けることです……女は愛を凡てのものと交換します。』

『私達にも其の路が入用なんでせうか？』

『いゝえ。』

『あなたは、私の平和や尊敬を失なつても、其の路を行つて幸福を捜さうと思つていらつしやるのではなくつて？』

『いゝえ、いゝえ！神様に誓ひます。決してそんなことはありません。』と、オブローモフは熱心に言つた。

『ぢや、何故あなたはそんなことをおつしやるの？』

『實際、自分でも分りません……』

『ア、分りましたわ。あなたは、私が自分の平和を犠牲にしてあなたと御一緒に其の路を行くか何うかを知らうとなすつたのでせう？さうぢやなくつて？』

『さうです。或はあなたのお察しの通りかも知れません……何うです？』

『決してそんな路を行きませんわ！』と、オリガはきつぱり言つた。

オブローモフは一寸考へて溜息を吐いた。

『さうですか。其の路は怖ろしい路で、女が男に隨つて其の路を歩くには——滅びるか、最後まで愛するかするには非常な愛がいりますからね。』

オブローモフは索るやうにオリガの顔を見た。が、オリガは平氣でゐた。たゞ、肩の上の皺がびくびくと動いたが、その顔は落着いてゐた。

『その代り』と、オブローモフは言つた。『あなたの小指にも及ばないソーニチカさんは、あなたに、會つた時、直ぐにあなたを見分けることが出来ないでせう！』

オリガは莞爾とした。彼女の眼は晴々とした。が、オブローモフは自尊心の要求に魅せられて、オリガの心に犠牲を願ひ、彼女の心に酔はうとしてゐた。

『その代り男達はあなたの傍に寄る。尊敬の餘り斷えず悸々とあなたを見、大膽で狡猾な微笑をあなたに注いでせう……』

オブローモフはチラリとオリガを見た。オリガは熱心に洋傘で砂の上の石を動かしてゐた。

『あなたが客間へ入ると、幾つかの婦人の帽子は不満に揺れるでせう、其の中の或る者は、座を變へてあなたの傍を離れるでせう……が、あなたの誇りには變りはありません。而もあなたは自分が彼等より高尚で立派なことを明らかに意識なさるでせう。』

『何の爲めにあなたは私にそんな怖いことをおつしやるの？』と、オリガは落着いて言つた。『私は何う

してもそんな路を行きませんか。」

『何うしても？』と、オブローモフは悲しさに訊いた。

『何うしても！』と、オリガは繰り返した。

『さうすれば』と、オブローモフは考へ込んで言つた。『あなたに恥を見る力が足りないやうになるでせう。多分あなたは死に驚かないでせうし、刑罰も怖れないでせうが、刑罰を受けるまでの心備へと、刻一刻に味ふ拷問とを忍べないやうになるでせう。そして病み衰へるのでせう——さうでせう？』

オブローモフはオリガがどんな顔をするかと、矢張り彼女を見てゐた。

オリガの眼は楽しさうであつた。怖ろしい光景も彼女を驚ろかすことは出来なかつた。彼女の唇には軽い微笑さへ現はれてゐた。

『私は病氣をするのも、死ぬのも厭ですわ！そんなことをしないで、』と、オリガは言つた。『そんな路を歩かないでもつと強く愛することは出来るんですもの……』

『何うしてあなたは其の路を歩かないのです？』と、オブローモフは執拗く、悲しさに訊いた。『若しあなたに怖くなかつたら……？』

『それは、其の路を行くと……後で屹度……誰でも別れなければならぬし、』と、オリガは言つた。『私はあなたと別れなければならぬからよ！……』

オリガは立ち寄り、オブローモフの肩に手を載せて、長い間彼を見てゐたが、俄かに洋傘を傍に投げ出

し、素速く彼の頸を両手で抱いで熱い接吻をした。そして全身に昂奮を感じながら自分の顔をオブローモフの胸に押し附けたまゝ、静かに附け足した。

『決してその路を行きませんわ！』

オブローモフは嬉しさうな呻き聲を出しながら草の上へ坐り、オリガの脚下に突伏した。

千八百五十七年

手摺

大正六年一月廿二日印刷
大正六年一月廿五日發行

(定價金九拾五錢)

◀フモーロフオ▶

翻譯者

山内封介

發行者

東京市牛込區矢來町三番地中の丸
佐藤義亮

發行所

東京市牛込區矢來町中の丸
新潮社
電話番町(長)八〇九番
電話番町(短)二二四番
振替東京一七二番

印刷所

東京市神田區宮本町五
番下谷五九〇八
(印刷者)

新潮社印刷部
高橋治一

下卷……………(近刊)……………目下印刷中

■ 縮 刷 全 譯 叢 書 ■

露文より移植せる唯一の完全譯

全 譯 戰 争 と 平 和

トルストイ作
昇曙夢譯
米川正夫譯

本書はナポレオン侵略時代の露西亞の社會相を經とし、トルストイ自身の閱せる深刻にして痛切なる苦悶を緯とし、構想の雄大、描寫の靈活、共に無双。人物の主要なるもの二十餘人、中に、作者の化身とも見る可き主人公ピエルとナポレオンとに於て精神界の偉人と物質界の偉人との逢遭を描けるが如き、實に古今の文學中稀に見るの壯觀たり。今露文學界の權威たる昇氏と、新進露文學家として知られ、現に陸軍露語教授の職に在る米川氏との努力により、茲に四千枚の大作、その一字を略せざる全譯を公にす。而して是れ直ちに原露文より移植せるものにして、原作の面目潑刺たるの譯書なる一事を特記せざる可からず。

全完
六了
卷す

總洋布美本
箱入最上製
定價一冊七十五錢
郵送料一冊八錢

全六冊一時に
申込まるゝ時
は小包料共
金四圓
に特別割引す

全六卷二千四百頁の大翻譯は
茲に完了を告げたり。一字を略
せざるの全譯たるは勿論、縮刷
版となして定價は無比の至廉也

■ 縮 刷 全 譯 叢 書 ■

□ 人間赤裸々の姿を示して一糸掩はず

▼是れ實に萬人必ず讀むべき人間の聖書也！

ソルツ
オ懺悔錄

全二冊
完了

生田長江
大杉榮譯

紙數約一千頁 □ 總洋布最上製 □ 一冊九拾錢 □ 送料八錢 (第三版)

近代主義の第一人者としてのソルツオの偉大は茲に説くを須むざる也。此書は、彼が提げて審判の廷に立たんとするの覺悟を以て書ける赤裸々の自傳にして、實に血と涙とを以て記されたる懺悔錄也。上卷は、一個鋭敏多感の少年が幾多の境遇に轉つゝある間に心身の次第に眼醒めゆく狀を描けるものにして、その少年の空想の華やかさ、とりとめなき戀の數々、更に性慾の發展のすさまじさ、彼は些の憚るところなく巨細に之を書けり。下卷は、運命日に非にして、數奇更に數奇を重ねるソルツオの晩年を曲盡せるものにして、彼が面目愈々躍然、その事實としての興味も、亦その感想の深刻なる點も、下卷に至りて益々加はる。譯書は生田大杉二氏の苦心に成る。生田氏は居然として譯壇第一流の士。大杉氏は、少壯佛文學者にして、亦一面革命家としてソルツオの自由平等思想に共鳴する所多きの士。本書の譯者としては、適材寔に適所を得たるものと云ふ可き也。

■書叢譯全刷縮■

近代的戀愛描寫の極致

■死の勝利

ダンヌンツイオ作
生田長江氏譯

再出版
總洋布最上製
紙數五百廿頁
定價九十五錢
小包料八錢

縮刷版
新出

森田草平氏は、『死の勝利』は自分にとつて、人が此世に生れて始めて経験する天變地異のやうなものであつたと云へり……此の書の題材にとれるは、近代人の近代の特色を發揮したる戀愛也。接吻せられたる額の脊にも、自我の冷笑するを禁じ難き戀愛也。渴望と、唾棄と、同情と、敵意と、靈感と、淫靡とを一にしたる病的戀愛の一切也——近代の藝術界に於て最も權威ある傑作たること、亦何人か疑ふものあらんや。

文學士 久米正雄氏譯

■沙翁名作選

現代語譯

紙數四百十頁
總洋布最上製
定價金 一圓
郵送料 八錢

シエクスピヤの代表作たる『オセロー』、『ハムレット』、『ロメオとジュリエット』の三大悲劇を平明暢達なる現代語に譯せるもの。譯者久米氏は、新進劇作家として知られ、沙翁研究に沈潜すること久しきの士也。

■ニイチエ全集

生田長江氏譯

數年來頗に勃興し來れる外國文學の輸入事業も、既に漫然たる抄出的翻譯の時代を經過して、まさに嚴肅着實なる全集刊行の時代に入らむとす。而してニイチエの如きは、トルストイと相並んで近代の文藝思想界の王者として、最も眞摯の研鑽を捧げらる可きもの、即ち茲に生田氏が努力の成果たる此全集譯を公にする所以也。

人間的な餘りに人間的な

上卷發行

▼總洋布最上製▼紙數五百五十頁▼定價一圓六十錢、送料十二錢

別に題して『自由思想家の偽の書冊』と云ふ。人間的なる餘りに人間的なる現實の冷光を以て、理想的なる餘りに理想的なる幻影を照破し、酷烈なる偶像破壞の鐵槌を打ち下したるものはこれ也。著者自ら晩年に回顧していへらく、『予は此書を以て予の本性に合はざるものより脱却せり』と。ニイチエが嚴密にニイチエらしき思想と表白とに到達したる第一の所産はこれ也。全篇を通じて、珠玉の如く、匕首の如く、火藥の如きニイチエ獨特の警語と箴言とより成る。その箴言と警語との、如何に簡潔にして明快なるかを、如何に尖銳にして辛辣なるかを、如何に激越にして暴烈なるかを見よ。

トルストイ叢書

中版三百二十頁
定価七十錢
郵送料一冊八錢

編一第

我が宗教

生田長江氏譯
(再版出来)

「我が宗教」はト翁著作中最も重要なものの一也。彼が独自の立場より近世の誤れる基督教を是正し、まことの信仰とは何ぞやを説くに、その半生の心血を凝ぎたる、にがく苦しき體驗を以てせるもの。ヤスヤナ・ポリヤナを以て新しきエルサレムとなす可くば、此書は正に新しき聖書也。我等何を信ずべき乎に思ひ悩む人は就て見よ。

編二第

イワン・イリイチの死

福士幸次郎氏譯
(再版出来)

平凡なる一官吏の生涯を通じて、「死」の問題を取扱へる小説。偉大なる魂のうめきをさながらに聞くが如き作品にして、ト翁の短篇中、最も傑出せるもの也。附録の「主人と下男」は恐しき露西亞の吹雪の夜を背景として主人と下男とを點綴し、讀む者の膚に粟せしむる沈痛無比の作。「高架索の捕虜」は頗る浪漫的色彩に富める名篇也。

編三第

幼年・少年

江馬 修氏譯
(最新刊)

是れトルストイが初期の作にしてその生ひ立ちの記也。彼が藝術家としての手腕と地位とを始めて歐羅巴の文壇に確保したるは實に此の作にして、偉大なる靈魂の芽生と成長とは、其の嚴密靈活なる自己解剖の筆によりて遺憾なく描き盡くさる。眞に是れ萬人必ず讀む可きの書。何ぞ必ずしも文藝の士にのみ薦む可きものならんや。

編四第

ハヂ・ムラード

相馬御風氏譯
(新刊)

ト翁遺稿の一。藝術的價値に於て自餘の遺著を遙に凌駕する傑作と稱せらる。材を露國政府が高架索を征服したる當時にとり、回々教の一勇士を主人公として描ける東洋的色彩の豊かなる小説也。妻子を救はん爲に横死を遂げたる主人公ハヂ・ムラードを通じてト翁がその戦争觀を洩らせる此作は、強き力を以て何人をも打つものあらん。

刊 續

■ 閩

の 力

中村吉藏氏譯

以下續々

年

江馬

修氏譯

刊行す

175
森鷗外氏序 生田長江氏譯 (第六版出來)

■ニイ著 ツアラトウストラ

總洋布最上製
定價一圓八十錢
小包料十二錢

是れ輓近歐洲思想界の巨人ニイチエの代表的著作也。彼の奔放なる詩歌や、深刻なる哲學や、悲壯なる宗教や、悉く收めて此の中に在り。以てニイチエの眞面容を知る可く、以て輓近思潮そのもの、精髓を知る可し。譯は生田氏が數年の苦心に成り、精嚴にして莊重、よく原文の精神風格を傳へたり。

□刷縮□

ダア著 種の起原

大杉榮譯
全二冊
總洋布製美本
袖珍一千百頁
定價一圓廿錢
郵送料十二錢
(版四第)

十九世紀の文明を根柢より動かしたるダアキンの進化論の中樞を爲すものは、『種の起原』也。此一篇は、あらゆる新思想、新哲學、新科學を孕めるものにして、實に新文明の母胎と稱すべきもの也。これを以て單に生物學上の論著となすが如きは誤まれるの甚だしきものにして、此書は、あらゆる職業、あらゆる階級の人々に亘りて普遍なる可きの知識を含む。文明國民の必讀すべきものたるやまた論なき也。

354
97

終